

# 文化庁国立近現代建築資料館 紀要

第5号 2025 (令和7年)



**Bulletin of National Archives of Modern Architecture,  
Agency for Cultural Affairs**

**Vol. 5 2025**

# 文化庁国立近現代建築資料館 紀要

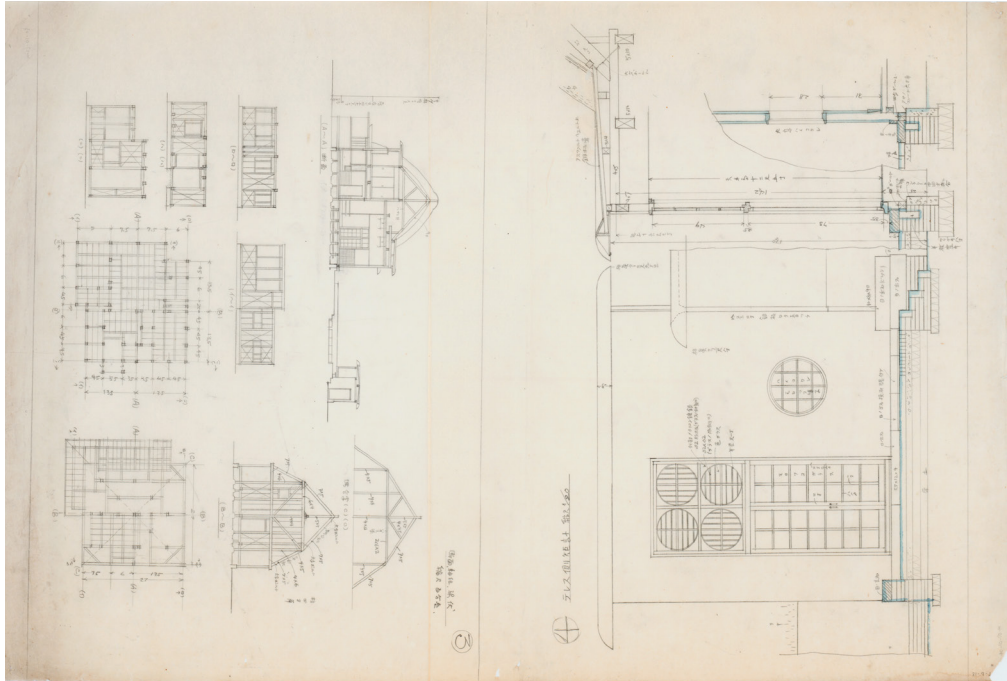
第5号 2025(令和7年)

Bulletin of National Archives of Modern Architecture,  
Agency for Cultural Affairs

Vol. 5 2025

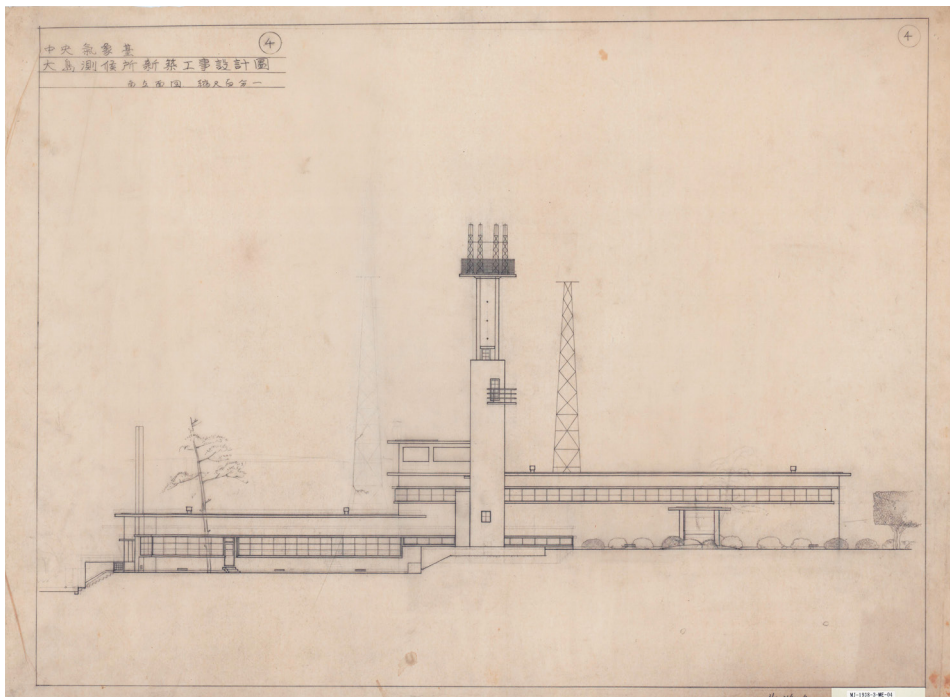
## 堀口捨己建築設計資料

堀口捨己 | 紫烟荘 | 1926 | 埼玉県 | 非現存



(左)軸組図・梁伏図、1:100、(右)テラス側矩計図、1:20、鉛筆・和紙、550×820

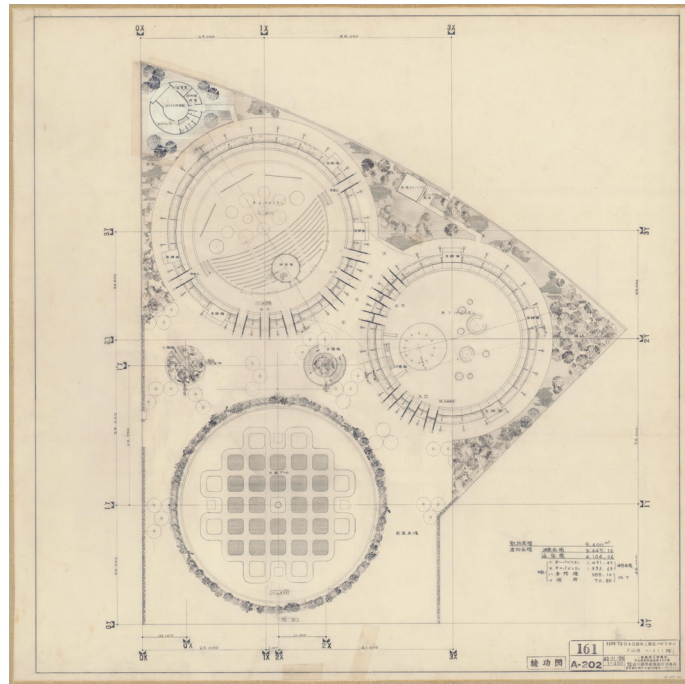
堀口捨己 | 大島測候所 | 1938 | 東京都 | 非現存



南側立面図、1:100、インク・和紙、550×750

## 前川國男建築設計資料

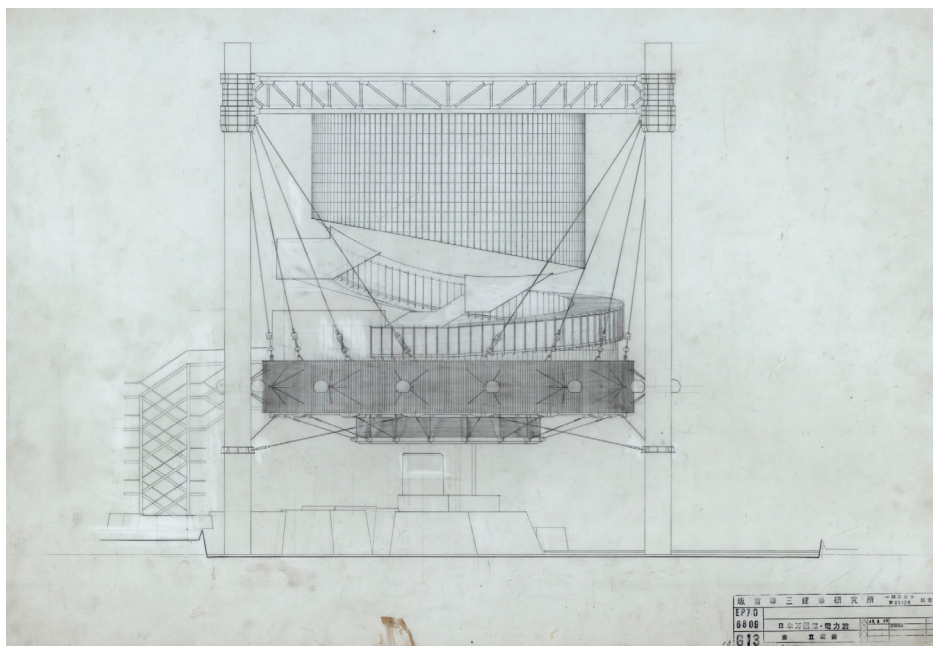
前川國男 | 日本万国博覧会 自動車館 | 1970 | 大阪府 | 非現存



平面図ソノ1 (1階)、1:200、鉛筆・インク・トレーシングペーパー、800×800

## 坂倉準三建築設計資料

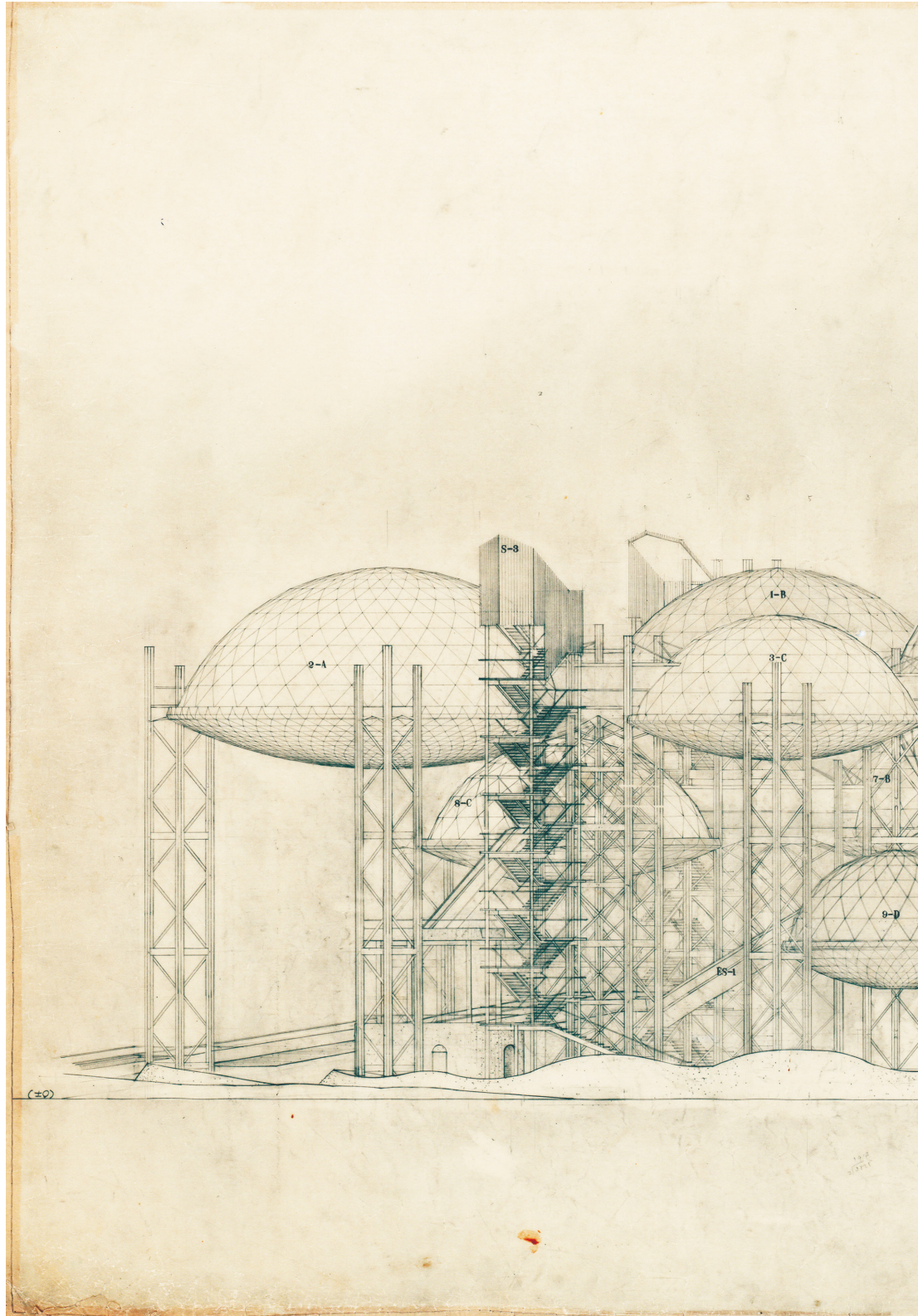
坂倉準三建築研究所 | 日本万国博覧会 電力館 | 1970 | 大阪府 | 非現存



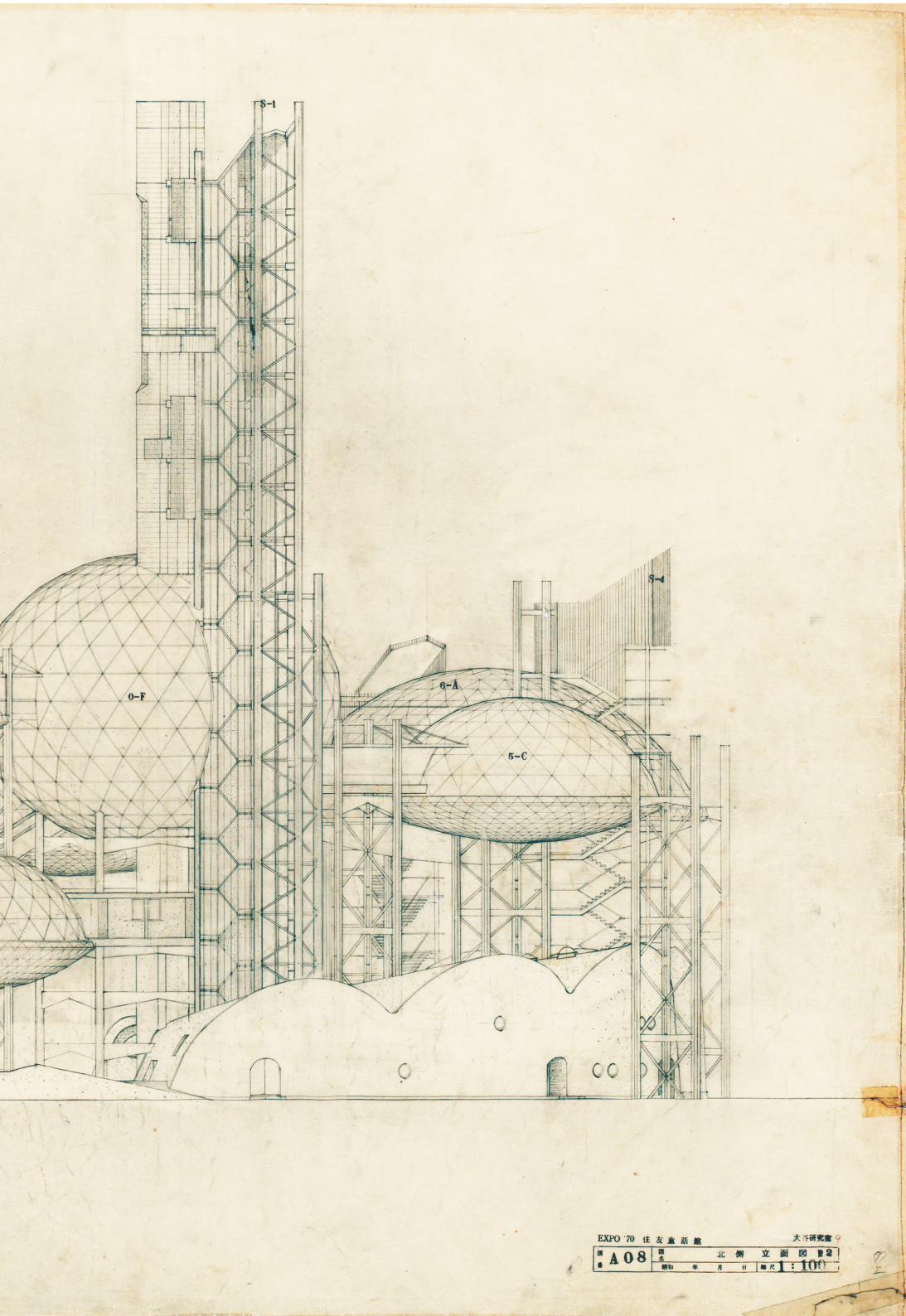
南立面図、1:100、鉛筆・フィルム、551×801

大谷幸夫建築設計資料

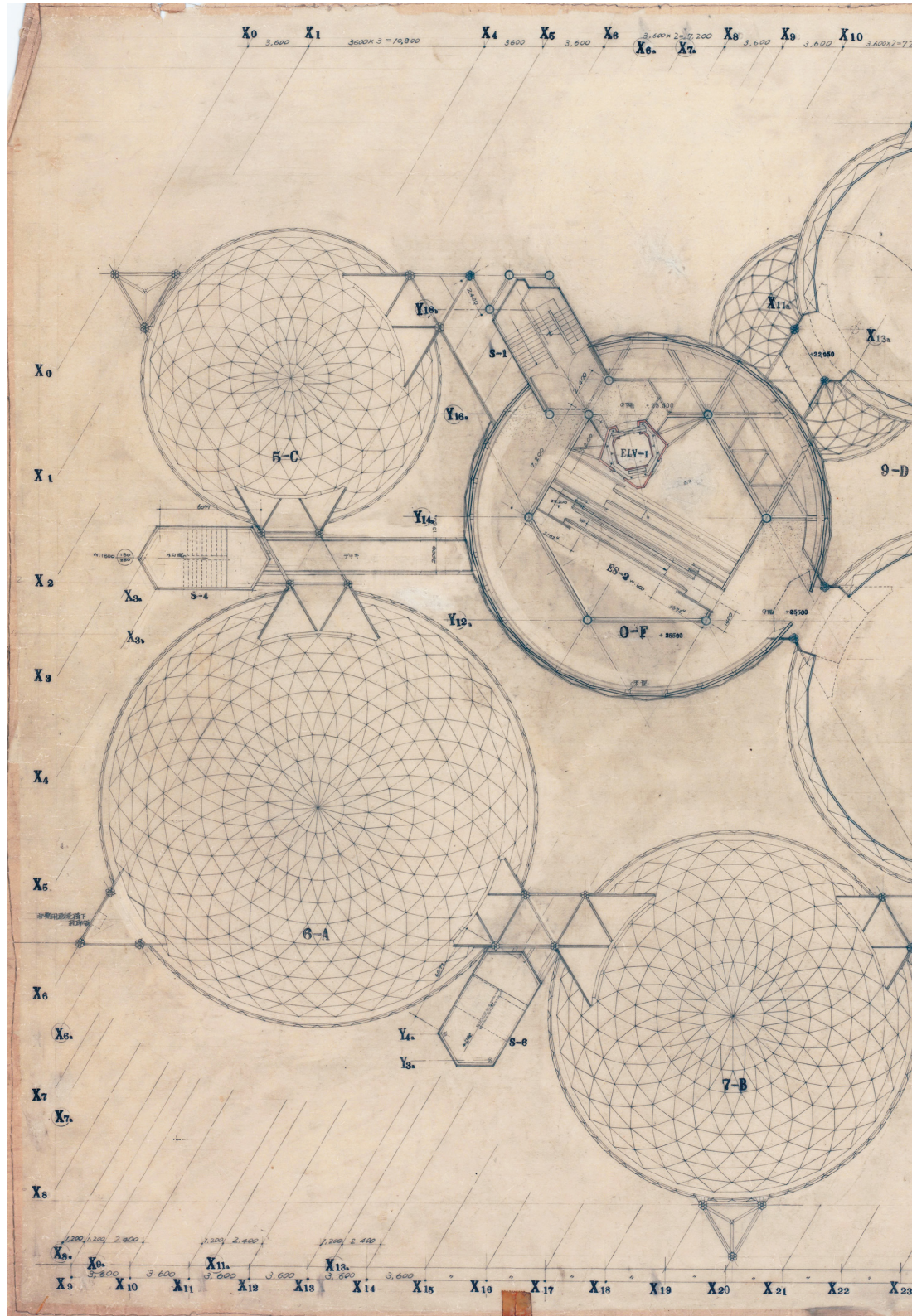
大谷幸夫 | 住友童話館 | 1970 | 大阪府 | 非現存



北側立面図、1:100、鉛筆・トレーシングペーパー、800×1095



大谷幸夫 | 住友童話館 | 1970 | 大阪府 | 非現存



9階平面図、1:100、鉛筆・トレーシングペーパー、800×1095



# 文化庁国立近現代建築資料館 紀要

第5号 2025 (令和7年)

## 目次

- 
- 口絵
- 2 NAMA's Collection
- 論稿
- 10 文化庁国立近現代建築資料館を取り巻く環境の変化と今後の展望  
寺本恒昌
- 論考
- 17 展覧会「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」の展示企画について  
小林克弘、王 聖美、久下高豊
- 調査報告
- 25 近現代建築に関わるポーンデジタル資料の継承に関する調査について  
小池周子、秋岡安季
- 活動報告
- 33 近現代における日記資料のアーカイブをめぐる現状と課題  
一角田栄資料調査と国内外の日記資料所蔵施設へのヒアリングを通して—  
長谷川 香
- 39 菊竹清訓建築アーカイブズ資料整理における資料量把握と長期整理の課題  
—概要調査段階の想定と約10年間の整理実態を踏まえて—  
齋藤信吾
- 資料紹介
- 43 村田豊建築設計資料の整理及び万国博覧会パビリオンに関する資料の調査報告  
王 聖美
- 49 坂倉準三設計の旧上野市庁舎に関する資料について  
齋藤菜那
- 年次報告
- 51 令和6 (2024) 年度 文化庁国立近現代建築資料館 活動報告
- I. 資料の調査・保管等 51 / II. 展示・教育普及 54 / III. 情報収集 63  
IV. 調査研究等 64 / V. 委員会 64 / VI. 運営 64 / VII. 予算 65  
VIII. 組織 65 / IX. 年譜 65

# Bulletin of National Archives of Modern Architecture

vol.5 2025

Contents

## Frontispieces

- 2 NAMA's Collection

## Issue

- 10 Changes in the environment surrounding "National Archives of Modern Architecture, Japan (NAMA)",  
and its future outlook  
TERAMOTO Tsunemasa

## Article

- 17 On NAMA's Exhibition "Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka"  
KOBAYASHI Katsuhiko, OH Seibi, KUGE Takatoyo

## Report

- 25 Research on the succession of Born-Digital Design Records Management in Modern Architecture  
KOIKE Shuko, AKIOKA Aki

## Activities Report

- 33 Issues on Archiving Modern Diaries:  
Through Research on TSUNODA Shigeru's Collection and Interviews with Domestic and International Institutions  
HASEGAWA Kaori

- 39 Issues in Quantifying Archival Materials and Long-Term Arrangement  
in the KIKUTAKE Kiyonori Architectural Archives:  
Assumptions at the Preliminary Survey Stage and the Actual Situation over Approximately Ten Years  
SAITO Shingo

## Materials

- 43 Report on archival materials of world's fairs' pavilions among MURATA Yutaka Archive  
OH Seibi

- 49 Materials Concerning the Former Ueno City Hall Designed by SAKAKURA Junzo  
SAITO Nana

## Annual Report

- 51 Annual Activity Report of NAMA, 2024 fiscal year

I. Activities of Materials 51 / II. Exhibitions and Education 54 / III. Information Gathering 63  
IV. Research 64 / V. Committee 64 / VI. Management 64 / VII. Budget 65  
VIII. Organization 65 / IX. Chronology 65

# 文化庁国立近現代建築資料館を取り巻く環境の変化と今後の展望

[論稿]

寺本 恒昌\*

## Changes in the environment surrounding “National Archives of Modern Architecture, Japan (NAMA)”, and its future outlook

TERAMOTO Tsunemasa

Since opening in 2013, the National Archives of Modern Architecture (NAMA) has advanced the collection, preservation, research, and exhibition of architectural materials. Japanese cultural policy has traditionally focused on protecting designated cultural properties, but new discussions promote “architectural culture” as an evolving field integrating preservation, renovation, economic sustainability, and community value. A shift from “scrap-and-build” toward “Circulinnovation” seeks to inherit and creatively update existing buildings and townscapes. NAMA is expected to become a national hub linking government, industry, and academia to promote sustainable architectural culture.

キーワード：建築文化、文化政策の変化、文化財保護の今後、近現代建築の生きた継承、サーキュリノベーション、国立近現代建築資料館への期待

Architectural Culture, Changes in Cultural Policy, The Future of Cultural Property Protection, Living Inheritance of Modern and Contemporary Architecture, Circulinnovation, Expectations for the National Archives of Modern Architecture

※本稿において、将来の方向性として期待を述べている内容は、筆者がこれまでの議論に関わってきた経緯や経験を踏まえつつ、考えられることや、今後想定されることを私見として述べるものであり、必ずしもすべてが組織的に決定された内容ではない点にご留意いただきたい。

### 1. 序

文化庁国立近現代建築資料館（以下、建築資料館）が平成25年5月に開館してから12年。10年以上に亘って建築資料の収集・保管、調査研究、展示の活動が着実に進められてきた。近現代建築資料のアーカイブ活動を文化政策の変遷や潮流という観点から見ると、文化財保護に重点を置く文化政策が、より近年の文化的所産の価値に目線に向け、政策の対象とするようになった側面が見いだされる。

他方、現在、文化庁において検討されている“建築文化”を振興する政策——すなわち“建築物やまち並みの価値の創造と需要に関わる様々な対象物や営み、人材等までを総合的に文化として捉え、保存だけでなく、過去の所産から将来の活動まで広く振興の対象として行く文化政策”——の議論は、そのスコープを資料のアーカイブだけに留めるものではない。生きた建築物やまち並みについて、文化的・社会的・経済的価値を高めながら継承して行く活動全体を政策対象としようとしている。

建築資料館についても、この10年超の活動で蓄積し

てきた知見やノウハウをさらに伸長させて行くとともに、行政、産業界、アカデミアなど“建築文化”政策の推進に向けた様々な関係者の結節点となり、関連の活動の中核となることが、新たな次代の役割として大いに期待されるところである。

本稿では、建築・まち並みに関連する文化政策の体系の変遷や、生じつつある変化の潮流を整理・概観する。これに際しては、特に、現在も進行中である“建築文化”政策の検討状況や検討に通底する思想、具体的な取組の方向性等を明らかにする。また、これとともに建築資料館がこれまでに築き上げてきた活動の意義や文化政策上の位置付けを可視化し、“建築文化”政策の下で建築資料館に今後期待される役割や、“建築文化”政策推進の観点から実際に始まっている活動の展開を紹介する。

### 2. 建築・まち並みに関連する文化政策

#### 2.1. 文化財保護（文化政策における伝統的な重要施策）とその取組における課題

文化政策は、建築・まち並みに関し、文化財、すなわ

\*前 国立近現代建築資料館 館長／前 文化庁 文化経済・国際課長、企画調整課長。修士（法学、地域研究学（東アジア））

ち歴史的・芸術的観点から優れた所産の保護を主な取組としてきた。建造物等を文化財として指定し、特定の時期の姿を極力そのまま保つことで保護するというのが発想の根源である。こうした取組は、わが国の歴史の中で育まれた文化財を後世に向けて現存させる観点から、大きな意義を持つものである。結果、法隆寺金堂や姫路城のように誰もが知る優れた建造物等を、国宝という形も含めて可視化させ、維持することを可能としてきた。

一方、我々のライフスタイルは日々刻々と変化している。令和の生活は、平安時代や鎌倉時代とは勿論、先の戦前戦後はおろか昭和時代の後半とも大きく変わっている。建築技術等も日進月歩であり、当然、人々が建造物等に求める機能やデザインも時代に応じてアップデートされている。時代環境が変わり行く中で、文化財保護政策が時代に即した“生きた使い方”とどう相容れられるかを検討した結果、登録文化財や文化的景観のような新たな制度創設等が工夫され、近年では古民家ホテル等の形での活用例も広がってきている。

こうした状況下ではあるものの、文化財保護の取組の下での課題や限界が様々に露呈している。例えば、後に詳述するように、現時点の文化政策は人々の暮らしが日々新たに生み出す変化について、文化的価値として正面から柔軟に認識する段階には至っていない。また、“至高”とでも言うべき文化財は時代を追うごとに増加して行く一方で、その保護に対して国家や地元（地方公共団体）として割くことの出来る予算や人員等の行政コストは、人口減少・高齢化の時代においては必要なニーズに必ずしも応えきれないものとは限らない。さらに、文化財に至る前段階の文化的価値を政策のスコープに捉えられてもならず、一定の文化的価値があると考えられる空間単位の価値についても、文化財とされる建築物等以外には、その手が及ばない。結果、例えば、“昭和の飲み屋街”のように毎日の人々の営みが世界観を形成してきた空間について、惜しまれつつも壊されて行くケースが少なくない。また、黒川紀章氏設計の「中銀カプセルタワービル」や丹下健三氏設計の「旧・香川県立体育館」の解体、大高正人氏の「坂出人工土地」の維持等の議論に代表される建造物等は、文化財に“至る”前の段階のものである。

## 2.2. 建築・まち並みに関連する文化政策体系の変遷、変化の潮流

### ① 文化政策のスコープ

文化政策全体の変遷を概観すると、取組の主な対象

は、芸術活動の振興や、文化財を中心とする文化的・歴史的な所産の保護となってきた。これに対し、衣食住をはじめ、人々の日々の暮らしが体現する様式自体を文化として捉える動きは、必ずしも主流とはなっていない。こうした中で、平成30年の文化庁の組織改正によって食文化や広く生活文化を担当する部署が設置されるなど、文化政策概念を捉え直す動きも新たに高まりつつある。とはいえ、「住」という側面から生活を具現化する建築分野については、そこで行われる営みも含めて文化的観点から価値を認め、生きた継承や今後の創造を収益化等の持続性ある形で進展させる政策は未だ確立していない。

以下、建築分野が文化政策としてどのように捉えられてきたか、また建築分野に係る文化政策の取組にどのような動きが生じているかを考察し、“生きた建築・まち並み”を継承・創造させるという、文化政策の検討に関する新たな潮流を明らかにする。具体的には、文化政策、またはその周辺から建築分野に関連して存在する法等の各種規定や、それらの方針等について、時系列も意識しながらカバーする範囲やその変化等を考察する。

### ② 文化芸術基本法以前の文化政策における建築・まち並みについての捉え方

文化芸術基本法成立以前、文化政策またはその周辺から建築分野に関連して制定、検討がなされた規定や、それらの方針等は多くない。しかし、理念法、実定法の双方で一定の取組が見られる。

理念法では、文化芸術振興基本法（平成13年11月30日法律第148号）（以下、振興基本法）が文化政策全般をカバーし、建築分野についても規定しているが、第13条で「国は、有形及び無形の文化財…の保存及び活用を図るため…必要な施策を講ずる」とし、実定法である文化財保護法の対象内容を示すに留まっている。

実定法では、(ア)直接的な文化政策としての立法や、(イ)都市計画の一環で建築やまち並み一般を対象とし、外観の文化的価値も視野に入れる立法、(ウ)これら(ア)(イ)の折衷的に、文化政策の直接的対象たる歴史的建造物（文化財）を核に、周辺の建築やまち並み等やそこでなされる活動から成り立つ風致を対象とする立法、に大別される。

(ア)としては、文化価値を認める文化財（建造物等）の保護を、規制的手法を中心に正面から取り組む文化財保護法（昭25年5月30日法律第214号）が存在し、文化政策の基調を形成している。(イ)は、都市計画法の

表1 建築分野の文化政策に関連する理念法および実定法

	成立年	法律種	法の主対象（建築物の観点）	対象とする時間軸
文化財保護法	昭25年	実定法	外観・材料・適用技法	過去・既存のもの
文化芸術振興基本法	平13年	理念法	（文化財保護法に準ずる）	（文化財保護法に準ずる）
景観法	平16年	実定法	外観（形態・色彩・意匠等）	既存のもの、将来のもの
歴まち法	平20年	実定法	文化財＋営みや周辺環境等の風致	過去・既存のもの
文化芸術基本法	平29年	理念法	（文化財保護法に準ずるが活用）	（文化財保護法に準ずる）

体系の下、都市、農村漁村等における良好な景観形成促進を主目的とする景観法（平成16年6月18日法律第110号）が制定され、自治体の計画策定を踏まえた取組が推進されてきた。同法は、高度経済成長期以降に良好な景観や環境よりも経済性を優先させることで無秩序な景観形成に至ったことへの反省等を踏まえて制定されたものである。（ウ）は、地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（以下、歴まち法）（平成20年5月23日法律第40号）が挙げられる。

これら理念法、実定法の対象とする範囲は、表1のとおりである。

概述すれば、各実定法は以下のとおりである。（ア）たる文化財保護法では、文化財である建造物等について、有形文化財、伝統的建造物群保存地区、史跡、文化的景観、名勝という形で建築物・まち並み双方についてカバーする範囲を規定し、一定の時期の“姿”である様式や技術等を前提に保護を図ることとしている。（イ）たる景観法では、景観行政団体が策定する景観計画や、都市計画法の下での風致地区の規制のように、一定のエリア内の建造物等の形態・高さ、色彩、意匠等を規制して、外観が一定の範囲に収まるよう取組を推進している。これは、過去の建造物等に留まらず、将来の建造物等についても効果を及ぼすものである。また、（ウ）たる歴まち法では、建築物等の文化財等の歴史的・文化的価値を中核に、周辺の建築物や、歴史や伝統を反映した地域固有の活動（営み）も含めた風致について維持・向上を図るものとしている。風致という点で文化財の周囲の景観や営みを含むものであるが、将来の建造物等は対象としていない。また、文化財が核となるものであるが、文化財ではないものの集まりに歴史的・文化的価値を認めるものでもない。

一方、理念法における思考が振興基本法の制定以降もそのままであった訳ではない。振興基本法第7条では、「政府は、…文化芸術の振興に関する基本的な方針（以下「基本方針」という。）を定めなければならない」と

され、平成14、18、22、27年度の4次に亘って策定されている<sup>1</sup>。変遷の中、第3次基本方針においては建築分野に関連して大きく3点の変化が現れる。第一には、「重点戦略5：文化芸術の地域振興、観光・産業振興等への活用」として、「文化財建造物、史跡…等の…文化芸術資源を、…地域振興、観光・産業振興等に活用するための取組を進める」とされ、他分野との連携が水面上に浮上して来た点である。第二には、全体審議を行う文化審議会文化政策部会に設置された「くらしの文化WG」の“意見取りまとめ”で、「指定文化財に至らない町並みや町家等の衰退、都市計画等の一律規制」が課題として挙げられた。また、新たに「くらしの文化」という概念の下で「概ね3年程度をかけて「くらしの文化」振興のフレームワークを構築することを当面の目標とすべき」とされた。第三には、「重点戦略4：文化芸術の次世代への確実な継承」の中で、「…アーカイブ構築に向け、可能な分野から…所在情報の収集や所属作品の目録（資料台帳）の整備を進め」として、後の建築資料館に繋がるアーカイブ構築の要素が盛り込まれた点である。その後、第4次基本方針では、「重点戦略3：文化芸術の次世代への確実な継承、地域振興等への活用」の下で、「日本遺産認定の仕組みを…創設し、文化財群を…国内外に戦略的に発信」することとし、一点目について“活用”の強化、ソフト面の取組強化が打ち出されている。他方、二点目の指定文化財に至らないまち並み等に関する論点は具体化されないままであった。三点目は、「近現代建築に関する資料…について…国立近現代建築資料館の機能の充実を図る」として同資料館の機能充実に結実した。

実定法領域では、景観法や歴まち法によって、文化財の枠を超え、建築やまち並みの形態・色彩・意匠という側面での文化的な価値の維持・向上・創造や、文化財たる建造物等を中心としつつも周辺環境の風致を広く維持・向上する流れが現れた。また、理念法の下での検討からは、文化財保護政策を中心としつつ、その活用

のためのソフト施策や、文化財に至らない建造物等の対応への問題意識、そういった建造物等について資料アーカイブから取組を開始する流れが現れた状況である。

### ③文化芸術基本法以降の建築についての捉え方と今後

平成29年、「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律（以下、文化芸術基本法）が成立（平成29年6月23日法律第73号）し、その改正趣旨に挙げられるように「文化芸術そのものの振興にとどまらず、観光、まちづくり、…産業その他の各関連分野における施策を本法の範囲に取り込む」形で、総合的な理念法である「文化芸術基本法」へと至った。同法第7条では、文化芸術推進基本計画（以下、基本計画）を政府として定めることとされており、現在は令和4～9年度までの第2次基本計画の下で施策が推進されている。「重点取組2文化資源の保存と活用の一層の促進」の中の重点施策として「近現代建築の保存・活用の推進等による建築文化の振興」が挙げられ、「建築文化の振興を図るため…近現代建築の保存・活用の在り方を検討し、計画的な台帳作成を通じた価値付け、リノベーション等によるストック活用の促進、国立近現代建築資料館の機能強化…等を推進する」とされている。また、「文化振興のナショナルセンターとしてのマネジメント機能の強化」として「建築文化を振興する拠点として、…国立近現代建築資料館の機能強化を図る…国内外の建築系研究機関や教育機関とのネットワークの構築を一層進め…総合的な調査研究や人材育成等を展開する」とされている。そして、令和5年に文化庁・建築資料館の下に「建築文化に関する検討会議（座長：後藤治工学院大学理事長（当時）」が設置され、5月には建築文化の振興に向けた基本的な考え方や目指すべき姿、取り組むべき方策等が取りまとめられている<sup>2</sup>。

### ④文化政策における建築の可能性

#### 一建築文化政策の確立に向けて一

こうした取組は、文化政策や文化に関連する都市計画政策等における立法の隙間を埋め、また、文化財ではない既存の建築物・まち並みの文化価値を継承し、進化・発展させる取組となる可能性がある。さらに、将来に亘って形成される建築物・まち並みやそこでの営みを含めた文化価値を新たに創造し、進化させることも視野に入り得るものである。

言い換えれば、これは、(ア)建築物やまち並みそのものに加え、(イ)建築物やまち並みを存在させる要因や構造<sup>3</sup>、そして、(ウ)それらが生み出す総合的な文化

価値全体<sup>4</sup>を、時代の変化に応じながらアップデートさせ、必要な収益を得て次の時代に持続的に生き延びていく形を作りながら振興する、いわば“生きた文化”を生き続けさせる建築文化政策という政策概念の確立に繋がり得るものと考えられる。

## 3. 建築文化政策の検討

### 3.1. 検討の場の設定

建築文化政策の具体的な検討のため、令和6年10月、文化庁文化審議会文化経済部会の下に、建築文化ワーキンググループ(WG)<sup>5</sup>が設置された。これは、上記「建築文化に関する検討会議」における提言を、文化庁として具体的な政策・施策に結実させるための正式な議論の場として位置付けられたものである。審議は、2024年度に3回集中的に行われ、現在は制度化等に向けた検討が内部的に進められている状況にある。

### 3.2. 検討を通じて目指すべきこと

建築文化WGでは、建築物・まち並みの観点からあるべき社会モデルについて、以下の旨の議論がなされている。

建築やまち並みのライフサイクルという視点から見ると、特に戦後、我が国の建築物・まち並みは、新築から30～50年程度の期間を経た時期に解体され、新たに新築を行うというサイクルの下で、いわば作り替えられてきたと言える。しかし、社会の成熟に伴い人々が建築物・まち並みが生み出し得る大きな文化的・経済的価値に気付き始めたことや、日本に価値を見いだして来訪するインバウンド訪日客が盛り上がりを見せていること、他方で新築コストが大きく増加していることなどに鑑みると、今後は建築物・まち並み自体の深みの醸成や、その建築物・まち並みが存在する空間を訪れて世界観を味わうというディスティネーション化を政策的に後押しするべきである。また、このために社会として“手を出しやすい”コストで建築物・まち並みをメンテナンスし、アップデートしやすい環境を作ることが重要である。

こうした議論は、建築物・まち並みのライフサイクル・モデルの革新を図り、既存の建築物・まち並みを継承・アップデートしながら、新たな価値創造を図るモデルへ変えていくことを目指すべく検討されているものである。

そして、建築文化WGでは、循環型で新たな革新を生

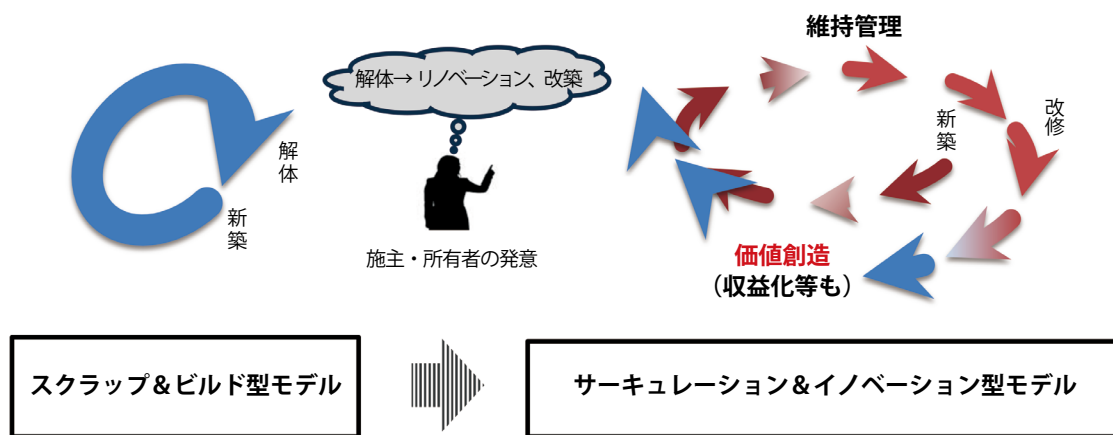


図1 建築物・まち並みのライフサイクル・モデルの革新

み出しながら稼働するライフサイクル・モデルを、Circulation & Innovation との意味合いから“Circulinnovation (サーキュリノベーション)”という新たな語の下で議論が行われている。Circulinnovation の発想に基づき、文化の継承・創造、そして経済効果を両立させるべく、これを支える社会メカニズムを官民協力型で政策的に形成していくことが重要とされている。

### 3.3. 具体的な政策・施策の形成、活動の検討

「開発(撤去、取り壊し)」とも「(文化財保護のアプローチによる)保存」とも異なる、「継承(再生・再利用)」を実現する方法を模索する建築文化WGでは、「開発」「保存」の二分法に陥る実質的な背景を経済的事情にあると分析する。そして、この課題を解消することを中心的テーマとし、①普及啓発及び相談等に関するサポート(社会の意識醸成)、②人材育成(具体的な活動者、推進者作り)、③制度的枠組み作り(推進のための基盤整備)の3つの軸を設定して検討を進めている。

これらに加えて、第4の軸として、取組の実装を社会全体というスケール感で進めることを念頭に、④サプライサイド(商材やサービス提供側)対応の推進も挙げている。これは、サプライサイドが意識を持って動き出せば、“Circulinnovation”の思想に繋がるオプションが事業活動を通じて広く展開され、社会(デマンドサイド)の思考様式、実際の事業発注のあり方なども変化していくという想定から盛り込まれたものである。

### 3.4. 検討の出口として想定されること

こうした検討が最終的に目指していることは、社会の意識やあり方の変革である。建築物・まち並みという

単位で考えた場合に、各々が無秩序にまた機械的に一定期間を過ぎた時点で解体、抹消されてしまい、過去の蓄積は忘れて新しい建築物・まち並みを創り出すということではなく、過去のストックを前向きに引き継いでより豊かな将来を創り上げるといった仕組み作りである。

これを具体化する方策は多面的に検討されているが、「建築文化に関する検討会議」の提言が“建築文化振興立法”を検討すべきとの指摘を成すように、上記4つの検討の軸に加えて、それらを支える根拠作りの可能性も視野に置かれている。関連の施策について、こうした振興立法の下で総合的に推進されるのは一つの望ましいあり方と言えよう。

また、取組の推進母体として、提言においては「日常の維持・継承から有事における修復のマッチングを行う者のとりまとめ機能や、各種“建築文化”関連人材の育成や資格付与、交流の中心としての機能を確立し、俯瞰的な調査研究、企画等により中心的役割を果たせるような機能」を挙げるように、“建築文化”に関するセンター機能、すなわち“国立建築文化振興センター”の設置を視野に置くのも有用であろう。こうした取組は全国規模のものとなることから、全国各地域での連携先(“建築文化振興サテライトセンター”)作りと、連携先まで含めた振興意識の醸成が重要となる。

社会の思考様式の変革という観点からは、“建築文化”の取組を学術的に裏付け、支えることが不可欠である。このため、“建築文化”領域に関係が深く有用な検討を行える実務家やアカデミアによる取組体制(“建築文化振興アカデミア・グループ”)を形成するとともに、同グループと“建築文化振興センター”との連携を進め、大きな方向性を実証的に裏付けながら、活動に通底す

る学術的な考え方を整理することも有用である。また、こうした実証的取組を学問的観点も絡ませながら将来の人材育成を図る観点から、同グループとの間で“建築文化振興研究・教育センター”の形成を図るのも一案である。

さらに、建築文化の取組を社会全般に横に広げながら進めることも大切である。建築家やディベロッパー、ゼネコン、建築会社、個人、アカデミア、行政、NPO、ユーザー等の多岐に亘る関係者が共通の問題意識・理解の下で社会全体として取組を進める体制作りも有用であろう。広く建築文化の領域に関連のある主体の繋がりを創り出し、“建築文化振興ネットワーク”として共通の認識を持ちながら連携して取組むべく、ネットワーク型の緩やかなチームを社会に広く及ぶ形で形成することは取組を大きく前進させることに繋がる。現在、こうした取組全体の中心になって進める“建築文化フェロー”が建築資料館において任命されており、同フェローを軸に具体化の検討が進められると考えられる。

#### 4. 文化庁国立近現代建築資料館に 今後期待されること

##### 4.1. 文化庁国立近現代建築資料館の築き上げてきた活動

###### —その意義や文化政策上の位置付け—

建築資料館は、文化財でなくとも文化的価値を見いだせる近現代の建造物等について、当該建造物そのものではなくとも関連資料のアーカイブ化を行うことで、文化財未満の財への対応など時代が求める取組の先鞭を付けてきた。こうした取組は、建築物だけではなく、映画分野（(独)国立美術館の国立映画アーカイブ（2018年4月開業）<sup>6)</sup>）や、検討段階ではあるがマンガ・アニメ分野においても見られる。

一般的に財について、制作や組立て・建造から一定の期間が過ぎたところで、劣化とともに補修の必要性が高まるが、文化財と位置付ける前の管理を所有者等の自助に依っている間に、解体や廃棄等の事態が生じ得る。特に戦後日本の建築分野は、プリツカー賞受賞者が世界一の8組9名に及ぶなど国際的にも極めて高い評価を得ていることから、その価値を保存・継承していく要請が強いのは自然なことである。建築資料館のアーカイブ活動は、図面等の資料自体の価値を国内に留める<sup>7)</sup>とともに、解体や廃棄等に対する価値保存の要請への直接・間接の対応でもある。建築資料館は、その創設以来、社会的に大きな貢献を果たしてきたと評価されるべきである。

##### 4.2. 文化庁国立近現代建築資料館に期待されること

「建築文化に関する検討会議」提言では、「建築文化振興の動きを社会実装していくエンジンとしての役割を果たす」、「関連する人材や知を結節する拠点」の必要性が謳われている。また、「アーカイブの幅や手法を拡げるとともに、アーカイブの価値付けや、有する価値の効果的な活用」の「一層の強化」、「日常の維持・継承から有事における修復のマッチングを行う者のとりまとめ機能や、…関連人材の育成や資格付与、交流の中心としての機能を確立すべき」といった内容も盛り込まれている。提言も示すように、建築資料館には、今後、建築・まち並みに関する資料アーカイブ関連活動の一層の充実に加え、生きた建築・まち並みの継承や創造という観点から、関係者や社会全体をリードする役割を果たすことが大いに期待される。こうした取組は、文化政策が、人々の暮らしが日々進化を促していく文化を動的に捉え、その進化を振興するという、生きた文化を政策対象にしていく過程への貢献でもある。文化財を超えて、広く社会の建造物等に文化的価値と経済性を両立させることにも繋がるものでもあり、国際的に言われる living heritage を政策化する取組でもある。

東京湯島にある建築資料館について述べれば、既存の建築資料のアーカイブ施設から国際的な建築文化振興センター（“YUSHIMA” – *You'll see more architectures*）へ発展することが次の大きな飛躍に繋がると考えられる。

注

- 1 基本方針、基本計画は以下に列挙・掲載。https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\_gyosei/hoshin/index.html
- 2 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/kenchikubunka/index.html
- 3 人や家族、コミュニティとしての「くらし」を実現させる空間として存在する必然性、祭祀や儀式、商い、公共活動を含む「交流」の場として存在する必然性、気候や地形、確保できる場所や調達できる資材等の「自然環境」や実際に建築等を行い得る「技術力」といった必然性と、「装飾性、あるいは象徴性とか権威性という社会的側面」「地域性、歴史性などという属性」（藤井恵介、玉井哲雄『建築の歴史』中央公論新社、1995年、380頁）等が複合的に関連すると考えられる。
- 4 新築や改修・改築、解体が積み重ねられてきた建築物やまち並みは、調査・企画から設計、建設、利活用、管理、改修、解体、資料保管等の各過程において、部品部材や工具、資材等に至るまで、試行やすり合わせ、実装・実用等を踏まえて形成されたものでもある。総合的な文化的価値は、学術的、歴史的、技術的、デザイン的な各観点、それを見たり体験して人に何かを創造さ

せる観点、金銭的価値を生み出させる経済的観点など、総合的で多様な要素から構成されると言えるのではないか。

- 5 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunka\\_keizai/kenchiku\\_bunka/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunka_keizai/kenchiku_bunka/index.html)
- 6 1952年に東京国立近代美術館の映画事業（フィルム・ライブラリー）として事業が始まり、1970年に機能を拡充して東京国立美術館フィルムセンターとなっていたものを、新たに独立させたもの。
- 7 建築物によっては、その図面の中に記される内部構造等の情報が建物のセキュリティの観点から自由に流出することが望ましくなく、（ナショナル・）セキュリティ的な観点からその意義を有するものもあると考えられる。

（2026年2月4日原稿受理）

# 展覧会「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」の展示企画について [論考]

小林 克弘\*、王 聖美\*\*、久下 高豊\*\*\*

## On NAMA's Exhibition "Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka"

KOBAYASHI Katsuhiko, OH Seibi, KUGE Takatoyo

NAMA's Exhibition "Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka" was the first comprehensive exhibition in Japan on HORIGUCHI Sutemi, an architect of great importance in the history of modern Japanese architecture. This paper describes the points that were particularly considered and devised during the planning stage for the exhibition. Chapter 2 describes the consideration of the exhibition's chapter structure, and Chapter 3 summarizes the characteristics of the exhibition and what was learned through the exhibition.

キーワード：分離派建築会、アムステルダム派、紫烟荘、国際様式、茶室研究、明治大学

Bunriha Kenchikukai, Amsterdam School, Shienso, International Style, Tea House Study, Meiji University

### 1. はじめに

文化庁国立近現代建築資料館では、2024年8月9日(金)～10月27日(日)の期間、建築家・堀口捨己(1895-1984)に関する展覧会「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」を開催した。日本の近現代建築史上、極めて重要な建築家である堀口捨己に関する、本邦初の総合的な展覧会である。

2024年は、堀口捨己没後40年にあたる。各所で分散保管されてきた資料群が、当館に寄贈され、堀口捨己建築資料として一堂に会することとなり、それにより、堀口の生涯にわたる活動を多面的、総合的に紹介する展覧会を実現することが可能となった。

展覧会の具体的内容に関しては、図録に取りまとめであり、図録のPDFは当館HPにて閲覧可能となっている<sup>1</sup>。また、展示会場の様子および実施報告については、本紀要末尾の年次報告にて掲載しているが、本稿では、展覧会開催を企画する準備段階に検討した点、工夫した点、さらに、展覧会を通じて分かった点などについて述べる。具体的には、2章において、展覧会の章構成の検討について述べ、3章において本展の特徴および本展開催によって理解できたことを整理して述べる。

### 2. 展覧会の構成、特に時期区分に関する検討

堀口捨己(1895-1984)は、国内最初の本格的近代建

築運動とされる分離派建築会結成に際して中心的役割を果たし、1930年代には日本を代表する国際様式建築を実現した。西欧の近代建築の動向をいち早く理解するとともに、国内の茶室や数寄屋建築に関する卓越した研究業績を残し、第二次世界大戦後には、現代数寄屋建築を実践して大きな影響を残した。堀口は、1920年頃から1970年代の日本建築界を代表する建築家の一人であり、近代建築と日本の伝統建築双方に対して深い洞察を巡らせた稀有な建築家といえることができる。茶の湯、和歌にも通じ、建築や庭園のデザインのみならず、広いジャンルで創造力を発揮した。そこに、堀口の類稀な探求心と創造力の結実を見ることができる。

本展覧会は、堀口の学生時代から晩年に至るまでの代表作品のオリジナル図面に加えて、1920年代欧州視察時の写真、分離派建築会展資料、茶室や庭園の実測研究資料、原寸茶室模型等の展示を通じて、建築家・堀口捨己の建築、思想、創造世界を総合的に紹介することを目指した。

タイトルでは、主タイトルの「建築家・堀口捨己の探求」に続けて、サブタイトル「モダニズム・利休・庭園・和歌」を列記した。相異なるカテゴリーが列挙されることは、やや唐突な印象を与えかねないが、その唐突ともいえる広がり自体が、堀口の探求の多様さを具体的に示す効果をもつと判断した。

\*文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士 \*\*文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、修士(芸術)  
\*\*\*元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、工学士

展示においては、厳密な順路があるわけではないが、基本的には、章構成に沿って展示物を見る形になるので、閲覧に際してわかりやすい章構成となっている必要がある。これまで堀口捨己について、誕生から晩年までの生涯及び業績を通年的にまとめた書籍や出版物は存在する<sup>2</sup>。しかし、展覧会という形では、堀口の業績全体を経年的に展示する試みは初めてであった。それ故、まず、展覧会という形式の中で、堀口の活動をいくつかの局面に分けて展示すると、その作風や活動を分かりやすく展示できるかという点を検討する必要があった。従来の書籍や出版物では、堀口の活動を大きく三期に分けている場合が多い。分離派建築会から西欧の近代建築を学んで、自らの作品を作り始める1920年代、より機能主義・合理主義へと移行した近代建築を学び、併せて、日本の茶室・数寄屋建築研究に着手する1930年代から終戦まで、そして、円熟した現代建築および現代数寄屋建築を並行して作り続ける終戦以降1980年頃までである。

時期区分を検討する際に難しいのは、第一に、堀口が学んだ西欧の近代建築運動自体、1920年代に大きく変化しており、20年代初頭ではドイツとオランダの表現主義建築の傾向が強かったのに対し、1920年代後半は、近代建築の主流は、より抽象主義的な造形、合理主義的な思考へと流れを変えて、それらが「国際様式」と呼ばれるものになることである。このことは、1920年前後のミース・ファン・デル・ローエやヴァルター・グロピウスの作品にも表現主義的造形が表れていることから明らかである。つまり、西欧の近代建築の動きを素早く吸収しようとした堀口にとって、範とすべき近代建築自体の流れが大きく変化しつつあったということである。時期区分を難しくする第二の点は、堀口が機

能主義・合理主義作品を設計した1930年代後半という時期と茶室・数寄屋建築研究に着手する時期が重なることである。

そうした状況を鑑み、本展では、下記の4期に分けた展示として、2~4期は、数年ずつの重なりを許容する形での時期区分を行うことが、堀口の活動を理解する上で、より理解しやすい展示になると判断した。

以下、章ごとの概要および展示作品を要約して述べる。

## 2.1. 分離派建築会と表現主義の影響 1920-1929

堀口は、1920年には、5名の同級生と共に結成した分離派建築会の運動で中心的な役割を果たし、当時の工学技術に偏重していた建築の在り方に反抗する運動を開始する。第一回分離派建築会に際して出版された『分離派建築会宣言と作品』の表紙デザイン(図1)や編集も堀口が手掛けた。1923年7月から翌年3月まで、ヨーロッパ各地に赴き、当時の西欧の近代建築の実作を熱心に見て回り、併せて、近代建築の動向に関する情報収集を行った。

帰国後、建築設計に本格的に取り組み、小出邸(1925年)、紫烟荘(1926年、図2)、双鐘居(1927年)などの住宅作品を世に問う。1920年代の作品群からは、西欧の近代建築の動向を学びながら自らの表現を模索する姿が見える。例えば、洋行前の作品である平和記念東京博覧会(1922年)の曲線を用いた造形では表現主義の影響、紫烟荘の外観ではオランダで見た曲面茅葺屋根をもつ住宅やアール・デコの幾何学的な構成の影響、双鐘居ではフランク・ロイド・ライトの影響などが見られる。

この章の展示対象とした建築作品として、西洋の近代建築の影響が読み取りやすい「分離派建築会」、「平和記



図1 分離派建築会『分離派建築会宣言と作品』  
岩波書店 | 表紙画 堀口捨己 | 1920

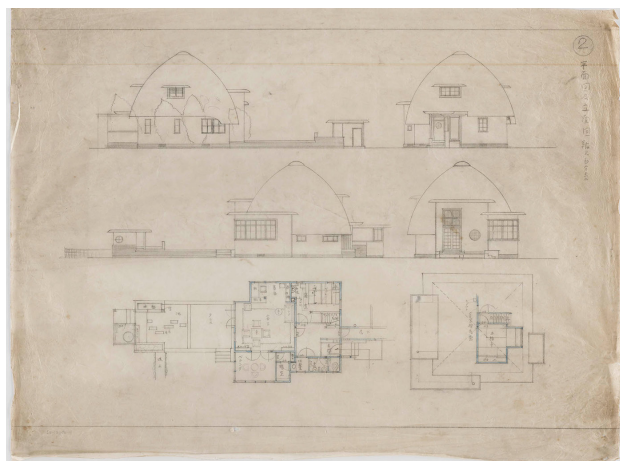


図2 紫烟荘 平面図及立面図 | 作成年未詳

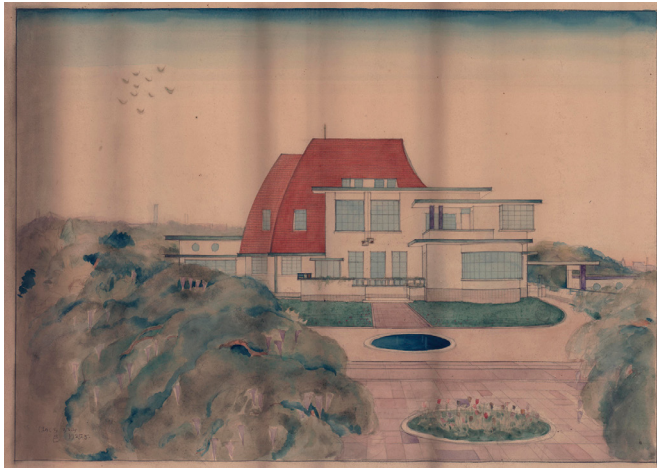


図3 吉川邸初期案透视图 | 1925

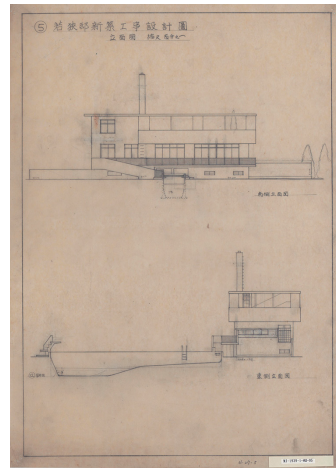


図4 若狭邸立面图 | 作成年未詳

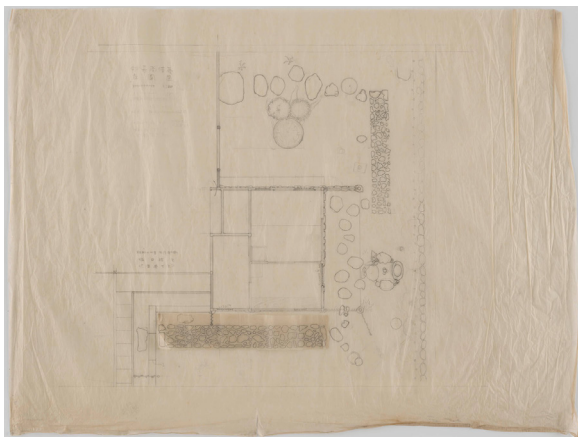


図5 妙喜庵待庵庭園図 実測図 | 1936

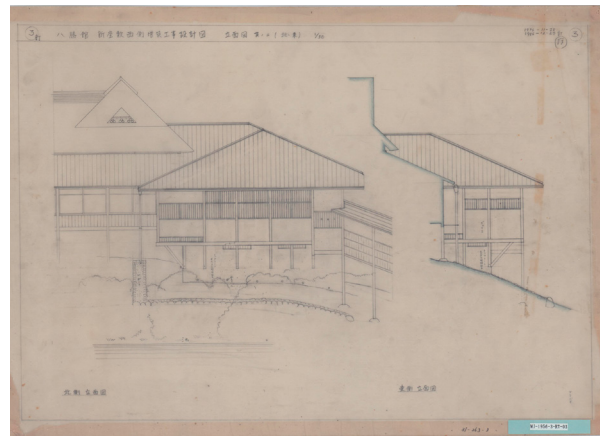


図6 八勝館さくらの間立面图 | 1956

念東京博覧会」、「小出邸」、「紫烟荘」、「双鐘居」を選んだ。

## 2.2. 国際様式への傾倒 1930-1939

堀口の作風は、「吉川邸」(1930年、図3)以降、2つの点で大きく変化する。第一点は、建築のみならず庭園のデザインを一体的に考えるという傾向が強くなることである。「岡田邸」(1933年)では、住宅の内部に合わせて和洋の庭園デザインを巧みに使い分けるといった手法が見られる。建築と庭園を共に全体を構成する要素としてとらえるという考え方は、その後の堀口の作風における基本方針になっていく。

第二に建築デザインにおいては、1920年代に見られた表現主義的な要素や装飾的な要素が消えていく。この点は、西欧における近代建築の展開とも軌を一にする。先述したように、西欧では、1910年代末から20年代にかけて第一次世界大戦による社会不安もあり、曲面や鋭角を多用して感情移入を行った表現主義が主流であったが、20年代にはオランダのデ・ステイルに

見られる線と面による抽象的な構成、あるいは幾何学的な表現を重視するアール・デコ(1925年様式ともいわれる)などの動向が強まる。更に20年代後半には、白い箱型、無装飾、非対称性、機能重視の合理的表現が主流になり、それが「国際様式(インターナショナル・スタイル)」と呼ばれて近代建築運動の主流となっていく。堀口は「大島測候所」(1938年)と「若狭邸」(1939年、図4)という、国際様式を実践した作品によって、日本の近代建築を代表する存在になった。

この章での展示対象とする建築作品は、「吉川邸」、「岡田邸」、「大島測候所」、「若狭邸」、「忠霊塔設計競技案」である。「忠霊塔設計競技案」は、堀口の作品の中でも、左右対称性が強く、最も歴史主義的な印象を与えるが、戦争に向けて変化していく建築界の中で、堀口のジレンマを知ることができる作品という意味で展示対象とした。

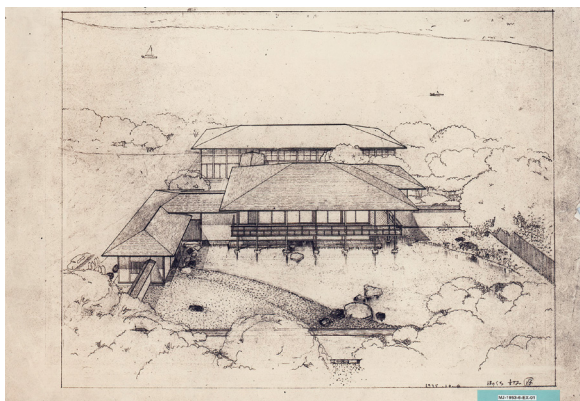


図7 サンパウロ日本館 透視図 | 1953



図8 湯河原萬葉公園 配置図 | 1953-54

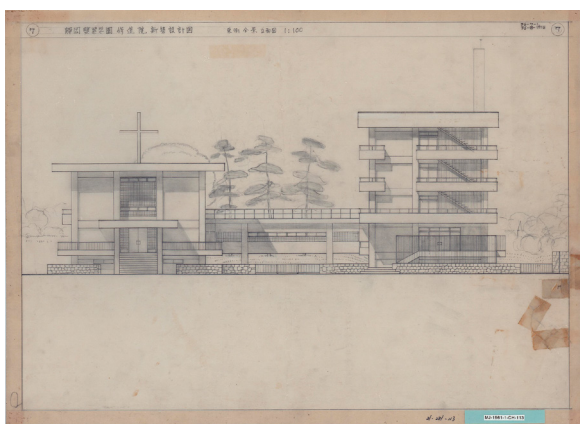


図9 静岡雙葉学園 修道院・礼拝堂 東側立面図

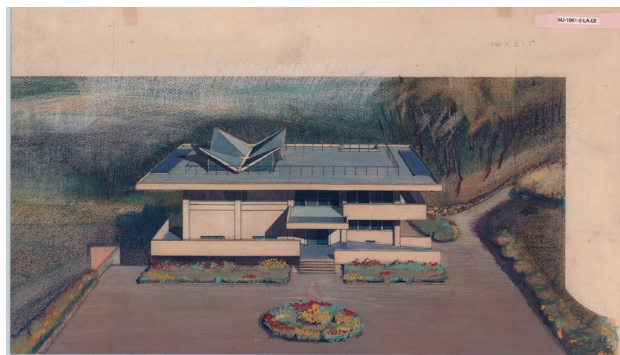


図10 常滑市立陶芸研究所 透視図 | 作成年未詳

### 2.3. 「日本」の探求 1936-1958

堀口は、「大島測候所」や「若狭邸」などの、日本における国際様式の代表的な作品を実現することと並行して、1930年代後半から40年代にかけて茶室や数寄屋建築の研究に傾倒して、多くの実作調査を行った成果を、学位論文「書院造と数寄屋造の研究」(1944年)、著書『利休の茶室』(岩波書店、1949年)などの研究業績と著作に残した。欧米の近代に学ぶという風潮が主流であった時代に、日本独自の文化や伝統にも注目するという姿勢と眼差しを世に広めた点は、重要である。

こうした「日本的なるもの」への関心と近代建築の摂取は、相矛盾することのようにも思える。しかし、「日本的なるもの」への関心は、近代建築の探求の放棄ではなく、むしろ、素材の重視や抽象的構成といった点で両者は共通しており、かつ、日本建築の研究が、近代建築に新たな展開と視座を与えるという積極的意味を備えているという理解に基づいていたと考えると、堀口の思考の中では、国際様式と日本的建築への関心が違和感なく共存したと理解することができる。

展示した研究及び建築作品は、「一連の茶室の実測調

査」(図5)、「八勝館八事店」(図6)などである。

### 2.4. 伝統と近代の境界を超えて 1954-1984

この時期の堀口捨己の作品は、一見すると、木造を主とした現代数寄屋建築と鉄筋コンクリートを用いたモダニズム建築に大別される。しかし、各要素がロジカルに構成されている点、伝統や様式に縛られず機能に対応した技術を活用している点、そして色や幾何学形態を用いた独自の表現という点では、表面的に異なる二つの作風はかけ離れたものではなかったと解釈することができる。

壮年期の茶室と庭園研究において近代建築史の観念を通して伝統を解釈したように、堀口にとっては歴史の中の書院造・数寄屋造と同時代のモダニズム建築は繋がっており、伝統と近代の境界を超えて数寄屋建築もまた同時代の建築であった。

展示した建築作品は、「サンパウロ日本館」(図7)、「万葉公園・万葉館・万葉亭」(図8)、「静岡雙葉学園」(図9)、「常滑市立陶芸研究所」(図10)、「清恵庵」である。堀口は、1949年に明治大学教授に就任して建築学科

の創設に貢献し、1965年の退官までに同大学の駿河台、和泉、生田の各キャンパスの校舎を設計したが、これらの校舎建築は、昨年度日本建築学会大会（明治大学駿河台キャンパス、2024年8月27日～8月30日）にて開催された『堀口捨己と明治大学校舎建築 1955-65』展において展示されたため、当館での展示には含めていない。

### 3. 本展の特色および開催を通じての発見

#### 3.1. オリジナル図面と多彩な資料による展覧会

冒頭に述べたとおり、堀口捨己没後40年にあたる昨年に当館に寄贈された堀口捨己建築資料によって、堀口の生涯にわたる活動を多面的、総合的に紹介する機会が実現した。資料群に含まれる完成した建築の基本図面だけでなく、非実現の案、家具図、茶室調査の実測図や寸法表、写真、手帳、書簡、版下、図集、和歌、掲載雑誌、音声等を展示に活用することで、堀口資料の多彩なまとまりとしての姿を伝えることを意図した。

本展では、代表建築作品の原図を含む約200点の展示資料を通じて、建築家・堀口捨己を学ぶことができる。併せて、展示品を丹念に見ていくと、大変興味深い

様々な事実がわかってくる。

例えば、「紫烟荘」では、図面の書き方が、2枚を1枚にまとめて書いており、そのレイアウトも興味深い（図11）。何のためにこのような描き方をしているか、その理由はわかっていない。図面を書くという作業を考えると、180度回転させて描かねばならないので、手間がかかるはずである。ただ、2枚まとまっているため、図面を青焼きする場合は枚数が少なくなるという長所はあるし、青焼きした図面を中央折して裏側を糊付けすると製本しやすいということを狙ったのかもしれない。堀口は、多くの著書を著すが、特に作品集の場合には、大判を横遣いして、レイアウトするということも行っており、図面の場合もそうした編集的工夫の意識が表れたのかもしれない。

初期の堀口は、建築が完成するごとに、作品の図集を作成している。本展ではそれらの原物を展示し、見開きを電子媒体として投映した。その中には、僅かであるがカラーの頁が含まれている。幸い『紫烟荘図集』（洪洋社、1927年）と『住宅双鐘居』（洪洋社、1928年）の中には絨毯の図柄がカラーで掲載されており、それを見

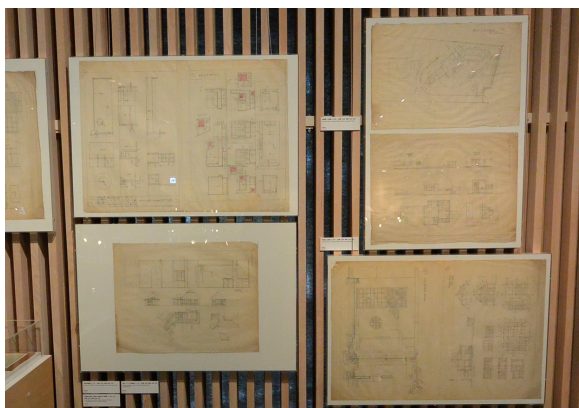


図11 「紫烟荘」関連の図面展示  
左上と右上（2頁参照）の図面は2枚一組に描かれている。

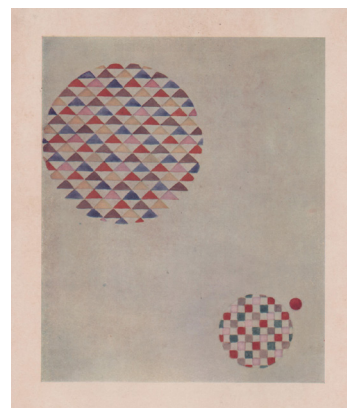


図12 「紫烟荘」の絨毯のデザイン図

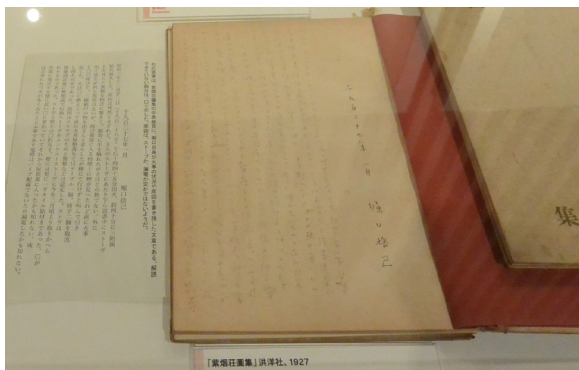


図13 「紫烟荘」の作品集の表紙裏に記された  
火事についての考察

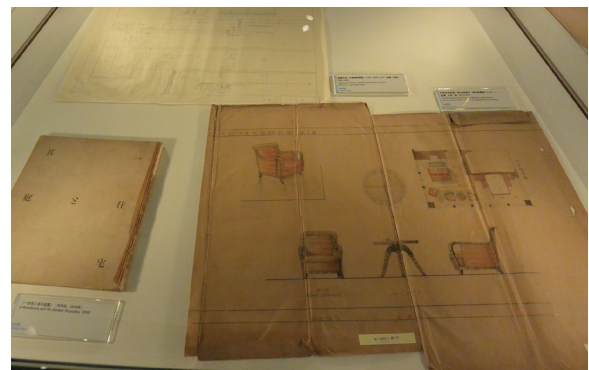


図14 岡田邸の家具のデザイン図

ると大変カラフルであることがわかる(図12)。実際の空間は、白黒の写真で見るとは異なり、多彩多色であったことが推測される。

また、『紫烟荘図集』の1冊には、竣工2年後に起きた火事の原因についての考察を直筆で書き込んだものが残されている(図13)。この書き込みは、完全には読解できないものの、大まかな火事の原因がわかると同時に、堀口が相当なくやしきをもって、この文章を残したであろうことが読み取れる。

岡田邸室内デザインを、カラーで描いた図面が残されており、これらもほぼA3サイズの図面が、2つにカットされているが、その輪郭が単純な長方形ではない(図14)。この理由も定かではなく、堀口が何か特殊な見せ方を考えていたのであろうことが推察される。

### 3.2 資料の来歴を明らかにする

堀口捨己建築資料(以下「堀口資料」)は、ご遺族と堀口捨己建築アーカイブズ(木村儀一、藤岡洋保、岩橋幸治、山崎鯛介が共同主宰)から受贈した資料群であるが、遡ると3か所の出所がある。堀口の没後、それらの残された資料はご遺族を含む関係者によって、複数の場所で保護、継承されてきた。その結果、包括的に堀口の足跡が辿れる稀有な資料群となった。当館では、受贈した資料群の出所は、フォンドレベルの来歴として公式ウェブサイトと所蔵品検索データベース(AtoM)で公開している。しかし、建築資料が守られ残される背景を積極的に広く伝えたいと考え、堀口資料の収集に取り組んだ青山(高瀬)道乃(元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員)による解説を展示パネルと本展の図録<sup>3</sup>に掲出した。

### 3.3 これまでの国内外の堀口捨己研究の成果を生かす

藤岡洋保(東京工業大学名誉教授)の『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求—』(中央公論美術出版、2009年)に代表される堀口捨己研究からは、本展を開催する際に、基本的な事実を得ることができた。本展では、藤岡氏によるギャラリートークを3日間(1日2回)開催した。東京科学大学の山崎鯛介教授と研究室各位の協力を得て撮影したギャラリートーク映像は、文化庁YouTubeで公開した<sup>4</sup>。

堀口捨己研究は近年オランダでもなされており、2023年9月にアムステルダムへのットシップ・ミュージアムにて「堀口捨己とアムステルダム派」が開催されている。その際に制作された解説動画は、英語版・オランダ語版で、堀口とアムステルダム派との関連に着目

した内容であった。本展ではそれに日本語字幕をつけて上映した。また、本展開催中に、ヘットシップ・ミュージアムの創設者・名誉館長のアリス・ルーホルト氏を迎えて、2024年10月18日(金)16:30-17:30に「1923年：堀口捨己とアムステルダム派の出会い」と題する講演会を開催した。これらの解説動画や講演会は、堀口とアムステルダム派の関係を通じて、100年以上前に建築家・堀口捨己を介して行われた建築分野の日蘭交流に関して、アムステルダムにおける調査で新たに発見した内容を含んでおり、そうしたオランダでの最近の研究成果を知ることで、国内における堀口捨己研究にさらに深みを加えることができた(図15)。

### 3.4 堀口捨己監修『茶室おこし絵図集』の一茶室を原寸模型と通じて体験

堀口捨己監修『茶室おこし絵図集(全12巻)』(墨水書房、1963~1967年)に綴じられた「後藤勘兵衛茶室(現太閤山莊擁翠亭)」を茶室原寸に拡大した模型を展示し、その内部に入ることができるようにした(図19)。

起こし絵図という折り畳み式模型は日本の伝統文化のひとつである。『茶室起こし絵図集 全12巻』は、茶室研究の第一人者であった堀口捨己が、約50の茶室起こし絵図を12巻にまとめた書物である(図16,17)。

その第5巻に掲載された「後藤勘兵衛茶室(現太閤山莊擁翠亭)」は、起こし絵図に基づいて、2020年に原寸模型(制作：公益財団法人 窓研究所)が作成された。この模型は、海外4か所(ロサンゼルス、サンパウロ、ロンドン、コペンハーゲン)で展示されたが、日本においては、本展覧会での展示が初公開である。

この「擁翠亭」は、安土桃山時代から江戸時代初期の大名にして建築家・茶人・作庭家であった小堀遠州



図15 ヘットシップ・ミュージアム創設者・名誉館長アリス・ルーホルト氏による講演会  
(展示室内にて開催、2024年10月18日)

(1579–1647)の作であり、京都上京区鞍馬口の擁翠園に建てられた。13の窓をもつ茶室として知られており、歴史上最も窓が多い開放的な茶室といわれる。障子や板戸の開閉によって、光の入り方を変化させ、様々な雰囲気を作り出すことができる独特の造りである。擁翠亭は、明治初期に解体されたが、その部材は140年以上も保存されており、2015年に保存部材を用いて、京都北区に再建された。(図18)



図16 『茶室おこし絵図集全12巻』(墨水書房、1963~67年)の内、第5巻

### 3.5. 資料に表れる多彩な活動を紹介

堀口の探求の多様さを具体的に示したいと考えたこと(本稿2章冒頭)、堀口資料を成す媒体は多岐にわたり生涯の活動が多彩であったこと(本稿3章1節)は既に述べた。こうした展覧会のコンセプトと堀口資料の豊かさや特徴をより意識的に示す目的で、オリジナルの資料を単独で陳列するだけでは伝わりづらいと考えられる資料を複数組み合わせで紹介した。

具体的には、展示室中央に円形の生涯年譜を制作し、年譜を軸にしてライフイベントに関連する写真、写真アルバム、書簡、和歌、著作の書籍、起こし絵図などの資料を陳列した。資料群に含まれる和歌は決して多くはないが、数寄の世界、起こし絵、桂離宮の庭園調査、「磔居」(1965年)について謳った作品もみられ、堀口の探求の広がりや表現の豊かさを感じられる。

更に、堀口が1960年代末に明治大学にておこなった講義の16編の録音テープ(6mオープンリール)<sup>5</sup>を媒体変換(電子化)した。そのうち、1編について講義の内容と関連する写真や書誌を活用し、堀口の肉声に静止画を重ねた視聴覚映像として公開した。編集は小池周子(元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員)の協力を得た。肉声を聞くことができるという点も、建築家の展覧会として極めて貴重であることを改めて認識した次第である。

## 4. まとめ

当館の限られた展示空間という制約の中で行った本展における工夫した点とその結果得られた特色や成果について述べた。資料は膨大であり、現在整理中の資料もあるので、いつの日か、すべての整理が終了した時点で、より規模の大きい展覧会が企画されることを願ってやまない。

本展は、堀口捨己に関する本邦初の総合的な展覧会であったため、建築界の中でも展示に関心を持つ施設や専門家に対してのアピールは大きかったといえる。

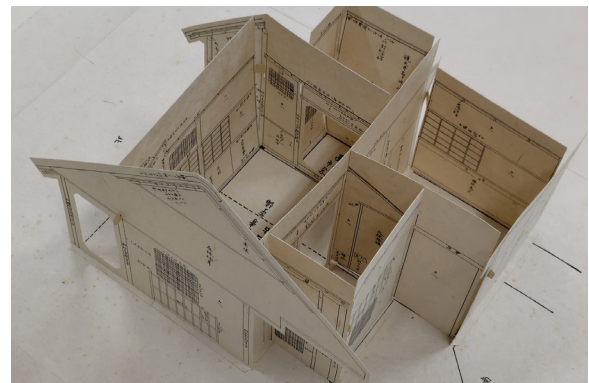


図17 起こし絵を平らな状態から立ち上げる



図18 太閤山莊擁翠亭の内部

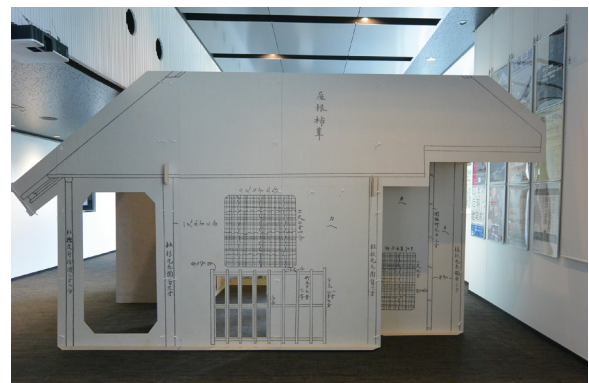


図19 ロビーに展示された擁翠亭の原寸模型

谷口吉郎・吉生記念金沢建築館では、本館の堀口捨己展に触発されて、建築館の谷口吉郎資料を総合して、2人の建築家を比較して展示するという興味深い企画に発展した(2026年2月14日～5月31日開催)。また、堀口が設計したサンパウロ日本館は、現在ブラジル日本文化福祉協会が所有して、様々なイベントに活用しているが、2026年3月～5月にこの日本館で、本館で行った堀口捨己展をベースにした堀口展が開催される。

本館での堀口展が、国内外において、堀口捨己を世に知らしめることに貢献し、他の堀口展へと展開できたことは、嬉しい限りである。



図20 谷口吉郎・吉生記念金沢建築館 第12回企画展  
「堀口捨己と谷口吉郎—茶室に魅せられた建築家—」  
展示風景

(撮影：藤森祐治)

注

- 1 <https://nama.bunka.go.jp/exhibitions/2408>
- 2 堀口捨己『SD8201 建築と庭園の空間構成』(鹿島出版会、1982年)、『建築文化8月号別冊 堀口捨己の「日本」空間構成による美の世界』(彰国社、1996年)、藤岡洋保『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求—』(中央公論美術出版、2009年)など。
- 3 図録「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」  
[https://nama.bunka.go.jp/wp-content/uploads/2024/07/図録\\_堀口捨己の探求\\_モダニズム・利休・庭園・和歌.pdf](https://nama.bunka.go.jp/wp-content/uploads/2024/07/図録_堀口捨己の探求_モダニズム・利休・庭園・和歌.pdf)
- 4 令和6年度「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」展 ギャラリートーク  
YouTube 文化庁bunkachannel、再生リスト 国立近現代建築資料館  
[https://www.youtube.com/watch?v=5vYYZAAIzxY&list=PL\\_ndIdjX38cDY2GoEbHMBmd9kqXH25UUZ&index=27](https://www.youtube.com/watch?v=5vYYZAAIzxY&list=PL_ndIdjX38cDY2GoEbHMBmd9kqXH25UUZ&index=27)
- 5 その一部を起こした文章「庭園序説」は、前掲注1『SD8201 建築と庭園の空間構成』(鹿島出版会、1982年)に掲載されている。

(2025年12月08日原稿受理)

# 近現代建築に関わるボーンデジタル資料の 継承に関する調査について

[調査報告]

小池 周子\*、秋岡 安季\*\*

## Research on the succession of Born-Digital Design Records Management in Modern Architecture

KOIKE Shuko\*, AKIOKA Aki\*\*

This project examines the preservation of Born-Digital Design Records, an area where practical progress remains limited in Japan, and this paper provides an overview of this research. Based on on-site surveys at two locations in Japan, along with case studies and reports from four international organizations, it offers current responses to issues identified by NAMA. This report will support NAMA and other domestic organizations in organizing Born-Digital Design Records.

キーワード：ボーンデジタル、建築資料、ボーンデジタル建築資料保存、近現代建築

Born-Digital, Architectural Archival Item, Born-Digital Design Records succession, Modern and Contemporary Architecture

本調査報告書は、文化庁国立近現代建築資料館Webサイト内にて公開されており、本紀要と合わせて参照いただきたい。<https://x.gd/QGTUf>



### 1. はじめに一調査背景と目的一

ボーンデジタル資料とは、コンピューター環境下で発生した資料を指す。つまり建築設計資料におけるボーンデジタル資料は、手書き図面やスケッチをスキャンしたのではなく、デジタル上で生まれ、育まれたデータ資料となる。建築業界における CAD (Computer Aided Design) の存在は、1963年の Sketchpad に始まり、1980年以降急速に進化してきた。今では CAD を使用していない建築家や建築事務所自体がほぼない状況と言って良いだろう。文化庁国立近現代建築資料館 National Archives of Modern Architecture, Agency of Cultural Affairs [NAMA] (以下、NAMA) へもデータ寄贈の相談が舞い込むようになり、収集方針にも関わる課題を含んでいる。現方針では収集対象にボーンデジタル資料について直接的な記載はないものの、「\*2：明治初期から、建築設計のデジタル化が進む1990年代ごろまでに作成されたものを基本とする」とされている<sup>1</sup>。しかしながら、これらデータ資料は補完資料として有効性は高く、増え続ける資料群に対し、将来的な国内資料保存管理を見据える必要があると考えられる。

建築設計は、長らく紙媒体での情報伝達を主としてきたが、近年はボーンデジタルが主流となり、データと

しても保存されている。長期保存に対する手法及び実績が蓄積されている紙資料と異なり、デジタル資料は加速的に進む技術発達の中で記憶媒体の更新が激しく、長期保存方法は確立されていない。よって、資料の滅失や読み取り方法を失う危険性を含んでいる。

デジタル資料の継承方法について、NAMA では令和2～4年度委託事業として「我が国の近現代建築に関わる構造資料及びその電子化継承に関わる調査」を実施し、建築資料の中でも電子化が先行する構造家資料の継承方法について調査を行っているが<sup>2</sup>、意匠分野での検討、アーカイブズ機関への収蔵を前提とした実践的な手法の構築を目指し、本調査を行うこととした。

### 2. 調査方法

専門委員へヒアリングを行い、ボーンデジタル建築資料整理を進めている国内団体が稀な現状で、どのように調査してゆくかについて意見交換が行われた。

助言を受け、本調査目的の見直しや今後の収集方針を含む NAMA での着地目標等、多くの課題が見えた。そこで今回は現状調査並びに海外の動向調査に注力し、以下の作業を進めた。

#### 1) 諸外国におけるボーンデジタル建築資料調査動向

\* 元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、Amanek Inc. 代表、修士 (工学)

\*\* 文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程

- 2) 実地調査
- 3) 類似団体へのアンケート
- 4) 資料整理作業工程策定

### 3. 諸外国におけるボーンデジタル建築資料 調査動向

これまでボーンデジタル建築資料について議論されてきた海外での主要事例及び概要をまとめた。報告書にて以下14件の調査・ワーキング概要をまとめている。

- 1996 Society of American Archivists' 1996 American Archivist issue
- 2004 Chicago Institute of Art
- 2006 FACADE 2006
- 2007 Architecture and Digital Archives, Architecture in the Digital Age: A Question of Memory
- 2012 FACADE 2
- 2013 Digital Preservation Coalition's CAD Technology Watch Report
- 2013 Archaeology of the Digital
- 2017 Designing the Future Landscape: Digital Architecture, Design and Engineering Assets Summit
- 2018 Building for Tomorrow
- 2019 Archiving Digital Architecture Records: National Framework Trial
- 2020 Digital Preservation Coalition's Building a Digital Future: Challenges and Solutions for Preserving 3D Models
- 2020 Digital Architectural Archives Collections: Expanding Practices and Future Uses
- 2021 Society of American Archivists' 2021 American Archivist special issue on design Records
- 2021 Born-Digital Design Records: Practicalities from Appraisal to Use

1996年のSAA(Society of American Archivists)による*American Archivist*の特集に始まり、複数のイベント、マニュアル公開等、この30年弱でボーンデジタル建築資料の検討が躍進的に進められてきたかがわかる。特に建築資料においてはCADの普及やソフトウェアの多面化に伴い、より複雑な事情を含んでおり、建築実務者のみならず、IT専門家・エンジニア、アーキビスト、研究者といったさまざまな観点からの研究及び考察が積み重ねられている。しかし日進月歩の現代技術に対し、これまでの“もの(紙、模型等)”を扱うアーカイブ

ズに比べ、更に策定仕切れない変動する実情が発生し続けている。ソフトウェア制作会社やIT専門家、研究者による相互協力が今後の資料保存において不可欠な事象となっており、関連団体への呼びかけもされている。

### 4. 実地調査

葉祥栄資料のボーンデジタル資料整理を行っている九州大学大学院芸術工学研究院岩元研究室並びに、芦原義信資料を収蔵している武蔵野美術大学美術館・図書館とデジタル資料整理を進めている芦原建築設計研究所の2か所の実地調査を行った。

#### 4.1. 九州大学大学院芸術工学研究院 葉祥栄アーカイブ

九州大学大学院芸術工学研究院・岩元真明准教授に葉祥栄アーカイブのヒアリングを行った。アーカイブ概要、受領から今に至る経緯、研究室内で旧式機材を使いながら資料やデータの整理・解析が進められている現状の説明があった。資料寄託の後、「ボーンデジタル資料整理」という未開の状況から試行錯誤されたことや、海外からの協力、そこからの展覧会開催等、探りながらの地道且つ持続的活動を伺うことができた。また今後、葉資料の一部が収蔵されているカナダ建築センター(CCA: Canadian Center for Architecture)と協働しながらの将来展望についても触れておられ、新たなアーカイブズ活動の期待が膨らむ調査となった。

#### 4.2. 武蔵野美術大学美術館・図書館/ 芦原建築設計研究所 芦原義信建築資料

芦原義信建築資料が収蔵されている武蔵野美術大学及びボーンデジタル建築資料を現在管理している芦原建築設計研究所(現・芦原太郎建築事務所内)への調査を行った。

紙媒体等の原資料はすべて武蔵野美術大学美術館・図書館に寄贈されている一方、デジタルデータは芦原建築設計研究所にて保管されている。現存するデータとして、フロッピーなどの旧式記録媒体からHDDへのデータコピーは完了しているが、確認できるデータと確認できないデータが混在しており、今後の整理方針については検討中である。事務所としては武蔵野美術大学へのデータ寄贈を進めたいそうだが、大学側の受け入れ体制検討からというのが実情であった。データ保存している事務所自体は稼働しているため、できる限り所内でのデータ整理や目録作成、推奨保存形式でのデータ変換などを行い、円滑な寄贈準備を進めて

おくことで、よりスムーズな寄贈につながる可能性を見ることとなった。

## 5. 現状調査アンケート

国内でのポーンデジタル資料整理の状況を知るべく、建築・デザイン資料収集、保存を行う12の団体へアンケートを依頼した。以下6団体から回答いただき、報告書ではその内容をまとめている。

- 日本建築学会 建築博物館委員会
- 東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻
- 谷口吉郎・吉生記念金沢建築館
- 京都大学研究資源アーカイブ
- 武蔵野美術大学 美術館・図書館
- 金沢工業大学 建築アーカイヴス研究所

アンケートでは回答のほか意見もいただき、それぞれで対応策並びに受入可否を含め検討が進められていることがわかった。同時に、ポーンデジタル資料の保存・寄贈に関する相談が増えていること、対応に難儀していること、整理収集に向けての指針が足りないことなどが鮮明となった。

## 6. 資料整理作業工程策定

ポーンデジタル建築資料整理作業策定を進めるにあたり、用語の整理並びに4つの報告書を読み解き、それぞれの概要をまとめた。特にオンライン上で情報更新しているカナダ建築センター (CCA) のフォーマットポリシーレジストリ (資料保存形式基本方針) は全訳し、今後の検討資料とするとした。

### 6.1. 用語集

調査した報告書やレポートの多くに用語集 (Glossary) が添えられており、今回の報告書にも主要となる69の用語を添えることとした。本やレポートの翻訳を進めながら、作業中で不明なものや、日本語英語として頻繁に使われながらも曖昧な語彙を中心に用語集としてまとめている。現在進行形で日々状況や情報が更新されるポーンデジタル資料界隈では、今後もこれら用語の更新及び見直しが必須である。

### 6.2. 海外建築資料保存機関での取り組み

ポーンデジタル資料整理の最新資料は、2022年に出版された Trends in Archives Practice シリーズの *Born-Digital Design Records* (Society of American Archivists 出版) であるが (2024年調査時)、本調査では、以下4件

のオンライン公開されているレポートを取り上げた。内容詳細については、本報告書を参照されたい。また、より最新の総合的な情報として上記本を読まれることも推奨する。

#### 6.2.1. Canadian Center for Architecture (CCA), Digital Archives Processing Manual / カナダ建築センター(CCA) デジタルアーカイブズプロセスマニュアル<sup>3</sup>

2020年5月に公開され、現在もオンライン上で更新されている CCA によるポーンデジタル建築資料作業マニュアルである。CAD データといったポーンデジタル建築資料保存について、2013年の展覧会「Archaeology of the Digital program (デジタルの考古学)」を皮切りに先駆的に調査、体制構築、収集、整理を続け、そのマニュアルを公開している。

オンライン上の概要 (Overview) にて作業概要がまとめられている。建築アーキビストにとって、普段見慣れないデジタル用語が並んでおり、IT 専門家のためのマニュアルのような印象を受けるが、ポーンデジタル建築資料整理の流れと内容を知ることができる。CCA のようにフリーソフトも併用し、資料整理・保存するということは、建築のアーキビストのみならず、デジタルデータや IT 専門家が館内に在籍し、成り立っている実情がわかる。

#### 6.2.2. Archiving Digital Architectural Records (ADAR), Securing and enabling access to knowledge for the future Project Report / デジタル建築資料アーカイブ (ADAR) プロジェクト報告書<sup>4</sup>

2016~2019年に公開された南オーストラリア大学建築博物館と RMIT デザインアーカイブ共同で進められた ADAR プロジェクトの報告書である。オーストラリアの建築事務所による協力を仰ぎ、ケーススタディを中心とした調査内容となっている。前述の CCA よりも早い時期に公開されたものであり、ポーンデジタル資料整理について検討する際の導入として、特に実務者に参考となる情報がまとめられている。報告書内にまとめた研究機関向け推奨事項は、ポーンデジタル建築資料の第一歩を検討・実行する際に役立つと思われる。

### 6.2.3. Digital Preservation Coalition (DPC), Preserving Born-Digital Design and Construction Records, DPC Technology Watch Report / デジタル保存連合 (DPC) 報告書<sup>5</sup>

2021年12月公開。英国拠点のデジタル保存連合 (Digital Preservation Coalition /DPC) によってまとめられたボーンデジタル建築資料長期保存についてのレポートである。アーキビスト、設計並びに施工実務者に向け、選別、保存、閲覧についての手法等が幅広くまとめられている。特に報告書内で取り上げた規模が異なる二つの研究機関での比較は、規模及び取り組みレベルで落とし所を見つけながら作業している様子を垣間見ることができた。また、デジタル資料保存基準を進めるリソース並びに推進事項をまとめている。

### 6.2.4. Frances Loeb Library at the Harvard University Graduate School of Design, Building for Tomorrow, White Paper / ハーヴァード大学デザイン大学院 フランシス・ローブ図書館ビルディング、フォー・トゥモロー報告書<sup>6</sup>

ハーヴァード大学デザイン大学院 フランシス・ローブ図書館が、博物館・図書館サービス機構 (IMLS) の支援のもと進められた調査の報告書である。2018年調査の後、2021年に報告書が公開された。本調査報告書では長期保存推奨事項部分をまとめたが、これは研究機関、建築事務所共に参考となるシンプルな内容を網羅しており、ボーンデジタル建築資料整理稼働時の検討に非常に参考になると考えられる。

### 6.3. 各機関の比較検討

前述4つの概要並びに、本調査で課題点については、調査報告書内で推奨比較をまとめている。以下、本調査での課題事項となる。

- 長期保存が必要な資料の選別
- データ真正性の確保
- アーカイブズ機関が担う機能に合わせたフォーマット
- 各保存フォーマットの変換方法
- 階層構造の設定方法
- メタデータの作成と維持管理
- PC スペック
- 導入システム、ツール

## 7. まとめ

本調査では、ボーンデジタル建築資料の動向、整理の現状・課題に対し、機関における方針確立の上での稼働、そして技術の進行と共に変化している状況を知ることとなった。

- 機関のボーンデジタル建築資料収集方針に則って資料選別がなされる。機関毎に収集方針をまとめることがまず重要であり、その方針は定期的に見直されるべきであると訴えられている。
- ディスクイメージ化、チェックサム、スケジューリングされたバックアップ体制、複数箇所での保存といったITの体制の下で、データやファイルの真正性が保たれている。
- データが作成されたオリジナルバージョンのソフトを入手し、可能な限りオリジナルでのデータ確認、保護を目指している。一方で業界として、将来的に長期保存及び利用が可能になるようソフトウェア制作社への働きかけも進められている。
- オープンフォーマットでの資料保存が長期保存に有効である。
- 寄贈者との対話、情報交換がとても重要である。その情報がデータ保存の第一歩となり、その後のデータ確認、長期保存計画につながる。
- 同ファンド内における紙媒体といったオリジナル資料とボーンデジタル資料の扱い方について、総合的判断が求められる。補完資料なのか、一次資料なのかといった位置付けによって整理方針や計画が立てられる。
- デジタルアーキビストは相当なITスキルを持っており、オープンフォーマットのソフトウェアを駆使しながら、さらに独自のニーズに合わせて改変 (エミュレーション) している。オープンフォーマット導入に費用はかからないが、ITに精通したスタッフがいないとかなかなか使いこなせないのが現実である。
- 保存フォーマットやソフトウェアなど、常に状況は変化している。随時その最善策を確認しながら、柔軟な対応・対策をとることが求められる。

さまざまなケーススタディを通し、規模や体制によってそれぞれ段階的、試験的に進められていることもわかり、大きな励みにもなった。アンケートでは国内事情を垣間見ることができ、NAMAへの大きな期待を感じざるを得ない実情を知ることとなった。アンケート回答いただいた団体各位に改めて御礼を申し上げたい。

今後、ボーンデジタル建築資料整理を進めるにあたり、現状まず求められることは以下となる。

- 1) NAMA でのボーンデジタル資料収集方針を検討、並びに策定
- 2) 寄託中のデータについてのヒアリング
- 3) 寄託中の旧記録媒体からのデータ取り出しを開始
- 4) 1の方針に沿った導入システムと IT 機器の準備及び体制構築

NAMA の今後の展開においてはボーンデジタル建築資料についての課題整理からとなるが、既に補完資料としてのデジタル資料寄託は始まっている。まず手元の旧式媒体データについては早々に取り出しを進め、確認することが求められる。一方、参照した海外事例にも強く書かれていたとおり、機関におけるボーンデジタル建築資料収集方針を策定することが必須となる。今後の収集において、デジタル資料は必ず含まれてくると推察され、本調査が今後の活動指針の一助となることを期待したい。

\*\*\*

## 別添

### 原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料のHDDに含まれる資料一覧

現在、収蔵検討および資料整理のためにNAMAが借用しているボーンデジタル資料は、原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料のハードディスク(HDD)、高橋航一・第一工房資料のMOディスク、川添登資料のフロッピーディスクが挙げられる。本稿では、この内、ディスクの内容を確認できた原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料のHDDを対象に、資料種別とそのデータ形式をプロジェクト毎に一覧とした。

原広司・アトリエ・ファイ建築研究所では、アーカイブズ寄贈用として、ボーンデジタルの設計資料を書き換えのできないPDF形式に変換する作業が実施されていた。そのため、NAMAが借用しているHDDには、変換後のPDFデータや、事務所でスキャンされたスケッチ等が主に保管されており、オリジナルの設計データはほとんど含まれていない。

また、本一覧に掲載されている各種データについては資料整理中のため、現時点では閲覧・利用対象ではないことを申し添えておく。

\*\*\*

## 注

- 1 文化庁国立近現代建築資料館 収集方針  
<https://nama.bunka.go.jp/overview/houshin.html>
- 2 浜田英明, 藤本貴子, 竹内徹. 近現代建築に関わる構造資料の承継とデジタル資料管理について. 国立近現代建築資料館紀要, Vol.3 2023  
[https://nama.bunka.go.jp/wp-content/uploads/2025/05/02\\_bulletin\\_of\\_nama\\_vol3\\_2023.pdf](https://nama.bunka.go.jp/wp-content/uploads/2025/05/02_bulletin_of_nama_vol3_2023.pdf)
- 3 Canadian Center for Architecture (CCA), Digital Archives Processing Manual (2020年5月公開)  
<https://github.com/CCA-Public/digital-archives-manual>
- 4 Archiving Digital Architectural Records (ADAR), Securing and enabling access to knowledge for the future Project Report  
2016年12月公開  
<https://unisa.edu.au/contentassets/3f987712f4414dfab008be4d79a86a19/adar-report-220317.pdf>  
2018年6月公開  
[https://www.natspec.com.au/images/PDF/ADAR\\_NF\\_REPORT.pdf](https://www.natspec.com.au/images/PDF/ADAR_NF_REPORT.pdf)  
2019年6月公開  
[https://unisa.edu.au/contentassets/875d9bf8bb2e4c3a946549a66a65a7c0/adar\\_nft\\_report.pdf](https://unisa.edu.au/contentassets/875d9bf8bb2e4c3a946549a66a65a7c0/adar_nft_report.pdf)
- 5 Digital Preservation Coalition (DPC), Preserving Born-Digital Design and Construction Records, DPC Technology Watch Report (2021年12月公開)  
<https://www.dpconline.org/docs/technology-watch-reports/2555-techwatchreporttemplate-v06-leventhal-thompson-final/file>
- 6 Frances Loeb Library at the Harvard University Graduate School of Design, Building for Tomorrow, White Paper (2021年6月公開)  
[https://www.gsd.harvard.edu/wp-content/uploads/2023/04/building\\_for\\_tomorrow\\_whitepaper\\_version\\_1.0-final2.pdf](https://www.gsd.harvard.edu/wp-content/uploads/2023/04/building_for_tomorrow_whitepaper_version_1.0-final2.pdf)

(2026年1月22日原稿受理)

別添 原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料の HDD に含まれる資料一覧

PJ番号	プロジェクト名	年	基本・実施図	竣工図	CG, パース	写真	スケッチ	掲載誌	動画	その他
-	RAS時代 有孔体A-House	-				tif				
-	リビア大学都市計画	-				tif				
-	原広司院時代の作品(実験プレハブ住宅)	-						tif		
002	国立京都国際会館競技設計応募案	1963				jpg, tif				雑誌用図面 (jpg)
003	久田学園佐世保女子高等学校	1963				jpg, tif				雑誌用図面 (jpg)
005	国民宿舎丹沢ホーム(第1期)とバス待合所	1964				tif				
009	有孔体の世界(エンバイラメント展出品作品)	1965				jpg, tif				
010	山岸旅館	1965				tif				
016	川越市立霞ヶ関小学校	1966				tif				
017	スキーロッジ計画案	1966				tif				
018	伊藤邸	1967	jpg			jpg, tif		pdf		
019	佐倉市立下志津小学校	1967				tif				
026	慶松幼稚園	1968	jpg, tif			jpg, tif		jpg		
028	インダクション・ハウス	1968				jpg, tif				
033	THE HOLE(パリ・ビエンナーレ展出品作品)	1969				tif				
039	箱根国際観光センター競技設計応募案	1970				tif				
040	ACT 2	1970						jpg		
042	海の博物館	1971				tif				
043	粟津邸	1972				jpg, tif				
044	伊豆の釣り小屋	1972				tif				雑誌用図面 (jpg)
046	志津駅前計画	1972				tif				
051	原邸	1974	pdf	pdf		jpg, tif	pdf		mp 4	確認申請図 (pdf)
052	工藤山荘	1976	jpg, pdf			jpg, tif				
055	倉垣邸	1977				jpg, tif				
056	一滴庵	1977				tif				
059	ニラム邸	1978				jpg, tif				
061	湯布院山荘(脇坂邸)	1978				tif				
063	ホームベーカーリーマザーグース池袋店	1978						jpg		
065	東総住宅都市建設計画	1978				tif				
066	松樺堂	1979				tif				
067	秋田邸	1979				jpg, tif				
076	末田美術館	1981								口絵 (jpg)
077	鶴川保育園	1981	jpg			jpg				
083	伊豆・夢舞台-中塚別邸	1982				jpg, tif				
084	ラ・ヴィレット公園パリ国際設計競技	1982								
087	バスティーユ・オペラ座パリ国際設計競技	1983				tif				
093	嶋邸	1985				tif				掲載用図面 (jpg)
098	北川邸	1986				tif				
099	田崎美術館	1986				jpg, tif				掲載用図面 (jpg)
100	小波蔵邸	1986				tif				
101	工藤邸	1986				tif				
102	ヤマトインターナショナル	1986				jpg, tif				
104	影のロボット(ミネアポリス展1986)	1986				jpg, tif			mp 4	
106	虔十公園林フォリストハウス	1987				jpg, tif				
107	那覇市立城西小学校	1987	pdf			jpg, tif	pdf			計画概要書(pdf)
110	ケルン・メディアパーク都市計画構想国際提案競技	1988				jpg, tif				
112	飯田市美術博物館	1988	pdf			jpg, tif				構造図 (pdf)
113	大沢屋茶室 游喜庵	1988				jpg				
117	相鉄文化会館	1990				tif				
119	つくば市立竹園西小学校	1990				tif				
120	モンリオール国際都市設計競技	1990				jpg				
129	アーバンスケープ・ファニチュア(Future in Furniture)	1992				jpg				
130	内子町立大瀬中学校	1992	pdf	pdf		jpg		pdf		

PI番号	プロジェクト名	年	基本・実施図	竣工図	CG,パース	写真	スケッチ	掲載誌	動画	その他
132	地球外建築	1992				jpg, tif				
133	新梅田シティ	1993	pdf	pdf		jpg, tif			mp4, m4v	雑誌用CHスキャン (jpg, pdf)
134	プラトン・ボックス 500M×500M×500M	1993				jpg, tif				パネル (jpg)
138	25MUSIC STANDS	1995				jpg				
142	原ハウス	1996	pdf							説明会資料 (pdf), 確認申請図 (pdf)
145	JR京都駅ビル	1997	pdf			jpg	jpg	pdf	mov, wmv	
149	宮城県図書館	1998				jpg, tif				
150	(5800mm) 3 原邸増築	1998				jpg				
151	(7000mm) 3 松本邸	1998				jpg, tif				
152	(5200mm) 3, (6400mm) 3 + 書斎 伊東邸	1998				jpg, tif				
154	広島市立基町高等学校第Ⅰ期	1999	pdf							
155	医療法人たかき医院	1999	dxf			jpg				実施設計図面, 確認申請書類
156	東京大学国際・産学共同研究センター	1999	pdf							
157	東京大学先端科学技術研究センター	1999	pdf, txt			jpg				
158	秋田市日赤・婦人会館跡地等再開発における商業施設企画提案	1999	pdf			jpg				報告書 (pdf)
159	Urban Micro Topograhy in SOHO	1999				jpg				
163	広島市基町高等学校第Ⅱ期	2000				jpg				
164	医療法人葦崎東ヶ丘病院	2000	pdf	pdf		jpg, tif, pdf				
166	青森県立美術館設計競技	2000				tif				成果物 (pdf, txt, psd)
168	苦楽園プロジェクト	2000	pdf			jpg				
169	東京大学生産技術研究所	2001	pdf			jpg			mp4	
170	札幌ドーム	2001		pdf, tif, exe, bmp	tif	jpg, tif	jpg		mov, wmv	構造図 (pdf), 成果物まとめ (pps, ppt, pdf, xls, doc, avi)
171	国立高専沖繩プロポーザル	2001	pdf				jpg			
172	イタリア・ピアモンテ州庁舎国際設計競技 (トリノ1)	2001				jpg	tif		wmv, avi	提出パネル (jpg)
173	SKテレコム本社屋指名プロポーザル	2001					jpg			提出パネル (pdf, jpg)
175	長崎県美術館プロポーザル	2001				jpg	jpg			成果物 (pdf)
176	飯田高羽合同庁舎	2002	pdf	pdf						
177	折本邸	2002	pdf			jpg, tif				
178	離散都市埋蔵計画 (上海)	2002	pdf			jpg, tif				
179	離散都市埋蔵計画 (札幌)	2002	pdf			jpg				
180	大エジプト博物館国際設計競技	2002								成果物 (jpg)
181	北京オリンピックスタジアム国際指名設計競技	2003				jpg	dwg		b u p . i f o , v o b	説明書 (eps, ai, psd, jpg, tif), パネル (jpg, psd, ai, doc), テキスト (doc)
182	十日町ステージ越後妻有交流館 キナーレ	2003	pdf	pdf		jpg, png, tif				構造図 (pdf)
183	那覇市立城西小学校 (特別教室棟)	2003		pdf		jpg, tif				構造図 (pdf)
185	ホンダクリオ千葉八街店	2003	pdf	pdf		jpg				
186	医療法人葦崎東ヶ丘病院 (第Ⅱ期)	2004	pdf	pdf		jpg				
187	広州市双塔 (西塔) 国際指名設計競技	2004				jpg, tif	jpg		wmv	パネル (jpg)
188	ニコラス・G・ハイエクセンター指名設計競技	2004							mov	提出物 (pdf, mov, mp4, txt)
189	実験住宅モンテビデオ	2004	pdf			jpg, tif	jpg		mov, avi	手紙スキャン (tif)
190	小野邸 (フォリストハウス建て替え)	2004	pdf							
191	今村邸	2004	pdf			jpg				
192	しもきた克雷ドーム・むつ市ウェルネスパーク・センターハウス	2005	pdf	pdf		jpg			wmv, mp4	構造図 (pdf), コンパパネル (jpg)
193	了円院	2005	pdf	pdf		jpg				
194	台北巨蛋 (台北ドーム)	2005				jpg	jpg			パネル (pdf, jpg)
195	横須賀市宮鴨居住宅建替建築設計エスキスコンペ	2005				psd, jpg, eps	ai, eps, psd			提出資料 (pdf)
196	旧大和田小学校跡地施設プロポーザル	2005								提案書 (pdf, jpg)
197	実験住宅 コルドバ	2005	pdf, jpg			jpg				

PI番号	プロジェクト名	年	基本・実施図	竣工図	CG,パース	写真	スケッチ	掲載誌	動画	その他
198	Σ 8	2005					jpg			提出資料 (pdf, jpg)
199	国立感染症研究所ハンセン病研究センター新研究実験棟プロポーザル	2005								ヒアリング・先生原稿 (pdf)
200	町田市新庁舎プロポーザル	2005				jpg				提出資料 (pdf)
201	広島プロジェクト	2006				jpg		pdf, jpg	avi, mov, m1v	提出図書 (pdf, ppt), プレゼン資料 (m1v, ppt, pdf)
202	NEW HEADQUARTERS OF SANPAOLO IMI (トリノII)	2006				tif	jpg			パネル (jpg), 提出資料一式 (pdf, doc, lnk, ai, xls)
203	実験住宅 ボルト・アレグレ・ヴァージョン	2006	pdf			jpg	jpg			手紙スキャンデータ (tif)
204	福島県立会津学鳳中学校・高等学校	2007	pdf		jpg	jpg	jpg			構造図 (pdf)
205	夢舞台アネックス・紅傳工房	2007	pdf	pdf		jpg				
206	太原南駅周辺地区都市計画	2007				jpg, nef	jpg		wmv	提出パネル・説明書 (jpg, pdf)
207	デリー・メトロの3つの駅周辺地区計画	2007				jpg, nef			wmv, wav	
208	三条市斎場プロポーザル	2007								提出パネル (pdf, png)
209	長岡市厚生会館地区整備設計コンペティション	2007				jpg, psd				提出パネル (pdf)
211	ダブル・プランニング N-House計画(野田邸)	2008				pdf	jpg			
212	日本エジプト科学技術大学指名コンペティション	2009								報告書 (pdf), 提出パネル (pdf)
213	天津エコシティ	2009							mp4, wmv	提出パネル (jpg, tif)
214	小野邸アトリ増築	2009	pdf							確認申請図 (pdf)
215	恵友遠見? 公大樓 (新竹1)	2010	pdf			jpg, png				構造図 (pdf)
216	恵比寿のオフィス	2010	pdf	pdf				pdf		構造図 (pdf)
217	Raiding Cube	2010				jpg	jpg			成果物まとめ (pdf)
218	実験住宅 ラバス	2010				jpg	jpg			
220	草薙体育館プロポーザル	2011				jpg				提出パネル (pdf)、プレゼン資料 (pdf)
221	小野邸増築	2012	pdf			jpg	jpg			
223	恵友原見築集合住宅 (新竹2)	2012				png, jpg				
224	かじまや靴店	2013	pdf	pdf		jpg	jpg			
225	Raiding Project	2013	pdf			jpg, tif	jpg		mov	
226	ハノイ市都市鉄道建設計画(二号线) C1~C3	2014	pdf			jpg	jpg			
228	みなと交流センター	2015	pdf	pdf		jpg	jpg	pdf		プロポーザルパネル (pdf)
229	Three Travelers	2015	pdf			jpg	jpg, rtf			
231	慶松幼稚園改築	2017	pdf			jpg, png, pdf	jpg			
232	城西小学校屋内運動場・幼稚園・児童クラブ増築	2018	pdf		jpg	jpg	jpg			計画通知書類 (pdf), 雑誌用図面 (pdf)
233	eggg Caf_	2018	pdf	pdf		jpg		pdf		雑誌用図面 (pdf)
234	孔雀堂	2019		pdf	jpg	jpg				
235	鶴巻町プロジェクト	2020		pdf		jpg				見積図 (pdf)
236	珠洲プロジェクト	2020				jpg	jpg, pdf		mp4	
237	美仁段プロジェクト	-	pdf			jpg	jpg, pdf			
238	北投プロジェクト	-	pdf			jpg	jpg			プレゼン資料 (pdf)
239	上海プロジェクト	-	pdf			jpg, pdf	jpg			
240	(仮) 葛飾 Light-well Complex	-	pdf			jpg, pdf	jpg, pdf			報告書 (pdf), 構造図 (pdf)
241	eggg Park	-				jpg	jpg			見積図 (pdf), 構造図 (pdf)
242	飯田市美術博物館 特定天井補強工事	-	pdf	pdf		jpg	jpg			
242	十日町キナーレ2022監視カメラ	-	pdf	pdf						
242	西五反田W-gates Tower	-	pdf			jpg, pdf				
243	十日町キナーレ改修2023温泉棟	-	pdf	pdf						
245	奈良(森山荘)	-					jpg, pdf			報告書 (pdf)

## 近現代における日記資料のアーカイブをめぐる現状と課題

[活動報告]

—角田栄資料調査と国内外の日記資料所蔵施設へのヒアリングを通して—

長谷川 香\*

### Issues on Archiving Modern Diaries:

Through Research on TSUNODA Shigeru's Collection and Interviews with Domestic and International Institutions

HASEGAWA Kaori

The TSUNODA Shigeru Collection housed at the National Archives of Modern Architecture includes numerous personal materials such as photo albums, sketchbooks, and diaries. In fiscal year 2024, Tokyo University of the Arts conducted the following tasks: (1) research and digitization of the TSUNODA Shigeru Collection, (2) survey and interviews with domestic and international institutions regarding processing and accessibility of modern diaries, and (3) recommendations for processing and accessibility of diaries. This paper introduces the outline of those tasks and examines various issues concerning archiving modern diaries.

キーワード：角田栄、日記資料、資料の秘匿性

TSUNODA Shigeru, Diaries, Confidentiality of materials

#### 1. はじめに —事業の概要—

角田栄(1913–1993)は、戦後、アジア競技大会に合わせて建設された国立陸上競技場と国立競技場附属テニスコートの設計を建設省関東地方建設局営繕部第一課長として担当し、建築家片山光生とともに国立競技場を設計した中心的人物である<sup>1</sup>。2020年9月、遺族より角田資料全92点が文化庁国立近現代建築資料館(以下、建築資料館)に寄贈されたが、その多くは日記帳、写真アルバム、スケッチ帳等の個人資料である。これらは一次資料としての高い史料価値を有する一方で、個人情報もしくは業務に関する秘匿性の高い情報が含まれる可能性が高く、これまで建築資料館が中心的に扱ってきた図面資料とは性質が異なるため、その整理・公開を進めるうえでは慎重な検討が必要である。

そこで、角田資料の将来的な公開のための情報収集を行い、また、適切な整理・公開方法を検討することを目的とし、2024年8月から2025年3月にかけて、文化庁から東京藝術大学への委託業務「角田栄資料調査及び国立近現代建築資料館における日記資料の整理・公開に関する提言」が実施されることとなった。具体的には、角田資料の目録作成・デジタル化を通して内容を把握するとともに、近現代の日記資料を所蔵する国内外の施設を対象にヒアリング調査を実施し、今後の建築資料館における適切な整理・公開方法に対する提言を行った。

本稿では当該事業の成果をもとに、角田栄資料に含

まれる日記資料、近現代の日記資料所蔵施設へのヒアリング調査の概要を紹介し、近現代における日記資料のアーカイブをめぐる現状と課題について整理したい<sup>2</sup>。

#### 2. 角田栄資料に含まれる日記資料

角田栄資料に含まれる日記資料は全8点で、うち6点は1960～1963年、2点は1973～76年に作成されている。角田は1958年から建設省関東地方建設局に勤め、1964～65年頃に退職、1965年に株式会社奥村組に入社していることから、前者は建設省勤務時代、後者は奥村組勤務時代に作成されたものである。これらの日記資料について、見開きごとに詳細目録を作成して内容を把握した結果、一部の資料には個人情報や角田が携わった業務に関する情報等が含まれることが明らかとなった。以下、①建設省勤務時代の日記6点と、②奥村組勤務時代の日記2点に分けて、各資料の内容(秘匿性の高いと思われる情報が含まれる場合はその概要)を記す<sup>3</sup>。

##### ① 建設省勤務時代の日記6点(21-01～21-06)

建設省勤務時代の日記6点のうち、5点(21-01～21-05)は国立競技場建設のための海外視察に関連するもので、1点(21-06)は国立劇場の設計競技に関するものである。

・21-01〔日記・メモ(1961)〕〔図1〕

1961年のYAWATA IRON & STEEL CO., LTDの

\*東京藝術大学 准教授、博士(工学)

手帳に、アメリカとメキシコを中心とした最新のスタジアムに関する情報が記されている。国内外の建築雑誌名（『FORUM』、『ARCHITECTURAL REVIEW』、『国際建築』など）が記されている箇所が多く、それらを参照しつつ、角田が現地で視察した際の体験を踏まえて記されたものと考えられる。

・21-02〔日記・メモ（1960-1）〕〔図2〕

1960年の手帳（メーカー等不明）に記されており、前半は世界のスタジアムに関するメモ、後半は1960年3月23日～4月21日のヨーロッパ視察の記録である。手帳に貼り付けられた日程表によると、訪問地はローマ、ジェノバ、チューリッヒ、ウィーン、フランクフルト、ベルリン、パリ、ロンドン、ストックホルム、ヘルシンキ、コペンハーゲンである。視察した各地のスタジアムに関する詳細なレポートやスケッチのほか、出会った人物の名前が記されている箇所もある。

・21-03〔日記・メモ（1960-2）〕〔図3〕

21-02と同じ種類と思われる1960年の手帳（メーカー等不明）に記されており、21-02と同じく1960年3月23日～4月21日のヨーロッパ視察の記録である。日付が印刷されているタイプの手帳だが、その日付とは関係なく記されており、なおかつ、必ずしも最初の頁から日付順に記されているわけではなく、視察後半の4月17日の記録は日記の冒頭に記されている。訪問先のスタジアムのみならず、他の公共施設や文化施設、遺跡等を精力的に視察し、多くの記述とスケッチを残している。現地で会った人物の名前が記載されるものの、基本的に氏名のみで、それ以上の個人情報は記されていない。

・21-04〔日記・メモ（1961-1）〕〔図4〕

ノート（メーカー不明）に、1961年3月26日～4月26日に行ったアメリカ視察に関する情報が記録されている。視察の日程表や旅費の概算のほか、視察の最初の2日間（3/26、3/27）の出来事が記されている。日程表によると、訪問地はホノルル、サンフランシスコ、シカゴ、ピッツバーグ、ニューヨーク、ボストン、ワシントン、ジャクソンビル、タンパ、マイアミ、ニューオーリンズ、メキシコ、ロスアンゼルスである。

・21-05〔日記・メモ（1961-2）〕〔図5〕

1961年のYAWATA IRON & STEEL CO., LTDのスケジュール帳に記されているが、スケジュールや

日々の記録ではなく、カーテンウォールに関するメモや論考（貼り付けもしくは筆写）で構成される。主に1960～1961年の国内外の建築雑誌（『FORUM』、『建築と社会』）や新聞（『日刊建設通信』、『朝日新聞』、『日刊建設通信』）の切り抜きが多いことから、作成年代は1961年頃と考えられる。後半には角田が著した論考「カーテンウォールのデザイン」が貼り付けられていることから、21-05はこの論考を執筆するために作成された資料だと考えられる。

・21-06〔日記・メモ（1962-63）〕〔図6〕

1962年のYAWATA IRON & STEEL CO., LTDのスケジュール帳に記されている。1962年6月～1963年6月に作成された日記で、冒頭に「REGULATION OF DESIGN COMPETITION FOR NATIONAL THEATER IN JAPAN」と記されているとおり、1962～1963年に実施された国立劇場の設計競技に関する記録である。角田は建設省の職員としてこの設計競技に関与したようで、審査会における委員の議論や採点表などが記されている。公的な業務ではあるが、設計競技に関する秘匿性の高い情報が含まれる可能性がある。

② 奥村組勤務時代の日記2点（21-07、21-08）

・21-07〔日記・メモ（1973）〕〔図7〕

1973年1月～12月に作成された日記である。さまざまな組織との打合せや視察の記録であり、多くの建築物や工事名称が登場する。箇条書きや単語が羅列されている箇所が多いため、日記の全容が把握しにくい。業務に関わる秘匿性の高い情報が含まれる可能性がある。個人情報に関しては、角田以外の人物の個人名と住所、もしくは出身大学、生年月日等が記されている箇所が複数ある。また、角田個人の貯金額と思われる記載もある。

・21-08〔日記・メモ（1976-77）〕〔図8〕

基本的に1976年～1977年に作成された日記であるが、一部、「平成23年」と「平成28年」と記された箇所があり、後年に手が加えられている。21-07同様、さまざまな組織との打合せや視察の記録であり、角田が携わった業務に関する秘匿性の高い情報が含まれる可能性がある。また、個人名と住所、保険番号等の記載があり、角田および角田以外の個人情報が含まれている。



### 3. 国内外の日記資料所蔵施設へのヒアリング

日記資料の整理・公開に関する現況とその課題を把握すべく、近現代の日記資料を所蔵し、公開している主要な国内外の施設を対象とし、ヒアリング調査(一部の国外の施設に関しては、アンケートで代替)を実施した。調査の実施件数は、国内9件、海外4件の合計13件である。

#### 3.1. 調査対象

国内においては、建築家・建築史家の日記を所蔵する施設を主な調査対象としつつ、比較的早くから整理・公開が進められておりノウハウが蓄積されていると考えられる政治家や文学者の日記、さらに近年注目が高まっている市井の人々の日記を所蔵する施設も調査対象とした。具体的な調査実施件数は、建築家・建築史家の日記を所蔵する施設3件(金沢工業大学建築アーカイヴズ研究所、京都府立京都学・歴史館、東京大学総合研究博物館小石川分館)、政治家の日記を所蔵する施設2件(国立国会図書館憲政資料室、国立公文書館)、文学者の日記を所蔵する施設1件(日本近代文学館)、市井の人々の日記を所蔵する施設・データベース2件(「データベース 近代日本の日記」、手帳類図書館)の合計8件である。なお、建築家の日記資料を所蔵しているわけではないが、書簡等の私的な情報を含む資料を所蔵している施設1件(谷口吉郎・吉生記念金沢建築館)についても参考事例としてヒアリングを実施した。

海外については、建築家の日記資料を所蔵する欧米の施設を調査対象とした。具体的な調査実施件数は、ヒアリング調査1件(米国議会図書館[アメリカ])、アンケート調査3件(ル・コルビュジェ財団[フランス]、アルヴァ・アアルト財団[フィンランド]、カナダ建築センター[カナダ])の合計4件である。

#### 3.2. 調査結果の総括と分析

国内・国外の施設とも、①資料の概要と公開状況、②日記資料の収集・整理・公開の方針、③日記資料の公開に伴うトラブル、④その他(日記資料の収集・整理・公開に関する問題点や課題)、についてヒアリング(一部アンケート)調査を実施した。全13件の調査結果の総括とそれに基づく分析を以下に記す。

##### 3.2.1. 「日記」の定義と資料としての多様さ

一般的に「日記」とは、「毎日の出来事や感想などの記録」<sup>4</sup>、「できごとや感想を一日ごとにまとめ、日づけをつけて、その当日または接近した時点で記録すること。

また、その記録。」<sup>5</sup>、を意味するが、今回の調査を通じて、国内外の施設で「日記」もしくはそれに類する資料として認識されている資料は実に多様であることが判明した。

資料形態に関しては、市販の日記帳だけではなく、スケジュール帳やノート、スケッチブックに記されている場合があり、時代がくだるにつれ、資料形態のバリエーションが増える傾向にある。

内容に関しては、事前に行ったスケジュールのうえに事後的に出来事や感想が加筆され、スケジュール帳と日記帳の役割を兼ね備えている場合もあれば、日々の出来事とともにそれとは直接的には関係のないメモが付随し、日記帳とメモ帳の役割を兼ね備えている場合も多く見受けられる。とくに書き手が建築家・建築史家の場合には、文章がほとんどなく、スケッチ主体のものも多く存在した。また、プライベートな出来事を記した日記もあれば、業務に関する出来事を記したいゆる業務日誌もあり、その内容は様々であった。

##### 3.2.2. 日記資料の収集

いずれの施設においても、基本的に資料は公開することを前提として収集している。そのため、非常に私的な個人情報(家族の事情や本人の恋愛関係、金銭関係等)やその他の秘匿性の高い情報が多く含まれ、公開できない可能性がある資料は、そもそも収集しないという方針をとっている場合が多い。ただし、多くの施設においてその判断基準は明文化されておらず、資料の性格に応じて、その都度判断している。

##### 3.2.3. 日記資料の整理

各施設において日記資料の公開に際し、どの程度まで資料を整理し、目録を作成するのかを調査したところ、多くの組織においてアイテムレベル(日記1点)、もしくはファイルレベル(日記が含まれるボックスやファイル)の目録を作成しており、少数ではあるが、頁もしくは見開きごとに目録を作成している施設もあった。

アイテムレベルもしくはファイルレベルの目録を作成している施設では、日記資料に興味がある利用者がそれにアクセスすることができる必要最小限の目録を作成することにより、できるだけ早く資料を公開することを重視していた。

##### 3.2.4. 日記資料の公開

日記資料の公開に関しては、その段階に応じて手続きを定める組織が多かった。以下、①資料の目録情報の

公開、②資料の現物・複写物・デジタルデータ等を閲覧に供することによる公開、③資料の内容や画像の論文掲載、翻刻物の出版等による対外的な公開、の3段階に分けて整理する。

#### ① 資料の目録情報の公開

多くの施設において、目録がオンライン上のデータベースもしくは文書等で対外的に公表されていた。目録はアイテムレベルで、資料番号、タイトル、作者、制作年などの基本情報のみを記載しているケースが多かった。なお、オンラインのデータベースが整備されている組織では、誰でも自由にアクセスできる場合が多いが、会員登録制(無料)としている場合もあった。また、目録のみならず、デジタル化した資料画像もオンライン上のデータベースで公開している施設もあった。

#### ② 資料を閲覧に供することによる公開

申請書や特別な閲覧資格なしで閲覧できる場合もあれば、申請書の提出を義務付けている場合もあった。申請書には利用者の氏名や所属、連絡先とともに、閲覧目的を記載する欄があり、基本的に調査・研究目的とした閲覧を前提としている施設が多い。なお、申請書の提出を義務付けている場合でも、所属や調査・研究目的によって閲覧を制限することはなく、基本的に広く資料を閲覧に供している。また、閲覧に際しては、プライバシーの保護や人権への配慮に十分に留意するよう、利用案内等で注意喚起をしている施設が多い。

#### ③ 資料の論文掲載、翻刻物の出版等による公開

論文や翻刻物の出版等による対外的な公開に関しては、利用申請書の提出を義務付けている施設が多い。とくに資料を所蔵している施設以外が著作権を保持している場合には、利用者が著作権者に利用の許可を得る必要がある。なお、利用申請書には、プライバシーの保護や人権への配慮に十分に留意すること、対外的な公開によって法律上の問題が生じた際には利用者がその責任を負うことを明記している施設が多い。

以上のように、いずれの施設も資料を公開し、利用者の閲覧に供することを重視しているため、①と②のレベルでの公開については手続きなし、もしくは簡易な手続きのみであり、利用者にとってハードルが低く設定されている。一方、③のレベルでの公開については、著作権や個人情報等に関するさまざまなトラブルを回避するため、①と②よりも高いハードルを設けている機関が多い。

### 3.2.5. 資料の公開・非公開・一部公開の判断基準

3.2.2に記したとおり、秘匿性の高い情報が多く含まれ、公開できない可能性がある資料は、そもそも収集しないという方針をとっている施設が多い。しかしながら、そのような情報が含まれていたとしても、何らかの観点から重要な資料であると判断された場合には収集されることもあり、各施設ではそういった資料を一部非公開とし、一定期間非公開とするなどして対応している。国によって著作権やプライバシー保護に関する法律は異なるが、著しく個人の権利利益を害するおそれがあるものの公開については慎重に検討するという点は、国内外の施設で共通していた。

個人情報を含む資料の公開・非公開・一部公開の判断基準に関しては、対外的に公開はしていないが内規がある、もしくは内規はないが一定の判断基準が施設内で共有されている場合が多いが、とくに国立公文書館では「30年を経過した特定歴史公文書等に記録されている個人に関する情報について」という表を公開し<sup>6</sup>、個人情報の種類に応じて、個人の権利利益を害するおそれがあるかについて検討を行う期間の目安(50年、80年、110年を超える適切な年)を参考として明示している。しかしながら、一定の判断基準があったとしても、実際の資料にはさまざまな個人情報が含まれており、また、その情報の組み合わせもさまざまであり、機械的に公開・非公開・一部公開を判断することは難しい。そのため、いずれの施設においても資料の内容に応じて、ケースバイケースで判断していた。

上記のような判断には資料の内容を精査する必要がある、相当な時間を要する。そのため、まずは資料の概要を把握して簡易な目録を作成して資料情報を公開したあと、利用者から初めて閲覧申請があった段階で資料の内容を精査するという対応をしている施設が多かった。

### 3.2.6. 日記資料の公開に伴うトラブル

今回調査した限り、日記資料の公開に伴う重大なトラブルは確認できなかった。とくに論文掲載や翻刻物の出版等による対外的な公開に関しては、利用申請書において法律上の問題が生じた際には利用者がその責任を負うことを明記することで、万一トラブルが生じたとしても所蔵している施設自体には責任が生じないようにしている事例が多い。

#### 4. 日記資料のアーカイブをめぐる現状と課題

最後に、当該事業を通して見えてきた日記資料のアーカイブをめぐる諸問題を整理したい。

##### ① 資料活用促進と資料整理にかかる負担軽減のバランス

日記資料の形態や形式、内容は実に多様であり、秘匿性の高い情報が含まれるか否かは資料ごとにその都度精査しないと判断できない場合が多い。角田栄資料の場合には、日記をアイテムレベルではなく、見開きごとにより、各資料にどの程度の秘匿性の高い情報が含まれるかを判断することができたが、当然、アイテムレベルの整理よりも多くの時間を要した。国内外の多くの日記資料所蔵施設に倣い、ファイルもしくはアイテムレベルの目録を作成した段階でそれを一般に公開し、利用者から閲覧申請があった段階で詳細目録等を作成して資料の内容を精査し、資料の公開・非公開・一部公開の判断をしていくことで、資料整理担当者の負担を最小限にしつつ、資料の公開を早め、その活用を促進させることができるだろう。

##### ② 日記資料のアーカイブに関する知見の共有

今回のヒアリングを通じて、日記資料はさまざまな施設で所蔵されているにもかかわらず、日本国内では日記資料の整理・公開に関する知見が共有されていない状況が明らかとなった。多くの施設において、秘匿性の高い情報が含まれる可能性がある日記を扱う際には特別な注意を払っており、「他の組織でどのような方針のもと、日記が整理・公開されているかの把握できていないため、そのような情報を取りまとめて共有してほしい」といった意見や、「文化庁が方針を示してくれば、是非参照したい」といった意見が寄せられた。それゆえ、建築資料館で日記資料のアーカイブに関する方針を策定して公表することにより、日記資料を所蔵するさまざまな施設の規範となることが期待される。

#### 謝辞

本報告のもとになった事業「角田栄資料調査及び国立近現代建築資料館における日記資料の整理・公開に関する提言」におけるヒアリングもしくはアンケート調査にあたっては、藤本貴子氏（法政大学）に助言をいただくとともに、国内外の以下の機関とデータベースの関係者にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

国内：金沢工業大学建築アーカイヴズ研究所、京都府立京都学・歴史館、東京大学総合研究博物館小石川分館、国立国会図書館憲政資料室、国立公文書館、日本近

代文学館、「データベース 近代日本の日記」、手帳類図書室

国外：米国議会図書館 [アメリカ]、ル・コルビュジエ財団 [フランス]、アルヴァ・アアルト財団 [フィンランド]、カナダ建築センター [カナダ]

#### 注

- 1 角田の主な経歴は以下のとおりである。  
1913年 京都府生まれ  
1934年 大阪高等学校理科甲類卒業  
1937年 京都帝国大学工学部建築学科卒業  
1937年 大蔵省管繕管財局入局  
1938～1946年 徴兵（召集と召集解除を繰り返す）  
1958年 建設省関東地方建設局管繕部第一課長  
1961年 建設省関東地方建設局管繕局建築課長  
1964年 建設省関東地方建設局管繕部長  
1965年 株式会社奥村組入社、常任顧問  
1967年 株式会社奥村組取締役  
1969年 株式会社奥村組常任取締役  
1974年 株式会社奥村組専務取締役（～1981年）  
1993年 心不全のため逝去（享年80歳）
- 2 日記資料以外も含めた角田栄資料の全容や目録作成・デジタル化の詳細に関しては、事業報告書「角田栄資料調査及び国立近現代建築資料館における日記資料の整理・公開に関する提言」（令和7年3月、東京藝術大学）を参照されたい。
- 3 建築資料館の資料には「フォンド番号-フォンド内の通し番号」という形式で資料番号が付されており、角田栄資料はフォンド番号が21であることから、資料整理番号は「21-〇」となる。また、各資料には建築資料館にて資料受け入れ時に簡易な資料名が付与されている。以上を踏まえ、本稿で角田資料に言及する際には、資料整理番号のみ、もしくは資料整理番号の末尾に〔資料名〕を付して表記する。
- 4 『デジタル大辞泉』、2012年、小学館。
- 5 『日本国語大辞典 第二版』、2000～2002年、小学館。
- 6 「独立行政法人国立公文書館における公文書管理法に基づく利用請求に対する処分に係る審査基準」2011年4月1日、最終改正2022年4月1日。

（2026年1月22日原稿受理）

# 菊竹清訓建築アーカイブズ資料整理における 資料量把握と長期整理の課題

[活動報告]

—概要調査段階の想定と約10年間の整理実態を踏まえて—

齋藤 信吾\*

## Issues in Quantifying Archival Materials and Long-Term Arrangement in the KIKUTAKE Kiyonori Architectural Archives:

Assumptions at the Preliminary Survey Stage and the Actual Situation over Approximately Ten Years

SAITO Shingo

This paper examines the quantification and long-term organization of architectural archival materials related to architect Kiyonori Kikutake, focusing on the discrepancy between assumptions made during the preliminary survey stage and the actual archival processes over approximately ten years. Based on archival practices at the National Archives of Modern Architecture, Japan, the study analyzes material volume estimation, phased donations, digitization, and institutional constraints. The findings highlight structural challenges in architectural archives, including dispersed materials, prolonged donor burden, storage limitations, and the necessity of dynamic cataloging systems for sustainable archival management.

キーワード：建築アーカイブズ、菊竹清訓、アーカイブズ管理、資料の組織化、資料整理

Architectural archives, KIKUTAKE Kiyonori, Archival management, Material organization, Architectural documentation

### 1. はじめに

文化庁国立近現代建築資料館 National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs (以下、NAMA) は、2013年5月の開館以来、我が国の近現代建築に関わる重要資料の収集・保存を進めるとともに、展示活動を通じた建築文化の社会的普及、および調査研究活動を通じた建築アーカイブズのあり方の探究を主要な使命として活動を展開してきた。近年、建築文化の継承においてアーカイブズの果たす役割は一層重要視されており、NAMAはその中核的拠点として、資料保存のみならず研究基盤形成にも寄与している。

建築家・菊竹清訓の建築設計活動に関する資料については、2013年度に実施された「近現代建築資料(建築家『菊竹清訓』)の概要調査と展示準備業務」を契機として整理が開始された。その成果の一端として2014年度には企画展「建築のこころ—アーカイブにみる菊竹清訓展」が開催され、以降、資料整理および「菊竹清訓建築設計資料」としての体系的収蔵が段階的に進められている(写真1)。図面資料の事前調査と移送は、2019年度に1960年代設計資料群、2020年度に1970年代設計資料群、2023年度に1980年代以降設計資料群として段階的に実施され、寄贈契約・資料整理も年代群ごとに進行している(1960年代群は2020年に寄贈契約、1970年代群は2023年度に寄贈契約に必要な整理が完了、1980年代以降群は整理実施中)。

さらに、寄贈資料とは別に借用資料の調査・整理・展示活用が継続して行われている点も近年の特徴である。借用資料リストでは、図面資料を中心に輸送番号単位で整理対象が設定され、図面筒等に収納された原図資料が多くを占めているほか、写真アルバム等の媒体資料も含まれている。輸送番号の欠番や要調査資料が存在することから、借用資料の管理には数量把握だけでなく所在・保存状態・関連性の確認を含む継続的管理が求められている。

また、整理業務および整理進捗統計の作成は執筆者が委託・請負業務を受託あるいは外部有識者としての参画で継続的に実施している。本稿における整理進捗把握はこれら業務記録に基づくものである。なお、2025年4月から同年12月までの期間については、新規整理作業は実施されておらず、整理状況は前年度末の状態を維持している。

以上のように、寄贈・借用・公開利用・デジタル化が同時進行する現在の運用は、概要調査段階で想定されていた比較的直線的な整理工程とは異なり、長期的かつ動的な整理体制を必要としている。本稿ではこの実務状況を踏まえ、概要調査段階の想定と約10年間にわたる整理実態との差異を整理し、長期整理に伴う課題を抽出したうえで、今後の建築アーカイブズ資料整理の方法論を検討する。

\*東京理科大学 嘱託助教／早稲田大学 非常勤講師、修士(工学)



写真1 2024年3月19日情報建築での資料整理風景  
(© 斎藤信吾)

## 2. 令和6年度資料整理・収蔵準備業務

令和6年度には、「菊竹清訓建築設計資料の収蔵に向けての資料調査業務」が実施された。本業務は、収蔵候補資料の選定、整理番号付与、簡易撮影、目録作成等を通じて資料群の継続的な体系的把握を進めることを目的として実施されたものである。

対象資料は、菊竹清訓建築設計事務所に残存する建築設計資料を中心とし、図面資料に加えて構造計算書、コンペ資料、写真資料、関連文書等が含まれている。整理対象は、資料名種類数：西友能見台店、国見 SA・松川 PA、江戸東京博物館、川崎市市民ミュージアム、福岡市庁舎、北九州メディアドームなどのプロジェクトを含む、計1,515点(特定プロジェクト数：55作品)に及び、簡易目録作成および基礎整理が実施された。資料は特定プロジェクトへの集中と単発資料群が混在する構成を示す。最大資料群は海老名 SA 関連で18点、北九州メディアドーム14点、久留米市新庁舎10点であった。一方、多くのプロジェクトは単発資料であり、設計過程資料の散在性および収集段階差を反映していると考えられる。(表1)

整理方法としては、図面・スケッチ・写真等を NAMA 収蔵対象資料として分類し、構造計算書等については他機関収蔵の可能性を含めた整理を行った。また、資料は段ボール箱単位で仮整理され、追加で約100箱規模の資料群として把握されている。目録作成には、資料番号・名称・年代・媒体種別・保存状態等が記録された。

本業務は収蔵準備の最終段階に位置付けられる一方、資料総量の最終確定にはなお継続的調査が必要とされており、建築アーカイブズ構築の長期性が改めて確認された。

表1 令和6年度菊竹清訓建築設計資料整理主要プロジェクトの資料数

プロジェクト名	資料数
東名高速道路 海老名SA	18
北九州メディアドーム	14
久留米市新庁舎	10
京都信用金庫本店	6
東京都江戸東京博物館	5
石橋文化会館	5
都城市民会館	3
飯能カントリークラブ	3
日軽アルミ船橋工場総合事務所	2
東光園	2
江戸東京博物館	2
福岡市庁舎行政棟	2
東名高速道路海老名SA	2
他(資料数1点以下)	1,443
合計	1,515 <sup>5</sup>

## 3. 寄贈受入前当初の資料保管状況

2013年度に実施された「近現代建築資料(建築家『菊竹清訓』)の概要調査と展示準備業務」は、近現代建築資料の情報収集を推進し、その保存およびデータベース化に資することを目的として、建築家・菊竹清訓に関する建築資料(図面、写真、模型等)の概要調査を行うとともに、当該調査成果を活用した建築資料展示の準備業務を実施したものである。

本事業の主たる目的は、菊竹清訓の建築資料の全体像を把握することであり、建築設計図面については名称・枚数(冊数)・内容等、写真については枚数・内容・撮影者等、さらにその他資料(模型、スケッチ、書類、音声・映像資料等)については内容および数量の調査を行った。また、国内外に散在する関連資料の所在確認および保存状態の把握についても併せて実施した。

調査開始時点において、菊竹清訓の建築資料の約9割以上は情報建築(旧・菊竹清訓建築設計事務所)に収蔵されていた。概要調査ではまず、アンビルト作品を含む建築作品リストおよび図面リストの作成を行い、図面の名称・枚数(冊数)・内容等の把握を進めた。その結果、アンビルトを含む建築作品は582作品にのぼることが確認された(現在では646作品と考えられる。ただし記録外の作品が存在する可能性あり)。また、図面(原図)は約1万5千枚以上保管されていることが判明した。なお、業務期間内にすべての図面を取り出して再整理することは物理的・時間的に困難であったため、

枚数は既存図面リストに基づく概算値である。

図面はすべて図面筒に丸めた状態で保管されていた。この保管形態は、取り出し後に元の状態へ再収納することが困難であることから、将来的には平置き保管への移行が望ましいと判断された。図面総量は、図面リスト記載の図面が内容ごとに図面筒に収納されていると仮定した場合、容積約22.8㎡と算定された。

写真資料についても同様にリスト化を行い、枚数・内容・撮影者等の整理を行った。紙焼き写真は15,382枚であり、これに加えてダイレクトプリント5,058枚、ネガフィルム2,703枚、その他印刷物755枚、コンタクトシート3,184枚の存在が確認された。写真資料全体の総量は容積約1.3㎡と算定され、コンタクトシート単独では容積約0.3㎡と把握された。

映像資料については143件の記録媒体が書庫に保管されていることが確認された。これら音声・映像資料の総量は容積約2.6㎡と算定された。

スケッチ資料については3,744枚がファイルに収められ、書棚に保管されていることを確認した。総量は容積約0.9㎡である。なお、スケッチやメモは紙媒体に限らず、手帳、配布資料、書籍、ボード等にも描かれる場合があるが、本調査期間内にそれら非紙媒体を網羅的に把握することは時間的制約から困難であった。そのため本業務では、分類整理済みの紙媒体資料を主対象として概要把握を行い、それ以外は「その他資料」として整理した。

その他資料（構造計算書、講演資料、報告書等書類）の総量は容積約40.2㎡と算定された。なお、図面以外の資料については、内容ごとにキャビネットへ収納された状態を前提として算出したものである。

さらに、菊竹事務所以外に所在する資料として、早稲田大学古谷誠章研究室に「京都国際会議場」の模型1点、早稲田大学建築学科貴重書庫に学生時代の原図12枚、岩手県立図書館に「岩手県立図書館」の模型1点が確認されている。また、岩手教育会館（2015年閉館後解体）に存在した「岩手教育会館」の模型1点および個人蔵の「盛岡グランドホテル」の模型1点については現在所在不明である。加えて、ホテル東光園には「ホテル東光園」の模型1点、ポンピドゥー・センター（フランス・パリ）には「塔状都市」のスケッチ2枚、「海上都市」のスケッチ2枚、および模型1点が所蔵されていることを確認している。

#### 4. アーカイブズ資料整理における整理方法・方針（寄贈受入前に想定された内容）

2013年度に実施された菊竹清訓建築設計資料の概要調査は、資料群の全体像を把握することを主目的としたものであり、その成果を踏まえ、今後のアーカイブズ構築に向けた資料整理の方法および方針が検討されていた。当該報告では、今後の調査作業は大きく「展示用調査業務」と「展示以降の詳細調査業務」に区分され、段階的に資料整理を進める方針が示されている。

まず、展示用調査業務としては、資料のリスト化とデータ化の推進が最優先事項として位置づけられていた。概要調査では資料の種類や数量の把握は行われたものの、スケッチや写真などはリスト情報と個別資料との対応関係が十分に整理されておらず、今後は資料一点ごとの記録情報を対応させた精密な目録整備が必要であるとされた。また、図面原図については物理的取り扱いの困難さから、既に存在するマイクロフィルム資料を二次データとして活用し、これをデジタル化することで公開・展示に資する基盤を整備する方針が想定されていた。さらに、写真資料、スケッチ資料、映像資料についても段階的なデジタル化を進める必要が指摘され、特に写真資料については撮影者情報の整理・特定が今後の課題として認識されていた。

加えて、模型資料については調査時点で未確認部分が多く、保管場所の制約や修復中資料の存在などから、寸法・保存状態・写真記録を含めた詳細リスト化が今後必要とされていた。これにより、建築資料としての価値評価および保存優先順位の検討が可能になると考えられていた。

展示後の詳細調査段階においては、さらに広範な資料把握が求められていた。特に「その他資料」として暫定分類された講演資料、見積書、額装パネル、未整理図面、スライド資料等については、内容・数量ともに未把握部分が多く、包括的な再調査が必要とされた。また、事務所以外に分散保管されている資料についても調査範囲を拡張し、とりわけスカイハウスをはじめとする関連施設に残存する資料の所在確認が重要課題として示されている。さらに、建築資料の定義や保存対象範囲については研究者・関係者間で合意形成を図りながら整理を進める必要性が指摘されており、アーカイブズ構築における理論的基盤整備の重要性も認識されていた。保存環境整備も重要な方針の一つとして挙げられている。特に図面原図は図面筒に収められた状態で保管されており、保存環境として必ずしも適切とは言えない状況であったため、温湿度管理下での平置き保存への移

行が望ましいとされた。また、保管環境の改善や移管の際には、オリジナル図面の全面的スキャンを視野に入れた保存・公開の統合的な方策が必要とされていた。

以上を踏まえると、当時想定されていたアーカイブズ資料整理の基本方針は、①資料全体の網羅的把握と目録整備、②デジタル化によるアクセス基盤の構築、③分散資料の統合的把握、④保存環境の改善と長期保存対策、⑤建築資料の範囲・定義に関する理論的整理、という複合的課題に段階的に対応することであったと整理できる。これらは建築アーカイブズ形成の初期段階における典型的課題を示すものであり、後続の資料移管・整理・公開プロセスの基盤を形成したものと位置づけられる。

## 5. 想定と実態の差異、および長期整理に伴う課題と今後の方針

2013年度に実施された菊竹清訓建築設計資料の概要調査では、資料群の全体像把握を主目的として基礎的な数量把握が行われた。

当時の整理方針としては、これら資料のリスト化・データ化を進め、段階的な寄贈受入と保存環境整備を行うことで、一定の見通しのもとで資料整理を進めることが想定されていた。しかし、その後約10年間にわたり進められた資料整理の実態は、これを上回る長期的プロセスとして展開している。

まず、資料受入は一括的ではなく、年代別・資料種別ごとに段階的に進められている。例えば図面資料は1960年代、1970年代、1980年代以降と時期別に整理・寄贈契約が進められ、なお整理継続中の資料も存在する。このように、整理作業は想定以上に長期化しており、資料点数の確定自体が動的プロセスとなっている。さらに、寄贈契約締結済み資料に加え、「寄贈検討」「作業中」「未詳」といった整理段階の異なる資料が混在していることが報告されており、資料総量は今後も増加する可能性が指摘されている（「未詳」はNAMA以外の場所への寄贈検討などを含む）。

この差異の背景には、建築資料特有の性質がある。すなわち、図面・スケッチ・写真・模型・出版関連資料・講演資料など多様な媒体が混在すること、設計過程の副次資料が膨大に存在すること、さらに同一プロジェクトに関連する資料が複数媒体に分散していることなどが、整理作業の複雑化と長期化を招いている。また、概要調査段階では把握されていなかった資料の存在が整理過程で次第に明らかになり、資料点数の想定が更新され続けるという構造的問題も確認される。

さらに重要なのは、資料寄贈者側の負担である。整理期間の長期化に伴い、寄贈完了までの間、資料の保管・管理責任は寄贈者側に残ることが多く、保管スペース確保、保存環境維持、資料管理作業への協力など、実務的・経済的負担が継続的に発生する。また、寄贈完了時期の見通しが立ちにくいことは、事務所運営や資料処遇判断にも影響を与え、心理的負担も無視できない。建築設計事務所の場合、実務スペースと資料保管が競合することも多く、この問題は特に深刻となる。

一方、受入機関であるNAMA側にも施設の制約と限られた事業費で運用する経済的制約が存在する。現在の資料庫は必ずしも十分な収蔵余裕を有しておらず、整理作業スペースも限られているため、資料受入の速度や整理効率に影響が生じている可能性がある。資料保存環境の確保はアーカイブズの根幹的条件であり、収蔵スペース不足は長期整理の構造的要因の一つと考えられる。

以上を踏まえると、建築アーカイブズ資料整理における今後の方針として、以下の点が重要となる。

第一に、寄贈前段階からの共同整理体制の構築である。寄贈者・受入機関・研究者が早期から整理方針を共有し、暫定目録の段階で段階的寄贈を可能とする仕組みが求められる。

第二に、デジタル化を前提とした整理戦略である。物理資料の全面移管を前提とするのではなく、デジタルデータ化を通じてアクセス性を確保しつつ、物理資料は分散保管も含めた柔軟な管理方法を検討する必要がある。

第三に、収蔵施設および整理スペースの中長期的確保である。近現代建築資料は今後も継続的に寄贈が見込まれるため、アーカイブズ基盤整備は施設計画の視点から検討されるべき課題である。

第四に、資料点数の「確定」を目的とするのではなく、「更新され続ける情報」として扱う目録管理体制の構築である。建築資料の特性を踏まえた動的アーカイブズ管理が必要となる。

総じて、菊竹清訓建築資料の整理過程は、日本における近現代建築アーカイブズ形成の典型的課題を示す事例である。当初の概要調査における数量把握と整理方針は基礎的には妥当であったものの、実務段階では資料量の増加、整理期間の長期化、施設制約、寄贈者負担といった課題が顕在化している。今後は、寄贈者と受入機関双方の負担軽減を図りつつ、持続可能な建築アーカイブズ構築体制を確立することが求められる。

(2026年2月9日原稿受理)

# 村田豊建築設計資料の整理及び万国博覧会パビリオンに関する資料の調査報告

[資料紹介]

王 聖美\*

## Report on archival materials of world's fairs' pavilions among MURATA Yutaka Archive

OH Seibi

Report of organization of MURATA Yutaka Architectural Materials for 2024. Additionally, report on findings from research conducted in preparation for the exhibition "World Fair in JAPAN 1970-2005," scheduled for 2024-2025. Among Murata's World Expo pavilions, the unrealized "EXPO '70 Fuji Group Pavilion SAPPORO BEER NEW MUNCHEN" (1968-69) and the Grand Roof Plaza and Observation Tower for "EXPO '75 OKINAWA" (1973) are considered to complement the thought process behind the pneumatic structures he pursued throughout his career.

キーワード：村田豊、日本万国博覧会、沖縄国際海洋博覧会、空気膜構造、アンビルト

MURATA Yutaka, Japan World Exposition Osaka 1970, International Ocean Exposition Okinawa, pneumatic structure, unbuilt

### 1. はじめに

令和6年度、当館では研究職職員が7~8人が所属した<sup>1</sup>。職位や専門領域<sup>2</sup>に関わらず、各研究職職員は、収集/企画/情報いずれかの担当と、資料(群)担当を兼務している。

資料(群)担当の業務は、第一に、贈与契約(寄贈契約)前の準備段階にある寄託資料(借用契約期間)の評価選別やリスト作成、第二に、贈与契約を経て受贈した資料の保存・整理(目録採録、保存管理、デジタル媒体変換)、利用対応(利用審査、利用者支援、他館連携時の資料貸出)を担っている。研究職職員各々が担当する資料群は、館の収集活動の成果<sup>3</sup>に応じて年々増え、職員は一人当たり3~11資料群(Fonds)を担当し、それらの資料整理の年間計画をたて、整理(フラットニング、包材入替、ナンバリング、簡易修復)、目録採録、デジタル媒体変換などのPDCAサイクルを続けている。

令和6年度は、令和6・7年開催の「日本の万国博覧会1970-2005」展(令和7年3月~8月)の開催に先立ち、館内では収蔵資料に含まれる国内5つの万国博覧会の関連資料の調査が有志の研究補佐員によっておこなわれた。筆者は当時担当していた8の資料群のうち、村田豊建築資料、大高正人建築設計資料、大谷幸夫建築設計資料の調査を進めた。いずれも今後の更なる研究が期待される資料群であるが、本稿では、令和6年度の村田豊建築設計資料の整理と展覧会準備に伴う調査で得た成果について報告する。

### 2. 村田豊建築設計資料の整理

#### 2.1. これまでの経緯

当館は収集アーカイブズであり、基本的には記録を作成したあるいは残した組織を出所、つまり、ファンドとしてきた。村田豊建築設計資料はファンド番号7が割り当てられた資料群で、資料群の来歴、整理方針、プロセス、プロジェクトリストは、資料整理に尽力された飛田ちづる氏により令和3年度と4年度の紀要に報告されている<sup>4</sup>。状況を要約すると、図面類であるファイルレベル1~48は、令和元年~2年度にアイテムレベル3639件の整理と目録採録を終え、令和3年度に媒体変換(デジタル画像の撮影)と館公式の所蔵資料検索データベースでの目録公開が完了した。一方、文書、写真、抜き刷りなどを含むファイルレベル49以降は、令和3年度までに全体の整理を概ね終えていた。

#### 2.2. 令和6年度に実施したこと

令和6年度に実施した資料整理を示す(表1)。第一に、ファイルレベル7-1~7-48(アイテムレベル3,639点の図面)については、デジタル媒体変換で作成された画像番号をアイテムレベルの目録に追記し、資料番号と画像番号が対応するようにした。第二に、書簡と原稿を含む文書類が評価選別の段階で資料番号が付されず別置されていたため、ファイルレベル7-67~7-79を付し、目録を採録した。第三に、写真、文書等を含むファイルレベル7-49~7-66のアイテムレベルの目録(1,478件)採録が既に完了していることを確認し、追

\*文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、修士(芸術)

加した前述のファイルレベル7-67～7-79のアイテム目録(102件)を採録した。第四に、ファイルレベル7-49～7-79のうち、アイテムレベル22件に含まれる「アイテム個別」(302点)の目録採録を行った。「アイテム個別」については、後述(2.3)する。第五に、主にファイルレベル7-62と7-63に含まれていた書籍と雑誌(144冊)を「村田豊旧蔵書誌」(村田豊文庫)として、司書による図書登録を行った。村田豊旧蔵書誌についても後述(2.4)する。

### 2.3. 今後の課題(1)

前述の「アイテム個別」という暫定的な概念について断っておく必要がある。これは館内の整理作業の過程で便宜的につくられた館独自の概念であると考えられる。村田豊建築設計資料の来歴については、前述の飛田氏の報告<sup>5</sup>にもあるように、村田豊の没後、ご遺族が資料を継承して当館が取得するまでに、資料は3度の保管と移送を経ている。1か所目は出所とされている1988年まで記録作成者(組織または個人)が管理していた東京都の村田豊建築事務所、2か所目は1988年から2013年12月までの間にご遺族が保管していた新潟県の村田家、3か所目は2013年12月から2015年1月までの間にご遺族が保管していた埼玉県の大学、そして4か所目が当館となる。そして、村田豊建築設計資料のファイルレベル7-49以降の附番について、「前任者の資料によれば現地調査を行い当館に運びこんだ際に箱ごとに番号を振り、それをファイル番号とした」<sup>6</sup>とある。この情報と「村田豊資料受入記録」<sup>7</sup>を併せて確認すると、同資料群については、館に移送される直前の3か所目の管理の様態(書棚や箱などのまとまり)に重きがおかれ、ファイルレベルの番号として残された経緯があったということが判った<sup>8</sup>。その結果、資料整理に際してアイテムレベルよりも下位に階層が必要となり、それが便宜的に「アイテム個別」レベルと名付けられたようである。

館内で「アイテム個別」が存在するフォンドは村田豊建築設計資料に限られたことではない。しかし、一般的にアイテムレベル以下の階層は存在しないことや、所蔵資料目録データベースへの投入を鑑みると、アイテムレベルはそれ以上分割することが適当ではない単位(原稿1束、綴じられたファイル、封筒、冊子など)の資料に充て、アイテムレベル同士の関連は目録内の「関連情報」(ISAD(G)の3.5)や「備考」(ISAD(G)の3.6)として入力するなど、今後、検討の余地があると考ええる。

### 2.4. 今後の課題(2)

村田豊建築設計資料は、書誌を含めて一体的な贈与契約が行われたため、「村田豊旧蔵書誌」(村田豊文庫)を館が展示や調査に活用できるだけでなく、利用者が村田豊建築設計資料として閲覧利用ができるようになって<sup>9</sup>。

建築設計事務所または研究者の蔵書については、館の収集方針、収蔵スペース、諸権利含む利用・公開の課題などから、贈与契約を見送るケースがあることはやむを得ないが、館蔵の資料群に付属して寄付申込みを受けた書誌をどのように死蔵しないように活用するのか<sup>10</sup>、どのようにすれば利用者の研究や生涯学習の支援に役立てられるのか、類縁施設の事例研究、MLA連携、閲覧室における公開書庫の充実など、今後、検討の余地があると考ええる。

## 3. 村田豊建築設計資料の万国博覧会パビリオンに関する資料の調査

### 3.1. これまでの経緯

村田豊の建築は、過去に「前衛芸術の日本1910-1970」展(ポンピドゥー・センター、1986年12月11日～1987年3月2日)、「ジャパン・アーキテクト1945-2010」展(金沢21世紀美術館、2014年11月1日～2015年3月15日)、「ジャパン-ネス Japan-ness 1945年以降の日本の建築と都市計画」展(ポンピドゥー・センター・メッセ、2017年9月9日～2018年1月8日)で紹介された。村田豊建築設計資料のうち「ポンピドゥー・センター設計競技案」(1971)、「ソビエト青少年スポーツ施設」(1972)の資料は「インボシブル・アーキテクトチャー」展(埼玉県立近代美術館、新潟市美術館、広島市現代美術館、国立国際美術館、2019年2月2日～2020年3月15日に各館巡回)に出品歴があり、館内では、「ミュージアム 始原からの軌跡1940年代-1980年代」(文化庁国立近現代建築資料館、2020年10月1日～11月15日)で「日本万国博覧会 富士グループパビリオン」の資料、「〈こどもの国〉のデザイン-自然・未来・メタボリズム建築 [併設]新規収蔵資料紹介」(文化庁国立近現代建築資料館、2022年6月21日～8月28日)で、「蘭・第12回世界会議パビリオン」の資料を出品したことがあった。

### 3.2. 調査報告1 日本万国博覧会における計画案「EXPO'70 富士グループ・パビリオンSAPPORO BEER NEW MUNCHEN」について

令和6年度「日本の万国博覧会1970-2005」展の第1

部「EXPO'70 技術・デザイン・芸術の融合」に展示する「富士グループパビリオン」(1970)、「電力館水上劇場」(1970)の調査は、令和5年度秋冬から準備に取り掛かり、前述(2.2)の資料整理と併行して8月頃から集中的に始めた。実現された両作品のオリジナルの基本図は、フランス国立のポンピドゥ・センターが所蔵しており、そのウェブサイトで閲覧ができる。当館が所蔵するのは、村田豊建築事務所が複製した図面の縮刷、模型写真、工事写真、計画案や設計要旨などである<sup>11</sup>。

これらの資料の中に、「EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN」という実施されなかったビアホールの計画案が存在する(表2)。このビアホールは、「富士グループパビリオン」の敷地の北西側、「自動車館」(設計：前川國男)側の道路と敷地内の水盤に面して計画された。図面は、1968年12月12日から1969年12月23日までの日付のあるものと、日付のないものが含まれる。

平面は直径20m～25mの円形で、厨房、カウンター席、テーブル席が配置されている(図1)。屋根は、「富士グループパビリオン」の「本館」とも「別館」とも異なる構造で、傘あるいは水母のような形態である。中心に直径6mの球(外気より正圧の空気で膨らんでいる)、直径3mのチューブ(正圧の空気で膨らんでいる)が直径約20m～30mの円周(ドーナツ状)に据えられ、それらを覆う上面と下面の膜の内側の空気が負圧に保たれた空気膜構造の屋根が計画されていた(図2)。天候の荒い時は、空気圧を制御することで、屋根を低く下げることが想定されていた(図3)。これらのアイデアの一部は、ビアホールよりも先行して構想されていた<sup>12</sup>「電力館水上劇場」で実現されている。

### 3.3. 調査報告2 1975年沖縄海洋博覧会における計画案「EXPO'75 OKINAWA」について

令和7年度の「日本の万国博覧会1970-2005」展の第2部「EXPO'75以降ひと・自然・環境へ」に展示する1975年沖縄国際海洋博覧会の「芙蓉グループパビリオン」(1975)(以下、芙蓉グループパビリオン)<sup>13</sup>の調査は、前述(3.2)の調査から遅れて令和6年11月頃から開始した。当館は「芙蓉グループパビリオン」のA1サイズの基本図と計画案を所蔵している。実現した「本館」は、鉄筋コンクリートのリングに格子状のケーブが張られた直径40mの円形のパーゴラと直径28m鉄筋コンクリートシェルドームであったが、最終案に至る過程で、レンズ型の二重空気膜構造のパーゴラ、エアドームの劇場、それを囲うエアチューブの展示室から

成る計画案があったことが館所蔵のオリジナルの図面で確認できる<sup>14</sup>。計画案から最終案への変遷は、図面上では一見すると妥協と捉えられるかもしれない。しかし、技術の観点では、「富士グループパビリオン別館」<sup>15</sup>で採用したビニシエル工法のドームの規模を「芙蓉グループパビリオン(本館)」では直径28mまでに発展させたこと、そして、水耕栽培を利用した空中農園は、当初計画の蔓植物による屋根の緑化から更に踏み込んで、農と共にある近代(都市)の暮らしを建築的に提案していたことを強調しておきたい。

「芙蓉グループパビリオン」の設計に先立ち、村田が1972年頃に「沖縄博への提案」<sup>16</sup>として海上に直径100mの「海洋構築物のデッキを覆う大屋根」と、海浜に直径200mの「総合パビリオンの大屋根」をいずれもステンレススチールを用いたレンズ型の二重空気膜構造で提案していたことは、佐々木暢氏の先行研究<sup>17</sup>で指摘されており、館所蔵の資料においても、直径200mの「円盤形空気構造屋根 総合パビリオン案 鳥瞰図 平面図」<sup>18</sup>と、水面上5mの高さに計画された直径70mの大屋根<sup>19</sup>が確認できた。更に、「EXPO'75 OKINAWA」と題された図面が存在することが判った(表3)。それらから、前述の「海洋構築物のデッキを覆う大屋根」の構想は海上の大屋根広場と展望棟に発展していった可能性がうかがえる。

直径60m～70mの大屋根広場は、沖縄海洋博覧会の敷地の南端、後の沖縄博エキスポポート海上に構想された。陸から栈橋でアクセスし管理施設や休憩施設を大屋根が覆う計画であった(図4)。

展望棟は、直径35mと直径50mの案が存在する。後者は日付がない。いずれも海上フロア(展望テラスまたは展示室)と海中フロア(展望室)をもち、上下階をエレベーターと螺旋階段で昇降する提案であり、前者は柱を兼ねたコアが3本、後者は6本である。直径35mの展望棟案は、資料番号7-33-71,73,74,76,77,82に表れる。水面から高さ11mにある展望棟の水上階は展示室で、大屋根広場から延びる斜路でアクセスする。水深11mにある展望棟の水中階は水中展望室で、水上の展示室からエレベーターまたは螺旋階段で降りることのできる計画であった。直径50mの展望棟案は、7-33-68,78,79に表れる。水面から高さ16mに展示室、高さ10mに管理関係諸室。水深16mにドーム天井の水中展望室をもつ展望棟の計画であった(図5・6・7)。

#### 4. おわりに

村田豊が手がけた万博パビリオンの中で、実現に至らなかった「EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN」(1968-69)と、「EXPO'75 OKINAWA」の大屋根と展望棟(1973)は、村田が生涯にわたり、吊り構造と併行して探求した空気構造建築の思考プロセスを補完するものとする。

本稿で紹介した作品以外にも、1981年神戸ポートアイランド博覧会(ポートピア'81)「芙蓉グループパビリオン」(1981)、1985年筑波科学技術博覧会の「農業館」(計画案)、遺作となる「蘭・第12回世界会議 展示場」(1987)など、村田豊によるパビリオンの建築設計資料が館に所蔵されている。令和6・7年度の展覧会は万国博覧会を対象としたため、それらの資料は調査の対象にはならなかったが、今後の調査、研究に期待したい。

#### 注

- 職員構成については館の紀要の活動報告及び既往発表資料(田良島哲「国立近現代建築資料館の所蔵資料 坂倉準三資料を中心に」、日本建築学会建築歴史・意匠委員会『建築資料の現在 建築策におけるアーカイブズの役割を考える』、2021年9月)に掲載。令和6年度の研究職職員は2~4人がフルタイム、4~5人が時間雇用。いずれも非常勤職員で年度毎の契約更新。令和6年度より任期が3年から最長5年まで延長可能となった。
- 建築史、建築評論、保存修復、アーカイブズ学、博物館学など。
- 文化庁がウェブ公開している予算概算要求資料によると寄贈契約の年間活動目標は4件。
- 飛田ちづる「村田豊建築設計資料整理報告」(『国立近現代建築資料館紀要』第1号、2021年)、飛田ちづる「村田豊建築設計資料のうち、図面以外の資料について」(『国立近現代建築資料館紀要』第2号、2022年)
- 同上
- 同上
- 2013~2019年(収集調査~贈与契約)当時の収集担当と資料担当による記録。館事務室内にて紙媒体で保管されている。
- ただし、出所である1か所目の原秩序と3か所目の保管

元にあたる大学研究室室内の書棚や箱に入っていた文書の配列の関連は、前2度の保管と移送の記録が館には存在しないので判明していない。

- 館では、岸田日出刀の旧蔵書誌、平田重雄の旧蔵書誌、村田豊の旧蔵書誌は贈与契約を経ており、館蔵の建築資料として閲覧利用申請が可能。ただし、複製や掲載利用に係る著者や出版社に属する書誌の諸権利については当館が許諾することはできない。一方、川添登、大高正人ほかの旧蔵書誌のうち、歴史資料等保有施設として保管・公開するアーカイブズ資料に含まれない(贈与契約対象外となった)書誌は、保管はしているものの書誌、蔵書目録ともに公開を常としていない。
- 一つに館主催の展覧会で公開することが挙げられる。筆者は令和6年度「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」展、令和6・7年度「日本の万国博覧会1970-2005」展で、来歴(旧蔵者)を明記した上で、建築家の蔵書の展示活用を意識的に試みた。
- 令和6・7年度「日本の万国博覧会1970-2005」第1部「EXPO'70 技術・デザイン・芸術の融合」展にて展示。
- 富士グループパビリオン付属ピアホールと「電力館水上劇場」の各図面に記された日付から判断。なお、「日本万国博覧会館25」(資料番号7-47-7)には、昭和43年1月16日以降の日付を含む青焼図面が綴じられている。
- 村田豊は沖縄国際海洋博覧会の「芙蓉グループパビリオン」(1970)と神戸ポートアイランド博覧会の「芙蓉グループパビリオン」(1981)を設計しており、作品名は同じであるが内容は異なる。
- 令和6・7年度「日本の万国博覧会1970-2005」第2部「EXPO'75以降 ひと・自然・環境へ」展にて展示予定。
- 「富士グループパビリオン別館」(1970)は、直径12m、高さ4mのコンクリートシェルが3棟+4棟連なる。当時、実用の建築として国内で初めてピニシェル工法が用いられた。
- 村田豊「沖縄博への提案」(資料番号7-59-11、7-59-45、7-61-46)
- 佐々木暢「村田豊の建築 同時代の空気構造と彼のオリジナリティ」2014年度東北大学大学院工学研究科修士論文
- 日付記載なし、資料番号7-17-4-75
- 「EXPO'75 OKINAWA」、1973年8月30日(資料番号7-33-66、7-33-75)

(2026年1月22日原稿受理)

表1 資料整理進捗リスト

資料番号(ファイルレベル)		ファイルレベル目録	アイテムレベル目録	アイテム個別目録/ その他	保存・管理	デジタル化
7-1~7-48	図面類	R3以前に採録済	R3以前に採録済	(対象外)	R3以前に実施	令和3年度完了
7-49~7-59, 7-64~7-66	写真、文書、図面等	R3以前に採録済	R3以前に採録済	R6採録 (必要に応じて追加採録)	R3以前配架済 R6所在確認	(利用時に必要に応じて実施)
7-64~7-66						
7-60,62,63	書誌	R3以前に採録済	R3以前に採録済	R6図書登録	R6配架	(対象外)
7-67~7-79	書簡・原稿等	R6採録	R6採録	(対象外)	R6配架	(利用時に必要に応じて実施)

表2 EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN 計画案

資料番号	資料名1	資料名2	作成年	内容	図
7-13-42	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	屋根伏図、立面図、断面図	43.12.12	直径25m φ案	
7-13-46	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	平面図、断面図	43.12.12	直径25m φ案	
7-13-47	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	平面図	43.12.12	直径25m φ案	
7-13-40	EXPO'70 富士グループ・パビリオン	平面図		直径25m φ案	
7-13-44	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	平面図	44.12.3		
7-13-48		[断面図]			
7-13-50	FUJI GROUP PAVILION SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	平面図、断面図	44.8.13	直径30m φ案	
7-13-51		[断面図]			
7-13-53		[断面図]			
7-13-54		[屋根伏図、立面図、断面図]			
7-13-55	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	立面図	44.11.12	直径30m φ案	
7-13-62	EXPO'70 富士グループ・パビリオン	平面図	44.11.14		
7-25-97	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	断面図	44.11.13	直径30m φ案、複製(7-25-447と同一)	
7-25-447	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	断面図	44.11.13	直径30m φ案、複製(7-25-97と同一)	
7-13-41	EXPO'70 富士グループ・パビリオン	断面図	44.12.23	直径23m φ案	
7-13-43	EXPO'70 富士グループ・パビリオン	立面図	44.12.23	直径23m φ案	
7-13-45	EXPO'70 富士グループ・パビリオン SAPPORO BEER NEW MUNCHEN	断面図	44.12.3	円周を鉄骨にした案	
7-13-52		[屋根伏図、立面図、断面図]		円周を鉄骨にした案	

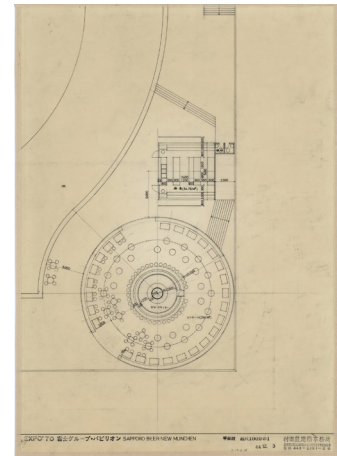


図1 SAPPORO BEER NEW MUNCHEN 平面図 (7-13-44)

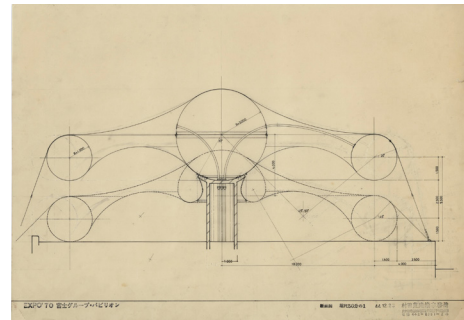


図2 SAPPORO BEER NEW MUNCHEN 断面図 (7-13-41)

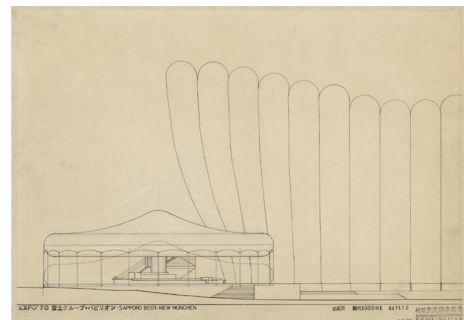


図3 SAPPORO BEER NEW MUNCHEN 立面図 (7-13-55)

表 3 EXPO'75 OKINAWA 計画案

資料番号	資料名1	資料名2	作成年	関連情報	内容	図
7-17-4-75	1975 沖縄海洋博 円盤形空気構造屋根総合パビリオン案	鳥瞰図 平面図	記載なし		200m φ 海浜の総合パビリオン大屋根案	
7-33-66	EXPO'75 OKINAWA	[立面図]	48.8.30		70m φ 大屋根 水面上5m	
7-33-75	EXPO'75 OKINAWA	[立面図 屋根伏図]	48.8.30		70m φ 大屋根	
7-33-72	EXPO'75 OKINAWA	配置図 立面図	48.9.22		60m φ 大屋根 橋、防波堤を含む 配置図	
7-33-81	EXPO'75 OKINAWA	[立面図 平面図]			70m φ 大屋根	
7-33-67	EXPO'75 OKINAWA	配置図 [立面図]	48.9.11		大屋根+海中展望室 橋、防波堤を含む 配置図	
7-33-73	EXPO'75 OKINAWA	配置図 [立面図]	48.9.11	1と押印	円形広場+展望棟 コア3本案 橋、防波堤を含む 配置図	
7-33-74	EXPO'75 OKINAWA	海上階 平面図	48.9.10	2と押印	展望棟コア3本案	
7-33-71	EXPO'75 OKINAWA	海中階 平面図	48.9.10	3と押印	展望棟コア3本案	
7-33-76	EXPO'75 OKINAWA	断面図	48.9.11	4と押印	展望棟コア3本案	
7-33-77	EXPO'75 OKINAWA	断面図 [立面図]	48.9.11	5と押印	展望棟コア3本案	
7-33-82	EXPO'75 OKINAWA	平面図	48.9.11	6と押印	円形広場	
7-33-80	EXPO'75 OKINAWA	断面図	48.9.10		展望棟コア3本案 7-33-76の別案	
7-33-78	EXPO'75 OKINAWA	平面図	記載なし		展望棟コア6本案 水上展示室50m φ	
7-33-79	EXPO'75 OKINAWA	断面図	記載なし		展望棟コア6本案 水上展示室50m φ	
7-33-68	EXPO'75 OKINAWA	南立面図	記載なし		展望棟コア6本案 水上展示室50m φ	

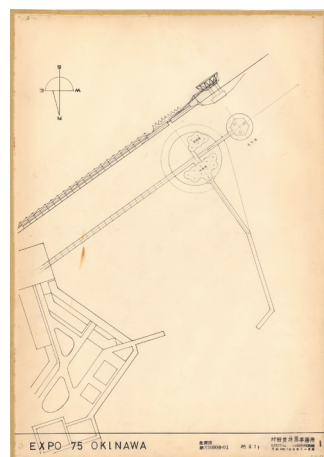


図 4 EXPO'75 OKINAWA 配置図 (7-33-73)

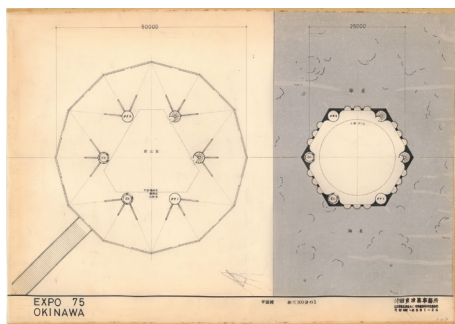


図 5 EXPO'75 OKINAWA 平面図 (7-33-78)

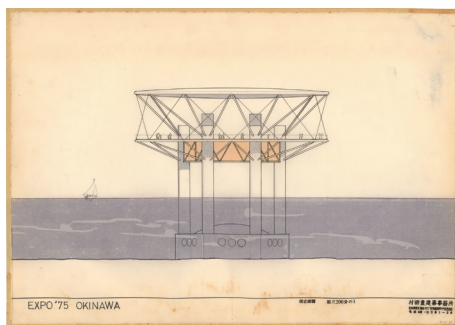


図 6 EXPO'75 OKINAWA 立面図 (7-33-68)

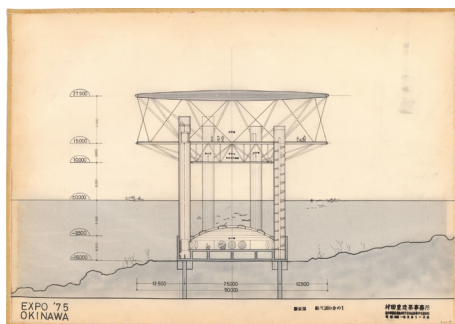


図 7 EXPO'75 OKINAWA 断面図 (7-33-79)

## 坂倉準三設計の旧上野市庁舎に関する資料について

[資料紹介]

齋藤 菜那\*

### Materials Concerning the Former Ueno City Hall Designed by SAKAKURA Junzo

SAITO Nana

This report details the accession process and current organization status of drawings and sketches related to the former Ueno City Hall, designed by SAKAKURA Junzo, which were transferred to National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs in 2024. These items, which were personally held by the design supervisor, Mr. YOSHIKAWA Tadanobu, total 135, including elevation drawings, floor plans, and design revision drawings. They include valuable information illustrating the design review process. The item list has now been completed. Moving forward to publishing the list and digitizing of the materials to facilitate research and study combined with existing documents.

キーワード：坂倉準三、文化庁国立近現代建築資料館、建築資料、資料整理  
SAKAKURA Junzo, NAMA, archival items, archiving materials

#### 1. はじめに

本報告は、令和6年に文化庁国立近現代建築資料館 National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs [NAMA] (以下、NAMA) に輸送された坂倉準三建築研究所設計の旧上野市庁舎 (伊賀市指定文化財。以下、上野市庁舎) に関する資料について、整理状況と資料の概要を紹介するものである。

1964年に竣工した上野市庁舎は、坂倉準三 (1901～1969) による上野市全体計画 (上野市中心部の公共建築群) の一環であり、新庁舎へ機能が移転する2019年まで庁舎として使用されていた。現在は、宿泊施設・図書館・カフェ等を併設した複合施設「旧上野市庁舎 SAKAKURA BASE」(MARU。architecture 設計) への改修計画が進んでいる。

NAMA 所蔵の坂倉準三建築設計資料群は、1A：東京事務所資料、1B：大阪事務所資料、1C：坂倉準三個人資料、1D：OB・他組織所蔵資料の4種類の出所のサブフォンドから編成される。本資料は、ヒアリング調査からは大阪事務所で作成されたものと考えられるが、設計担当者が退所時に持ち帰り、その後個人保管されていた経緯を踏まえ、整理上は1D：OB・他組織所蔵資料に位置付けることが妥当であると判断した。

#### 2. 資料の受け入れについて

本資料は、上野市庁舎の設計担当者の一人であった坂倉準三建築研究所の元所員である好川忠延氏 (以下、好川氏) より借用した資料であり、現在は NAMA にお

いて整理作業を進めている段階にある。資料は、作成時から好川氏が退所するまで事務所のデスクに仕舞われており、退所時に処分することなく、自宅に持ち帰り保管されていたものである。

令和6年6月に NAMA 職員2名が大阪事務所を訪問し、資料の来歴についてのヒアリング、借用契約の締結、資料の受け取りを行った。なお、資料については令和5年12月頃に好川氏自宅から大阪事務所宛てに送付されていた。大阪事務所にて、3束の資料をそれぞれうす紙で包み、緩衝材とともに筒箱に収納し、巻きの両端が傷まないよう横向きの状態を保って輸送を行った。

#### 3. 資料整理の手法と経過報告

長期間巻いた状態で保管されたことから、まず、資料の巻き癖を取るためのフラットニングを行った。1束を1ファイルとし、資料が混同しないよう、1ファイルずつ広げてアーカイバルボードに挟んだ。なお、破れや裂けが見られる資料には、保護のため前後にうす紙を挿入した。3ファイルのアーカイバルボードを重ね、その上に重石 (9kg の漬物石を6個) を乗せた状態で半年間静置した。その後、巻き癖が十分弱まったことを確認し、資料1枚ずつへの採番と採録を行った。これにより、表1のとおり、ファイルごとの主な採録項目及び図面印が記載されていた枚数が明らかになった。

\*文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員、修士 (文化財)

表1 ファイル別主要採録項目および図面印記載枚数

ファイル番号	1D-5-1	1D-5-2	1D-5-3	合計
資料枚数	46	56	33	135
プロジェクト名	0	28	5	33
資料名称	0	36	5	41
縮尺	0	16	1	17
図面印	0	17	3	20
日付	30	33	25	88

#### 4. 資料の形態と内容

設計担当者による図面およびスケッチであり、複数枚を丸めて3束にまとめたものである。それぞれの束は、①複数案の立面スケッチ②図面（一部図面印有り）及びスケッチ③図面（設計変更図の図面印有り）及びスケッチを中心とした内容である。

全体のうち88枚（表1参照）の資料に日付が記載されていた。主に、右上（インクで書かれた年月日もしくは年月日）と図面印内（鉛筆で書かれた年月日）に記載されており、資料の重なり順とは一致しないことから、資料の重なり順は時系列以外の影響が大きいといえる。

資料の状態は、目立った経年変化がないものから、大小の破れ・欠損・変色があるもの、全体に波打ちが見られるもの（写真1）、欠損箇所が図面情報に及ぶもの（写真2）等、痛みの範囲や度合いが様々な状態であった。

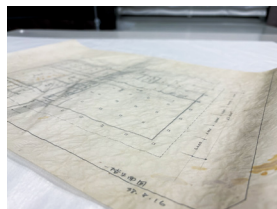


写真1 図面全体の波打ち



写真2 図面情報の欠損

#### 5. 今後の資料整理について

現時点では、総量及び概要を把握するための目録作成を行った段階である。本資料には検討段階の情報が多く含まれており、NAMA所蔵の上野市庁舎に関する資料（表2）ではほとんど見られなかった内容である。特に、図1・2のような複数案の立面スケッチは、立面図（図3）との対照により、設計過程を具体的に明らかにする資料となり得るだろう。

今後は、閲覧および研究利用に資するため、データベース公開に向けた目録の精査と、閲覧対応のための速やかなデジタル化を計画的に進めることが重要である。

（2026年2月19日原稿受理）

表2 坂倉準三建築設計資料の上野市庁舎に関する資料

資料番号	種別	数量
1A-1-1-48	図面	1
1B-1-1-38	図面	256
1A-205	写真	一式
1A-229	写真	一式
1A-229-6	写真	一式
1B-404-5	写真	一式
198-2-2	アパチャーカード	一式
1A-194-4-2	写真、スライド	一式
1A-198-25	写真	一式
1B-391	青焼き図面	一式

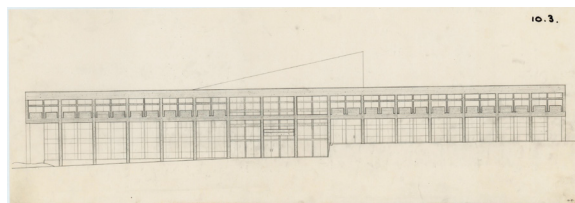


図1 1D-5-1-1

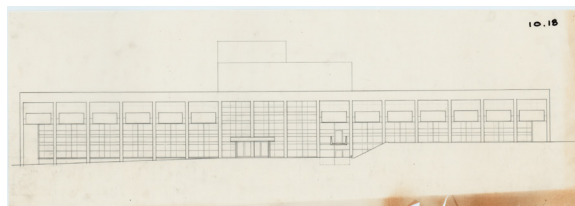


図2 1D-5-1-31



図3 立面図 | 1:100 | 鉛筆、トレーシングペーパー

# 令和6(2024)年度 文化庁国立近現代建築資料館 活動報告

## Annual Activity Report of NAMA, 2024 fiscal year

### 文化庁国立近現代建築資料館

#### I. 資料の調査・保管等

(カッコ番号は各資料のフォンド番号)

##### 1. 各資料の作業

各資料について、次のとおり調査から保管までの業務(資料調査、資料受入、契約、資料整理・研究、目録作成、デジタル撮影、修理、資料利用等)を行った。

##### (1) 坂倉準三建築設計資料

###### ■ 資料整理

資料閲覧に伴い、未番資料のナンバリング、未整理の写真・文書資料の目録整備及びデジタル化を進めた。また、令和7年度に開催共催展において展示予定の図面資料については、ナカバヤシ株式会社に修復を依頼した。

###### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、「電力館」資料の一部を公開した。

##### (2) 丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルム

###### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、「大屋根、お祭り広場」資料の一部を公開した。

##### (3) 藤森照信旧蔵東京大学生産技術研究所建築史研究資料

###### ■ 資料整理

前年度に引き続き借用中の資料について収蔵に向け概要の調査を行った。借用中の資料に含まれていた大熊喜邦関連の資料を、8月5日、江戸東京博物館に移送した。

##### (7) 村田豊建築設計資料

###### ■ 資料整理

資料群は、図面資料(7-1-1~7-48-29)、文書等(7-49-1~7-79-1)から成る。今年度、文書等(7-49-1~7-79-1)のアイテムレベルの所在点検と一部目録採録漏れの補完、及び、未採録であったファイルレベル13件に含まれるアイテムレベル102点(7-67-1~7-79-1)

の採録を実施した。

###### ■ 書誌登録

書誌144冊について「村田豊旧蔵書誌」(村田文庫)として図書登録(図書目録作成)、配架を実施した。

###### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、「電力館水上劇場」、「富士グループパビリオン」資料の一部を公開した。

##### (8) 吉阪隆正+U研究室建築設計資料

###### ■ 資料調査

旧樋口邸所有者からの資料寄贈申し出をうけ、借用契約に向けた資料の館内移送を行った。当該資料は施主側で保管されていた図面(複製)、契約文書等を主とした内容となっており、契約締結にかかる概要調査を次年度実施する。

##### (10) 大高正人建築設計資料

###### ■ 寄贈契約(第3回寄贈契約分)

建築設計資料の第3回寄贈契約を締結し、旧蔵書誌の寄付を受けた。

###### ■ 資料整理(第1回寄贈契約分)

図面類ファイルレベル23件について、アイテムレベル2,000点の目録を採録した。次年度の採録に向けて図面のフラットニングと採番を行った。

###### ■ 図書整理(寄付分)

書誌199冊について「大高正人旧蔵書誌」(大高文庫)として図書登録(図書目録作成)、配架を実施した。

###### ■ デジタル化

図面1,972点(ファイルレベル60件)のデジタル化を行った。

###### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、「メインゲート」はじめEXPO'70に関連する建築設計資料(写真アルバム等)及び旧蔵書誌資料の一部を公開した。

### (13) 渡辺仁資料

#### ■ 概要

適切な環境で資料(13-1-1~13-61-1)を保管し、資料の利用に込えている。

### (14) 木村俊彦構造設計資料

#### ■ 資料整理

「日本の万国博覧会1970-2025」展に向け、出展予定の図面のフラットニングを行った。

#### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、2019年に収録した元所員の木村(伊藤)久枝氏と渡辺邦夫氏によるオーラルヒストリー未公開記録から、「住友童話館」の構造設計に関するエピソードを再編集し上映した。

### (15) 菊竹清訓建築設計資料

#### ■ 概要

9月末に追加の資料移送を行った。対象とした資料は図面・スケッチ資料、慰霊碑関連資料である。これらの借用契約を進めるため、寄贈者への資料整理計画の共有及び進捗報告、契約書及び覚書に関する打合せを重ね、文言の調整等を行った。

#### ■ 委託事業

情報建築に残存するすべての建築設計資料のうち、収蔵に向けて検討すべき資料の選定に係る資料研究業務を、早稲田大学理工学術院古谷誠章研究室に委託した。委託の概要は、情報建築に残存する、菊竹清訓が携わったプロジェクトの全資料を対象に、当館にて収蔵すべき資料、他館にて収蔵すべき資料、その他資料に分類し、リスト化を進めた。また、資料館が借用している菊竹資料のうち、分類されずに収容されている図面及びスケッチ資料について、その内容の判別及びリスト化を行った。

#### ■ 資料整理

令和5年度移送資料について、図面資料の保全を行った。一部の図面資料のフラットニング・ナンバリング・ファイル目録作成を齋藤信吾建築設計事務所へ依頼した。また、閲覧等申請に対応し資料の詳細調査を行った。

#### ■ デジタル化

寄贈された資料のうち、約700点の図面資料の基本画像(400dpi)と閲覧用画像(200dpi)を作成した。

#### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において「塔

広場(エクスポタワー)」、「南広場」資料の一部について公開した。

### (16) 川添登資料

#### ■ 資料整理

10月に追加の資料移送を行った。対象は川添登旧宅に保管されていた執筆原稿、研究資料、書籍等である。既に借用している資料と併せて、贈与契約の締結に向けて、輸送時の箱に収納された資料の包材入れ替え、数量確定、概要目録作成等を進めた。

#### ■ デジタル化

借用している資料のうち、劣化が危惧されるカセットテープ16点(1985年国際科学技術博覧会会場計画委員会の音声)に対し、デジタル化及び媒体変換を行った。

#### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、『世界一大きな絵 人類はなにを見てきたか』(川添登編、講談社、1970年)をはじめとする関連書籍を公開した。

### (17) こどもの国建築関係資料

#### ■ 概要

適切な環境で資料を保管し、資料の利用に込えている。

### (18) 吉田鉄郎資料

#### ■ 概要

適切な環境で資料を保管し、資料の利用に込えている。

### (19) 平田重雄資料

#### ■ 概要

適切な環境で資料(19-1-1~19-22-1)を保管し、資料の利用に込えている。

### (20) 岸田日出刀資料

#### ■ 概要

図面資料(20-1-1~20-1-82)と、個人資料(20-2-1~20-2-82)から成る。適切な環境で資料を保管し、資料の利用に込えている。

### (21) 角田栄資料

#### ■ 資料整理

資料92点に対し、アイテム目録の作成及びデジタル化を行った。特に日記資料については、公開にあたって内容の判断が求められるため、調査業務委託(IV.2)「角田栄資料調査及び国立近現代建築資料館における日記

資料の整理・公開に関する提言」を通じて、1ページ毎の目録も作成した。

### (23) 高橋訥一・第一工房資料

#### ■ 寄贈契約及び寄贈契約に向けた資料整理

令和5年度に実施した資料調査の成果を元に、第4回寄贈契約（ファイルレベル91件に含まれる、図面をはじめとした資料約3,800点）を締結した。また、第5回の寄贈契約に向け、未整理の図面及び事務所資料について数量確定及びファイルレベルの目録を作成した。

#### ■ 資料整理（第1～4回寄贈契約分）

アイテムレベルの目録を約900件作成した。

#### ■ デジタル化

図面約600点のデジタル化を行った。

#### ■ オーラルヒストリーの作成

事務所創設時に関わり1986年に退所するまで第一工房における中心的役割を果たしていた所員である林昭男氏のオーラルヒストリー（アーカイブ用ノーカット版約100分、ダイジェスト版約30分）を作成した。

#### ■ 展示

共催展「美術館建築－アートと建築が包み合うとき」（茅ヶ崎市美術館）において、「群馬県立館林美術館」資料の一部を公開した。

### (24) 前川國男建築設計資料

#### ■ 資料整理

アイテムレベルの目録を約900件作成した。

#### ■ デジタル化

図面約200点のデジタル化を行った。

#### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、「自動車館」及び借用中の「鉄鋼館」資料の一部を出展した。

### (25) 原広司＋アトリエ・ファイ建築設計資料

#### ■ 寄贈契約及び寄贈契約に向けた資料整理

7月、11月、12月に少量のスケッチ及び模型3点を追加移送した。既に借用していた資料を含め、第3回寄贈契約に向けて図面・スケッチ類約21,900点に対し、数量確定及びファイルレベルの目録作成（235件）を進めた。

### (26) シュパイデル旧蔵ブルーノ・タウト関連資料

#### ■ 目録公開

ファイルレベルの目録7件を当館収蔵資料検索データベースにて公開した。

### (27) ヴァスムート社旧蔵吉田鉄郎関連資料

#### ■ 概要

適切な環境で資料を保管し、資料の利用に込んでいる。

### (28) 安藤忠雄初期建築資料

#### ■ 目録公開

ファイルレベルの目録31件を当館収蔵資料検索データベースにて公開した。

### (29) 篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

#### ■ 目録公開

ファイルレベルの目録3件及びアイテムレベルの目録16件を当館収蔵資料検索データベースにて公開した。

### (30) 堀口捨己資料

#### ■ 資料整理

令和5・6年度の資料整理の成果を元に、第1回寄贈契約（ファイルレベル196件に含まれる、図面をはじめとした資料約4,200点）を行った。また、第2回寄贈契約締結に向け、図面・スケッチの他、業務資料類についても数量確定作業及びファイルレベルの目録作成を進めた。

#### ■ 展示

「建築家・堀口捨己の探究」において、「紫烟荘」「吉川邸」「若狭邸」「静岡雙葉学園」「常滑市立陶芸研究所」などを公開した。

### (32) 大谷幸夫建築設計資料

#### ■ 寄贈契約及び寄贈契約に向けた資料整理

寄託状態にある資料について、寄贈契約に向けて資料整理を進めている。今年度はファイルレベル90件に含まれるアイテムレベル6,670点の採番を行い、第1回贈与契約を結び、受贈した。次年度の作業に向けて図面のフラットニングを行った。

#### ■ 展示

「日本の万国博覧会1970-2025」第1部において、「住友童話館」資料の一部を公開した。

## 2. 新規受入資料の概要

### (10) 大高正人建築設計資料（第3回寄贈契約）

大高正人は、1923年福島県三春町生まれ。1947年東京大学第二工学部建築学科卒業。1949年前川國男建築設計事務所に入所し、10年以上同事務所の主要作品の設計に携わった。1960年世界デザイン会議にメタボリズムグループの一員として参加。1962年大高建築設計

事務所設立。建築のみならず都市計画の分野でも建築界、行政、公団を牽引し、多摩ニュータウンや横浜みなとみらいなどの計画と開発に貢献した。2010年逝去。

本資料群は、大高建築設計事務所(1962-2010)で行われた建築・都市計画業務に関する包括的な資料であり、建築図面(約1,000筒)、アパチャカードなどを含む。

今年度は文書、写真、報告書など2,103件の寄贈と、大高正人旧蔵書誌199冊の寄付を受けた。

### (23) 高橋誠一・第一工房資料(第4回寄贈契約)

高橋誠一は、1924年中国青島に生まれ、1945年に横浜工業学校(現・横浜国立大学工学部)航空機科卒業後、1949年に東京大学第二工学部建築学科卒業、同年より通信省営繕部設計課に勤務した。1956年に通信省を退職し、武蔵工業大学建築学科助教授(～1966年)を務め、1960年に第一工房を設立した。自身がキャンパスの全体計画を設計した大阪芸術大学では、建築学科設立と同時に主任教授に就任している。

本資料群は第一工房において作成された建築設計図書、スケッチ、写真等の資料からなり、第一工房の発足当初から事務所解散直前までの期間の資料が含まれる。高橋の代表作である大阪芸術大学のコンペ及び実施図面をはじめ、「佐賀県立博物館」などの60年代の作品から後期の作品までの一連の建築作品設計図書やスケッチに加えて、写真、パンフレット、会社記録などが含まれる。今年度は第4寄贈契約として図面やスケッチの他、竣工写真アルバムや構造計算書といった事務所資料など、計3,835点の寄贈を受けた。

### (31) 堀口捨己建築資料(第1回寄贈契約)

堀口捨己は、1895年群馬県本巢郡蓆田村に生まれ、1920年に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し大学院進学、卒業前の2月に分離派建築会を結成した。1922年東京帝国大学建築学科助手、1923～24年にかけて渡欧し、ヨーロッパの建築を視察した。1932年帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)教授(～1942年)に就任、1944年「書院造と数寄屋造の研究」で東京帝国大学にて工学博士学位取得。1946年より東京帝国大学(1949年～東京大学)工学部非常勤講師(～1956年)を経て、1949年明治大学工学部建築学科教授。1950年『利休の茶室』で日本建築学会賞(論文)、1951年「八勝館みゆきの間」で日本建築学会賞(作品)をそれぞれ受賞し、1963年には紫綬褒章を授与された。1965年に明治大学を定年退職したのち、神奈川大学工学部建築学科教授に就任。1984年に逝去した。

本資料群は、1920年代の堀口の学生時代から最晩年にわたる資料で、明治大学大学院校舎と聖橋校舎の堀口研究室で保管されていた図面及び文書資料に加え、堀口の自邸で保管されていた写真アルバムや蔵書、手紙などからなる。1966年に堀口が明治大学で定年を迎えた際、堀口の指示により同学大学院校舎の堀口研究室にあった資料が新設された同学生田校舎工学部建築学科に、聖橋校舎の堀口研究室にあった資料が自邸に移された。自邸資料は取り壊しの際に、遺族からの依頼で東京工業大学(現・東京科学大学)に移された。今年度は第1回寄贈契約として、図面やスケッチの他、写真アルバムや書籍など計4,199点の寄贈を受けた。

### (32) 大谷幸夫建築設計資料(第1回寄贈契約)

大谷幸夫は、1924年東京生まれ、1946年東京大学第一工学部建築学科卒業、大学院特別研究生(丹下健三研究室)、1951年大学院を満期退学後も1960年まで丹下助教授の下で設計並びに調査に従事。1961年設計連合共同設立、1964年東京大学工学部都市工学科助教授、1967年大谷研究室発足、1971年東京大学工学部都市工学科教授、1984年千葉大学教授、1989年千葉大学を定年退官、株式会社大谷研究室代表。代表作に、「国立京都国際会館」、「金沢工業大学」、「住友童話館」、「沖縄コンベンションセンター」、「千葉市美術館」など。2013年逝去。

本資料群は、1960年代以降の図面、スケッチ、マイクروفイルム、青焼製本、文書、写真アルバム、報告書、模型等から成る。

今年度、図面模型7点、図面6,670点(ファイルレベル90件)の寄贈を受けた。

## II. 展示・教育普及

### 1. 展覧会

令和6年度は、「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」(8月9日～10月27日)、令和6年度から7年度にかけて「日本の万国博覧会1970-2005 第1部 技術・デザイン・芸術の融合」(3月8日～5月25日)を開催している。

並行して、令和7年度の「日本の万国博覧会1970-2005 第2部 EXPO'75以降 ひと・自然・環境へ」展の企画立案を行った。

## (1) 展覧会の開催 1

「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」

## ■ 開催概要

趣旨：

建築家・堀口捨己(ほりぐち すてみ 1895-1984)は、国内最初の本格的近代建築運動とされる分離派建築会結成(1920年)に際して中心的役割を果たし、1930年代には日本を代表する国際様式建築を実現しました。西欧の近代建築の動向をいち早く理解するとともに、国内の茶室や数寄屋建築に関する卓越した研究業績を残し、第二次世界大戦後には、現代数寄屋建築を實踐して大きな影響を残しました。堀口は、1920年頃から1970年代の日本建築界を代表する建築家であり、近代建築と日本の伝統建築双方に対して深い洞察を巡らせた稀有な建築家ということができるでしょう。茶の湯、和歌にも通じ、建築や庭園のデザインのみならず、広いジャンルで創造力を発揮しました。そこに、堀口の稀有な探求心と創造力の結実を見ることができます。

本展覧会は、堀口の学生時代から晩年に至るまでの代表作品のオリジナル図面に加えて、1920年代欧州視察時の写真、分離派建築会展資料、茶室や庭園の実測研究資料、原寸茶室模型等の展示を通じて、建築家・堀口捨己の建築、思想、創造世界を総合的に紹介します。

会期：令和6年8月9日(金)～10月27日(日)

会場：文化庁国立近現代建築資料館

(東京都文京区湯島4-6-15湯島地方合同庁舎内)

主催：文化庁

協力：公益財団法人東京都公園協会、一般社団法人日

本建築学会関東支部、公益財団法人窓研究所、ヘットシップミュージアム(アムステルダム)

企画：文化庁国立近現代建築資料館

## ■ 会場構成

## 1 分離派建築会設立と表現主義の影響 1920-29

- ① 分離派建築会結成前後
- ② 平和記念東京博覧会
- ③ 渡欧と『現代オランダ建築』の出版
- ④ 「小出邸」
- ⑤ 「紫烟荘」
- ⑥ 「双鐘居」
- ⑦ 図録・図集スライドショー『分離派建築会宣言と作品』、『紫烟荘図集』、『双鐘居図集』、『一混凝土住宅図面集』

## 2 国際様式への傾倒 1930-39

- ⑧ 「吉川邸」
- ⑨ 「岡田邸」
- ⑩ 「大島測候所」
- ⑪ 「若狭邸」
- ⑫ 忠霊塔設計競技応募案

## 3 「日本」の探求 1936-58

- ⑬ 茶室への関心の高まり
- ⑭ 茶室の実測調査
- ⑮ 八勝館八事店
- ⑯ 視聴覚映像コーナー『堀口捨己 庭園講義 1968年4月26日』、『SUTEMI HORIGUCHI EN DE AMSTERDAMSE SCHOOL』
- ⑰ 編著作コーナー

## 4 伝統と近代の境界を超えて 1954-84

- ⑱ 「サンパウロ日本館」

## 会場写真



- ⑱「万葉公園」・「万葉館」・「万葉亭」
- ⑳「静岡雙葉学園」
- ㉑「常滑市立陶芸研究所」
- ㉒「清恵庵」

#### 中央円形

- ㉓ 年譜
- ㉔ 堀口捨己建築資料(写真、チラシ、書簡、スケッチ、実測図、和歌)及び、編著作(書籍、起こし絵図など)

#### ロビー

- ㉕ 堀口捨己監修『茶室おこし絵図集』に基づく原寸茶室模型

#### ■ グラフィックデザイン

- ポスター (B2版 片面カラー) 150部
- チラシ (A4判 両面カラー) 15,000部
- 図録 (B5判64頁) 4,000部
- デザイン 下田健

#### ■ メディア掲載

##### 雑誌・新聞・冊子(8件)

- 月刊『東京人』2024年10月号
- 季刊『住む。』91号 2024年秋号
- 『建築画報』399 Vol.60 2024年9月号
- 『新建築』2024年9月号
- 『CONFORT』2024年12月号
- (新聞) 日刊建設通信
- (冊子) 公益財団法人文京アカデミー財団広報誌スクエア
- (冊子) 文京ミュージズネットマップ

##### WEB / SNS (31件)

- 文化庁
- PR Times
- 日経クロステック
- 日経アーキテクチュア
- Tokyo Live & Exhibits
- Fashion Press
- NEWSRELEASE
- Tokyo Art Beat
- ニコニコニュース
- 展覧会・博物館・美術館・記念館
- Nifty ニュース
- 毎日 Infoseek ニュース

- ADF web magazine
- AIJ 日本建築学会(東京支部)
- Museumnews.jp
- 文学通信
- 一般財団法人古田織部美術館
- Aoyama Design Forum
- 建築家/都市計画家 - 古宇田卓
- Mapion ニュース
- 住宅情報 web
- 一般社団法人茨城県建築士会
- NIKKEI COMPASS (日本経済新聞社)
- DOCOMOMO Japan
- 公益財団法人窓研究所 Web
- 公益財団法人窓研究所 Instagram
- タイムアウト
- BUNGA NET
- 住宅新法
- JDN
- TECTURE MAG

#### ■ 来場者数

日数	正門	岩崎邸	計
70日	42日 / 70日	70日 / 70日	—
—	2,115人	5,156人	7,271人
—	29%	71%	—

#### ■ 教育普及

ガイドツアー：当館展示担当職員によるガイドツアーを木曜14:00～実施した。全9回定期開催、参加者計130人。

ギャラリートーク：講師 藤岡洋保(東京工業大学名誉教授)によるギャラリートークを3日間、各日2回実施した。全6回開催、参加者計139人。

講演会：テーマ「1923年：堀口捨己とアムステルダム派の出会い」ヘットシップミュージアムの創設者・名誉館長のアリス・ルーホルト氏を迎えし、講演会を開催した。参加者38人。

#### (2) 展覧会の開催 2

「日本の万国博覧会 1970-2005 第1部：EXPO'70 技術・デザイン・芸術の融合」

#### ■ 開催概要

趣旨：

万国博覧会は、元々は、19世紀に各国の優れた物品

を集めて展示する展覧会として始まりました。万国博覧会の建築は、展示品の器の役割を果たすためのものですが、近代建築の発展に大きな貢献をもたらしました。例えば、1889年パリ万国博覧会に際して、会場のゲート及び展望台として建設されたエッフェル塔は、当時最先端の鉄骨造建築であり、今日でもパリのランドマークとして機能しています。万国博覧会が、国の威信をかけた催事であると同時に、短期間のみ使用される建築であることが、様々な建築的な実験を促し、その結果、万博建築は近代建築の進化に大きく貢献することになりました。

日本国内では、これまで日本万国博覧会（大阪万博、EXPO'70、1970年）、沖縄国際海洋博覧会（1975年）、つくば国際科学技術博覧会（1985年）、国際花と緑の博覧会（1990年）、日本国際博覧会 愛・地球博（2005年）の5回の万国博覧会が開催されており、大阪・関西万博〔2025年4月13日（日）-10月13日（月）〕がそれに続き、6回目ということになります。

本展覧会は、当館が所蔵する図面や企画段階の資料を中心とした展示を行い、これまでの5回の万国博覧会の会場計画と施設デザインに関する理解を深めていただくことを目的とします。本展覧会を通じて、万国博覧会が果たした建築史上の役割の一端を理解しながら、博覧会建築ならではの建築デザイン上の創意工夫をご鑑賞ください。

第1部「EXPO'70 技術・デザイン・芸術の融合」では、5回の万国博覧会の概要を紹介しつつ、特に日本万国博覧会（大阪万博）について代表的な施設の図面等を通して、技術・デザイン・芸術の融合に向けた創造的な挑戦と努力の証を展示します。

会期：第1部 令和7年3月8日（土）～5月25日（日）

会場：文化庁国立近現代建築資料館

（東京都文京区湯島4-6-15湯島地方合同庁舎内）

主催：文化庁

協力：公益財団法人東京都公園協会

企画：文化庁国立近現代建築資料館

## ■ 会場構成

### Section 1. シンボルゾーン

- ① 丹下健三「基幹施設計画 大屋根・お祭り広場」
- ② 菊竹清訓「南広場」
- ③ 菊竹清訓「エキスポタワー・塔広場」
- ④ 大高正人「メインゲート」

### Section 2. パビリオン

- ⑤ 坂倉準三「電力館」
- ⑥ 村田豊「電力館水上劇場」
- ⑦ 村田豊「富士グループパビリオン」
- ⑧ 大谷幸夫「住友童話館」
- ⑨ 前川國男「自動車館」
- ⑩ 前川國男「鉄鋼館」

### 中央円形

- ⑪ 万博会場マップ
- ⑫ 建築家収集の万博関連書誌（村田豊旧蔵書誌、大高正人建築設計資料、木村俊彦構造設計資料、大高正人旧蔵書誌、坂倉準三旧蔵書誌、川添登旧蔵書誌等）

### 映像（展示室内・ロビー）

- ⑬ オーラルヒストリー 木村俊彦 一住友童話館 構造設計についてー
- ⑭ オーラルヒストリー 村田豊 一富士グループパビリオンについてー

## 会場写真



⑮ オーラルヒストリー 村田豊 一電力館水上劇場について—

⑯ イントロダクション

#### ■ グラフィックデザイン

ポスター (B2版 片面カラー) 300部  
チラシ (A4判 両面カラー) 10,000部  
ハンドアウト (B5判8頁) 2,000部  
デザイン MIDORIS

#### ■ 教育普及 (年度内開催分のみ記載)

シンポジウム: テーマ「EXPO'70 (大阪万博) を回想し、再考する」、パネラー「大阪万博の会場計画」田路貴浩 (京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授、「お祭り広場のデザイン」前田尚武 (京都美術工芸大学 特任教授)、「世界の万博建築の系譜」小林克弘 (当館主任建築資料調査官・東京都立大学名誉教授)、参加者 40人

\*メディア掲載、来館者数、教育普及 (4月以降) に関しては、会期が年度を跨ぐため集計後、次年度 (令和7年度) 活動報告に掲載する。

### (3) 展覧会準備 1 (共催)

「美術館建築 - アートと建築が包み合うとき」の主催者である茅ヶ崎美術館の共催として準備を進めた。

#### ■ 開催概要

地域に根ざした建築設計で知られる山口 洋一郎の「茅ヶ崎市美術館」は、鳥が翼を広げたような屋根が特徴的です。この湘南の軽やかな空気をまとう当館を舞台に、場の特性を活かす“サイト・スペシフィックな芸術”として、5つの珠玉の「美術館建築」を取り上げます。

石見地方特産の石州瓦で建物全体を覆い、釉薬の違いにより玉虫色の建築を創り上げた内藤 廣「島根県芸術文化センター」。広島造船技術を活用した可動展示室を中心に、所蔵作品から着想を得たエミール・ガレの庭、10棟のヴィラ、レストランからなる海辺にたたずむ坂 茂「下瀬美術館」。瀬戸内の島につくられた銅製錬所の遺構を活用し、周囲の丹念なりサーチのもと、風・水・太陽を“動く素材”として扱い、自然エネルギーによる循環型建築を創り出した三分一 博志「犬島精錬所美術館」。環境・アート・建築が一体となり、上部に大きく開けた穴からうつろう自然を採り込む唯一無二の空間で知られる西沢 立衛「豊島美術館」。加えて、国内の建築資料のアーカイブを行う文化庁国立近

現代建築資料館が所蔵する3つの美術館、坂倉 準三「神奈川県立近代美術館」、ル・コルビュジェ「国立西洋美術館」、高橋 誠一+第一工房「群馬県立館林美術館」のオリジナル図面も公開します。

本展では、模型や設計図面に加え、初期アイデアスケッチ、建築素材、実験過程がわかる資料を通じ、建築家の思考を辿るとともに、その場所にその美術館がある意味を探っていきます。

主催: 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団

共催: 茅ヶ崎市、文化庁国立近現代建築資料館

会場: 茅ヶ崎市美術館

会期: 令和7年4月1日 (火) - 6月8日 (日)

### (4) 展覧会準備 2

令和7年度に向け、企画展「日本の万国博覧会 1970-2005 第2部 EXPO'75以降 ひと・自然・環境へ」の企画立案を進めた。

#### ■ タイトル

「日本の万国博覧会 1970-2005 第2部 EXPO'75以降 ひと・自然・環境へ」

#### ■ 企画概要

第2部「EXPO'75以降 ひと・自然・環境へ」では、日本万国博覧会 (大阪万博) の一部展示替えを行い、他の4つの博覧会に関する収蔵図面と資料を展示します。EXPO'70の技術を前面に出した総合テーマから、人間の居住、海や山などの自然、さらに地球の環境への配慮へと総合テーマが変化し、それに伴って、博覧会の会場計画の手法や建築デザインも変化を遂げる様子を展示します。

主催: 文化庁

協力: 公益財団法人東京都公園協会

会場: 文化庁国立近現代建築資料館

(東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内)

会期: 令和7年6月14日 (土) ~ 8月31日 (日)。

月曜日休館。但し、祝日の月曜は開館し、翌日休館。

開館時間: 10:00 - 16:30

#### ■ 展示内容

##### 1章 日本万国博覧会

丹下健三「基幹施設計画 大屋根・お祭り広場」、菊竹清訓「エキスポタワー」、菊竹清訓「南広場」、大高正人「メインゲート」、前川國男「自動車館」、前川國男「鉄鋼館」、坂倉準三「電力館」、村田豊「電力館水上

劇場」、村田豊「富士グループパビリオン」、大谷幸夫「住友童話館」

## 2章 沖縄国際海洋博覧会

菊竹清訓「アクアポリス」、村田豊「芙蓉グループパビリオン」、木村俊彦「水族館(楨文彦設計)」構造設計資料

## 3章 つくば国際科学技術博覧会

大高正人「エキスポホール」、大高正人「外国館」、菊竹清訓「外国館」、高橋航一+第一工房「迎賓館」、関連資料に、川添登「会場計画資料」

## 4章 国際花と緑の博覧会

「建築都市ワークショップ旧蔵『13のフォーリー』資料」

## 5章 日本国際博覧会 愛・地球博

菊竹清訓「グローバループ」、高橋航一+第一工房「瀬戸愛知県館」

## 2. 資料提供

### (1) 現物(貸出先:貸出資料 用途)

・茅ヶ崎市美術館:坂倉準三建築設計資料42点、菊竹清訓建築設計資料11点 共催展「美術館建築-アートと建築が包み合うとき」Art Museum Architecture: Where Art and Architecture Harmonize

### (2) 画像(貸出先:貸出資料 用途)

・団体:丹下マイクロ(立教大学図書館 他)美術館展覧会へ向けて企画展示調査69本(リール単位)  
 ・個人:吉阪隆正(野沢温泉ロッジ)学術研究及び国登録有形文化財の申請に向けた建築調査25点  
 ・個人:坂倉準三(坂倉及びベリアン関係の家具資料)学術研究調査76点  
 ・団体:吉田鉄郎(別府市公会堂)学術研究調査480点  
 ・個人:前川國男(華興商業銀行綜合社宅)学術研究論文掲載137点  
 ・個人:大高正人(栃木県保健福祉会館)学術研究調査26点  
 ・団体:こどもの国(こどもの国に係る資料)文化の振興に寄与する展覧会企画調査45点  
 ・団体:こどもの国(こどもの国に係る資料)学術研究調査(美術館紀要)249点  
 ・個人:坂倉準三(東急会館)学術研究調査126点  
 ・企業:菊竹清訓(スカイハウス)書籍『建具の手がか

り』(藤田雄介著)掲載4点

・個人:吉阪隆正(日仏会館、大島町立差木地小学校、大島町役場庁舎・図書館、大島町商工観光会館、呉羽中学校、宇宙科学館、江津市庁舎)33点、大高正人(村井学園体育館)2点、坂倉準三(東洋レーヨン基礎研究所)6点 学術研究調査41点  
 ・団体:大高正人(千葉県立中央図書館新築工事)73点、木村俊彦(千葉県立中央図書館 構造計算書)290点 所有者による施設の跡地利活用の検討363点  
 ・団体:木村俊彦(千葉県立中央図書館 工事写真アルバム3冊)所有者による施設の跡地利活用の検討65点  
 ・企業:坂倉準三(東急会館)1点、池辺陽(渋谷区復興計画案 中心地区計画透視図)1点、吉阪隆正(大島町復興計画水取山計画, PADIGLIONE GIAPPONESE(ヴェニス・ビエンナーレ日本館)2点、前川國男(晴海高層アパート)1点、吉田鉄郎(東京中央郵便局)1点、大高正人(立川幼稚園)1点 書籍月刊「東京人」2024年10月号掲載7点  
 ・企業:ヴェアスマート社旧蔵吉田鉄郎(日本の住宅図版)1点、前川國男(日本住宅公団晴海団地高層アパート)1点、菊竹清訓(プリヂストン殿ヶ谷第1アパート)1点 書籍『Rayner Banham, The New Brutalism (Ethic or Aesthetic? 1966)の日本語版出版』掲載3点  
 ・団体:こどもの国資料(児童館に係る資料)学術研究調査(美術館紀要)221点  
 ・個人:渡辺仁(渡辺仁建築事務所作品集)学術研究調査46点  
 ・企業:前川國男(プレモス7号アクソメ図)書籍『住居計画入門(仮)』7-3住まいの工業化:プレハブ住宅(権藤智之著)掲載1点  
 ・個人:丹下マイクロ(山梨文化会館)学術研究調査115点  
 ・企業:原広司(JR京都駅)掲載画像選定のための閲覧調査21点  
 ・個人:安藤忠雄(光の教会、水の教会、住吉の長屋)10点、原広司(ケルン・メディアパーク都市計画構想国際提案競技)1点 学術研究調査合計11点  
 ・個人:坂倉準三(ベリアンの家具に関する資料)学術研究調査68点  
 ・団体:大高正人(全日本海員組合本部会館)掲載展示9点  
 ・団体:前川國男(日本住宅公団晴海団地高層アパート)模型出展の製作調査7点  
 ・個人:安藤忠雄(水の教会)学術研究調査15点

- ・企業：坂倉準三（「ル・コルビュジエ、レジェ、ペリアン3人展」展示風景、東急文化会館竣工写真）展示『ル・コルビュジエ 諸芸術の総合 1930-1965 ーやがてすべては海へと至る』出版販売用図録掲載1点パネル掲載展示3点
- ・企業：原広司（游喜庵、フォリストハウス、原邸、栗津邸）書籍『住居に都市を埋蔵する』（原広司著）掲載26点
- ・企業：渡辺仁（晩年の渡辺仁肖像写真）『NHK Eテレ 美の壺（天井編）』放映1点
- ・企業：前川國男（プレモス七号型 他）財団機関紙『ビルディングレター 2月号』掲載（紙面及びWEB媒体）3点
- ・団体：こどもの国資料（児童館等）学術研究調査（美術館紀要）4点
- ・個人：堀口捨己（明治大学生田校舎2号館、明治大学和泉校舎大教室）学術研究シンポジウム講演50点
- ・個人：前川國男（プレモスに係る資料）学術研究調査27点
- ・企業：吉田鉄郎（馬場氏牛込邸）模型作成8点
- ・個人：丹下マイクロ（WHO（世界保健機構）本部）学術研究調査16点
- ・企業：原広司（新梅田シティ・スカイビル）書籍『ダイアログ〈危機〉の時代の長谷川逸子・原広司・伊東豊雄』掲載閲覧19点
- ・団体：こどもの国（A地区児童遊園・児童館）1点、菊竹清訓（林間学校）2点 60周年記念「建築（散策）ガイド」掲載3点
- ・個人：坂倉準三（羽島市庁舎）学術研究調査55点
- ・個人：丹下マイクロ（山梨文化会館）修士論文掲載及び発表12点
- ・個人：大高正人（広島市基町団地計画設計図）39点
- ・団体：菊竹清訓（ブリヂストン・タイヤ久留米共同住宅 他）文化財保護活用の研究調査133点
- ・個人：吉阪隆正（「樋口邸（ひ邸）」）建物所有者による修繕工事21点
- ・団体：渡辺仁（晩年の渡辺仁肖像写真）熊本大学五高記念館内「熊本大学キャンパスミュージアム構想」インフォメーションセンターパネル掲載展示1点
- ・個人：吉阪隆正（浦邸）学術研究調査点1点
- ・団体：大高正人（広島基町団地（写真アルバム））『アートギャラリーミヤウチ』企画・展示に係る基礎調査144点
- ・企業：坂倉準三（国立西洋美術館工事写真）新設資料館「森のギャラリー」常設展示（モニター等へ画像撮影）放映使用29点
- ・団体：大高正人（千葉県立中央図書館新築工事）5点、木村俊彦（千葉県立中央図書館構造計算書）7点『JSCA 千葉 新年会記講演会』放映及び冊子販売12点
- ・個人：坂倉準三（1937年パリ万国博覧会日本館）19点、吉阪隆正（ヴェニスビエンナーレ日本館1956）17点、前川國男（熱海前川別邸）10点 学術研究調査46点
- ・個人：坂倉準三（羽島市庁舎）学術研究調査34点
- ・団体：菊竹清訓（スカイハウス）文化庁補助金事業「リビング・モダニティ 住まいの実験1920s-1970s」展示カタログ掲載1点パネル掲載展示4点
- ・企業：前川國男（日本相互銀行砂町支店）所有者による現状有姿にて当該土地建物の売買契約61点
- ・団体：こどもの国（児童館・児童遊園書類及び工事写真）学術研究調査（美術館紀要）5点
- ・個人：坂倉準三（タイ国文部省職業教育学校25校）学術研究調査34点
- ・企業：坂倉準三（タイ国文部省職業教育学校25校）展覧会「建築家・阿部勤のいえ展 暮らしを愉しむデザイン展」図録掲載1点パネル掲載展示1件
- ・企業：原広司（原広司氏オーラルヒストリー映像資料）「お別れ会」動画放映4点
- ・企業：国立近現代建築資料館（展示室内観写真）茅ヶ崎市美術館『美術館建築-アートと建築が包み合うとき』展の公式図録兼書籍「美術館建築年表」掲載1点
- ・文化財第二課：菊竹清訓（スカイハウス図面）文化財建造物調査247点
- ・企業：原広司（JR 京都駅ビル、新梅田シティ・スカイビル）書籍『ダイアログ〈危機〉の時代の長谷川逸子・原広司・伊藤豊雄』掲載8点
- ・個人：菊竹清訓（館林市庁舎図面）学術研究調査171点
- ・団体：吉田鉄郎（別府市公会堂）市制100周年記念事業『別府市誌』通史編図鑑編デジタル版（日本語及び英語版）掲載12点
- ・団体：こどもの国（児童館、児童遊園書類及び工事写真）学術研究調査（美術館紀要）5点
- ・個人：こどもの国資料（A地区児童遊園・児童館）28点、坂倉準三（ディーゼル博士記念石庭）74点 学術研究調査102点
- ・企業：大高正人（全日本海員組合本部会館）常設展示パネル展示等掲載1点

- ・個人：菊竹清訓（館林市庁舎図面）学術研究調査171点
- ・団体：菊竹清訓（ブリヂストン・タイヤ久留米共同住宅 他）文化財保護活用の研究調査133点
- ・個人：坂倉準三（東急会館・東急文化会館）「（仮）断面図でわかる建築の魅力」基礎調査80点
- ・団体：渡辺仁（晩年の渡辺仁肖像写真）熊本大学五高記念館内「熊本大学キャンパスミュージアム構想」インフォメーションセンターパネル掲載展示1点
- ・ICOM: 坂倉準三（新宿西口広場地下駐車場、構内内観パース）2点、吉阪隆正（ヴェニス・ビエンナーレ日本館）1点放映3点

### (3) 資料閲覧及び複写の提供

資料閲覧及び複写の提供実績の概要は、以下のとおりである。

#### ア. 閲覧実施件数及び閲覧点数の実績

- ・実施件数：67件〔レファレンス及び未寄贈資料（借用中）の取次のみ含む〕
- ・坂倉順三（飯箸邸、人形町フォレストビルエレベーター周り意匠図面、東名高速道路牧ノ原サービスエリア、「ル・コルビュジエ×日本 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に」オーラルヒストリー映像、渋谷駅、東急会館、新宿西口広場地下駐車場工事概要及び構内内観パース、藤木忠善撮影写真、パリ万博写真、神奈川県立近代美術館写真、国際文化会館の最初の設計案及び立面図平面図デジタルデータ）
- ・丹下マイクロ（1971年以前資料、オランダ大学、オランダ理工大学、オランダ総合大学・病院及び寮、公文書、技術図面、アルジェリア大学の初期のスケッチとレポート、東京計画1960マスタープラン画像著作権、丹下健三のオフィスの連絡先、丹下自邸、成城ヴィラ、内田道子氏アーカイブ、トリエステ地域開発ガイドライン、広島平和資料館）
- ・池辺陽（渋谷区総合計画）
- ・吉阪隆正（浦邸、ヴィラ・クックウ、樋口邸、三沢邸、吉阪氏またはU研究室設計の住宅作品平面図、ヴェニス・ビエンナーレ日本館）
- ・大高正人（千葉県中央図書館、千葉県中央図書館（戸田建設）、東名高速道路牧ノ原サービスエリア、施設計画図面他、事務所資料、広島基町団地、広島復興に係る図面資料、坂井出人工土地の説明をする大高正人写真、資料群内スナップ写真、鬼頭梓肖像写真、資料群の複写物及びデジタル画像の提供確認、福島県立美術館、著作権処理方法、設計担当者について、三春町歴史民俗資料館及び鎌倉県立近代美術館鎌倉別館の「現場代理人」について、水沢農協、千葉県立中央図書館写真及び竣工写真、栃木県庁舎、千葉県立中図書館家具、坂井出人工地盤プラットフォーム）
- ・菊竹清訓（東光園に係る図面資料一式、スカイハウスアイソメ図及び建物概要の掲載許可、著作権取り継ぎ依頼、新建築（1958年1月号）掲載スカイハウス写真著作権確認、レム・コールハース/ハンス・ウーリッヒ・オプリスト「Project Japan」Kiyonori Kikutake KIC プロジェクト写真の複製権請求、マリンシティ、層状構造モジュール、パサデナハイツ、アクアポリス画像都城市民会館、ホテル COSIMA、銀座テアトルビル、出雲大社庁の舎、スカイハウス図面、三菱重工業㈱撮影のアクアポリス写真撮影者許諾確認）
- ・高橋誠一（佐賀コロニー、帝都信用金庫芦花公園駅前支店）
- ・前川國男（耐震技術に関する資料、帝室博物館懸賞設計応募案、木村産業研究所、国立国会図書館新館、前川自邸、神奈川県立図書館・音楽堂、埼玉県立博物館、京都美術館、国立西洋美術館新、紀伊国屋書店、東京文化会館、東京海上ビル本館、晴海アパートインテリアの写真、堅管露出シャフト写真）
- ・原広司（梅田スカイビル及び京都駅サイン入り写真、慶松幼稚園、新梅田シティスカイビル、内子町立大瀬中学校初期スケッチ、栗津邸）
- ・堀口捨己（大阪美術館透視図、朝倉氏伝授『君台観左右帳記』写本、資料保存場所について）
- ・竹山実（チャンネルタワーの階段に係る資料）
- ・公共住宅に関する研究に関する資料（公共住宅の設計及び計画に関する資料、公共住宅政策に関する資料、公共住宅の制度等に関する資料、その他公営住宅を含む資料）
- ・NAMA 設立の経緯及び背景について（収集方針、国外資料所蔵機関との連携、近年の建築文化振興の動き「文化芸術推進基本計画（第2期）」他）
- ・「文化財の護り方」（文化財の保存・管理・活用による経済的・社会的価値の創出）
- ・建築アーカイブズにみられる社会教育施設との連携（複合連携）について調査
- ・日本の文化財作品、ドイツ・ケルンのオスタシアティッシュ美術博物館の文書、図面、または通信、ローマやケルンの文化施設に携わった建築家の吉田磯谷や大橋良美の作品及びフランス・ニースの丹下健三のアジア美術館の作品等に関するアーカイブの有無、文書の入手可能性に関するガイダンスや情報
- ・書籍寄贈の問合せ

- ・建築資料研究社刊行『建設図解事典』『工的事典』
- ・過去展示図録「ル・コルビュジエ×日本 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に」の複写依頼4件

[閲覧に供した資料点数：2,987点]

資料群別の実施件数

- ・坂倉準三建築設計資料：24件691点
- ・丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルム：3件173点
- ・吉阪隆正+U研究室建築設計資料：3件75点
- ・大高正人建築設計資料：6件496点
- ・菊竹清訓建築設計資料：13件134点
- ・こどもの国建築関係資料：2件76点
- ・吉田鉄郎資料：1件14点
- ・高橋訖一・第一工房資料：1件31点
- ・前川國男建築設計資料：6件527点
- ・原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料：4件634点
- ・安藤忠雄初期建築資料：3件86点
- ・堀口捨己資料：1件50点

#### 1. 複写の提供実績

- ・提供件数：1件  
前川國男（日本住宅公団晴海団地高層アパート）7点

#### 3. 近現代建築アーカイブズ講習会

実施せず。

#### 4. 『国立近現代建築資料館紀要』第4号刊行

当館の収蔵資料に関する情報と、館職員や協力者の調査研究成果の公開について、研究論文や資料紹介等を掲載する『国立近現代建築資料館紀要』第4号を令和6年12月にオンラインと印刷（A4判、59ページ）の両方で刊行した。逐次刊行物としてISSNを取得している（ISSN 2436-6757（オンライン）ISSN 2436-6765（印刷））。第1～3号と併せてJ-Stageに連載し、安定して長期公開を行う体制を整えた。内容は以下のとおりである。

##### ・論文

文化庁国立近現代建築資料館 [NAMA] 10周年記念アーカイブズ特別展「日本の近現代建築家たち」に関する企画の経緯と展覧会の特徴（小林克弘、小池周子、門間光、王聖美）

##### ・活動報告

旧館林市庁舎の保存・継承・活用における文化庁国立近現代資料館収蔵資料の活用の可能性について（橋本純）

文化庁国立近現代建築資料館 [NAMA] 開館10周年展：過去10年間の展覧会資料整理報告（小池周子）

文化庁国立近現代建築資料館の川添登資料、特に白井晟一関連資料について（木原天彦）

文化庁国立近現代建築資料館における資料整理手順の紹介—2023年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学会）短期コースに参加して（秋岡安季）

##### ・資料紹介

菊竹清訓建築資料のアーカイブズ構築の現状報告（青山（高瀬）道乃）

堀口捨己建築設計資料の寄贈受け入れ（青山（高瀬）道乃）

##### ・報告

大谷幸夫資料 油粘土模型から発生する揮発成分の調査について（千徳佐和子、塚田全彦）

##### ・年次報告

令和5年度国立近現代建築資料館活動報告

#### 5. 収蔵資料検索システムの公開・運用

令和3年6月に公開した収蔵資料検索データベース（<https://db.nama.bunka.go.jp>）を運用している。収蔵する資料群の概要公開（21資料群）、ファイル（図面筒、図面フォルダ等）レベルまでの目録公開（14資料群）、アイテム（個別の図面や資料）レベルまでの目録公開（9資料群）、サムネイル画像の公開（一部：5資料群）をしている。データベースサーバの管理は（株）vwwに委託した。

#### 6. 資料のデジタル化

令和2年度から、一貫した仕様でのデジタル化作業をとりまとめて実施している。令和6年度は1,972点について、スキャナによる高精細デジタル化を行った。

10\_大高正人資料566点

15\_菊竹清訓資料682点

23\_高橋訖一・第一工房資料520点

24\_前川國男資料204点

## 7. 地方自治体への支援・助言

### (1) 館林市民センター（旧・館林市庁舎）の利活用検討支援

前年度に引き続き、「館林市民センター（旧館林市庁舎）」（以下、旧市庁舎）の利活用支援を行った。

2024年度は、前年に引き続き、菊竹清訓建築設計事務所のOBで、世界的に知られる建築家・伊東豊雄氏を招いて、講演会を行った（2025年1月26日）。

加えて、館林市が「官民連携まちなか再生推進事業」として、「館林駅東エアプラットフォーム」を構築した。当館は、前年度からの支援の継続を求められ、オブザーバーとして参加した。

### (2) 神奈川県立図書館・前川館（当該建物）の展示方法検討への協力

神奈川県教育委員会（以下、委員会）は、新県立図書館の建設にあたり、広く県民から愛されてきた前川國男設計の当該建物を壊すことなく、耐震改修を行い、「前川國男館」と名付け、積極的な保存活用を目指している。そして、当該建物内に、前川國男ギャラリー（仮称）を設け、当該建物及び建築家・前川國男の関連資料の展示を検討しており、については、建築資料の展示方法や展示条件などの助言を当館に求めてきた。資料館職員が現地へ赴き、当該建物の視察及び関係者との打ち合わせを経て、助言を行った。

## 8. 海外の展示施設や教育施設への協力と交流

2024年12月3日～6日「ICAM 香港会議」に情報係主任建築調査官が参加するとともに、海外での交流を図り、当館の設置目的及び役割についてプレゼンテーションをとおして説明を行った。

- ・海外の美術館・博物館への展示資料の提供  
米国議会図書館：過去から堀口捨己展までの図録一式送付。

## Ⅲ. 情報収集

### 1. オーラルヒストリーの作成

高橋航一・第一工房資料の理解を補完するものとして、第一工房創設時から1986年まで在籍した林昭男氏にインタビューを行い、アーカイブ用ノーカット版（約100分）及びダイジェスト版（約30分）の映像を作成した。

収録日：令和7年1月16日

収録対象：林昭男（第一工房元所員）

アドバイザー：袴田喜夫、伊原洋光（第一工房元所員）

聞き手：橋本純（当館主任建築調査官）

収録時間：約120分

収録場所：林昭男氏自宅

製作者：青山真也

高橋航一との出会いから第一工房立ち上げの経緯、在籍中の作品（佐賀県立図書館、浪速芸術大学設計競技一等案、大阪芸術大学塚本英世記念館など）、組織としての第一工房の特異性、林氏から見た高橋航一の印象や作風について、インタビューを行った。

### 2. ギャラリートーク記録映像の制作

令和6年度「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」展（2024年8月9日～10月27日）で普及事業として行われたギャラリートークを収録し、編集、公開した。ギャラリートークは、堀口捨己建築アーカイヴズとして当館に資料をご寄贈され、堀口捨己研究の第一人者でもある藤岡洋保先生を迎えツアー（回遊）式で行われた。資料群の来歴や、設計図面の分析からわかったことが語られている。文化庁公式YouTube「Bunkachanel」にて公開している。

- ・令和6年度「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」展 ギャラリートーク  
講師：藤岡洋保（東京工業大学名誉教授）  
撮影協力：東京科学大学 環境・社会理工学院 建築学系 山崎鯛介研究室  
収録：2024年9月／26分49秒

### 3. オーラルヒストリーの編集と公開

「日本の万国博覧会 1970-2005」展企画に際して、下記の4本に関して過去に制作したオーラルヒストリーを再編集し、展示活用を行った。文化庁公式YouTube「Bunkachanel」にて公開している。

- ・「オーラルヒストリー 木村俊彦  
—住友童話館構造設計について—  
出演：木村（伊藤）久枝、渡辺邦夫、佐々木陸朗、浜田英明  
収録：2019年（編集2025年）／13分11秒
- ・「オーラルヒストリー 村田豊（1/3）  
—富士グループパビリオンについて—  
出演：川口衛、宇野求、永野宏、村田あが  
収録：2017年（編集2025年）／23分37秒

- ・「オーラルヒストリー 村田豊 (2/3)  
—電力館水上劇場について—  
出演：川口衛、宇野求、永野宏、村田あが  
収録：2017年(編集2025年) / 11分23秒
- ・「オーラルヒストリー 村田豊 (3/3)  
—芙蓉グループパビリオンについて—  
出演：川口衛、宇野求、永野宏、村田あが  
収録：2017年(編集2025年) / 15分14秒

#### 4. 新規資料群受入に向けた調査及び検討

新規資料群の受入に向けて、2024年度は7件の寄贈打診に対し調査を行った。

## IV. 調査研究等

### 1. 我が国の近現代建築に関わるポーン・デジタル資料の継承に関する調査

調査業務受託者：Amanek 株式会社

調査実施期間：令和6年10月～令和7年3月

〔調査の背景と目的〕

建築設計は長らく紙媒体での情報伝達を主としてきたが、近年はデジタルツールを用いて行われることが一般的になった。この変化に伴い、建築設計資料もポーン・デジタル資料が急速に増加している。しかし、長期保管に対する手法及び実績が蓄積されている紙資料と異なり、デジタル資料は加速度的に進む技術発達の中で記憶媒体の更新が激しいため、その長期保管方法が確立されていない。よって、資料の滅失や読み取り方法を失う危険性が高い。

文化庁国立近現代建築資料館が収蔵を進めている建築家及び建築設計事務所の資料群においても、電子化以降の資料は滅失の危険性がある。ポーン・デジタル資料は、現状の収集方針には記載されていないものの、収蔵資料の評価や理解を補完するものが多く含まれ、その滅失は収蔵資料の価値を損なうことに繋がる。よって、ポーン・デジタル資料の保護と継承は喫緊の課題である。

デジタル資料の継承方法について、文化庁国立近現代建築資料館では令和2～4年度委託事業として「我が国の近現代建築に関わる構造資料及びその電子化継承に関わる調査」を実施し、建築資料の中でも電子化が先行する構造家資料の継承方法について調査を行った。しかし、意匠分野へ適用するには不十分な面があること、更に当該調査は構造家本人及び構造設計事務所等、

きわめて近い関係者が継承方法に焦点が当たっており、アーカイブズ機関に譲渡されたあとの長期保管については未検討である。よってその成果を足掛かりとして、意匠分野へ適用するにあたっての補強やアーカイブズ機関への収蔵を前提とした実践的な手法の構築を目指す。

なお、当該調査の実施報告書は文化庁国立近現代建築資料館 Web ページにて公開している。

## 2. 角田栄資料調査及び国立近現代建築資料館における日記資料の整理・公開に関する提言

調査業務受託者：国立大学法人東京藝術大学

調査実施期間：令和6年8月～令和7年3月

〔調査の背景と目的〕

文化庁国立近現代建築資料館へ寄贈された角田栄資料の多くは、写真アルバム、スケッチ帳、日記帳等の個人資料であるが、海外視察時の日誌や写真アルバムの他、大蔵省営繕課の職員名簿などは一次資料としての史料価値が高い。角田資料92点のデータベース公開のための情報収集を目的として、詳細な目録を作成しデジタル化を行う。

また、角田資料には、手帳や手紙などの個人属性の強い資料が多く存在することから、日記などの資料の公開に向けて、関係者許諾のあり方や公文書館など先行事例を持つ施設の方針などを参考にしつつ、適切な公開方法を検討し、提言することを目的とする。

なお、当該調査の実施報告書は文化庁国立近現代建築資料館 Web ページにて公開している。

## V. 委員会

### 1. 運営委員会

令和6年度委員の委嘱及び開催せず。

### 2. 小委員会

令和6年度委員の委嘱及び開催せず。

## VI. 運営

### 1. 施設の充実

実施せず。

### 2. 広報・広聴

#### (1) 資料館ウェブサイト

ウェブサイトの保守管理をアクシオヘリックス(株)に委託して運用した。館の概要、閲覧等利用の案内、展

覧会の開催、開館・閉館の予定等を告知するとともに、刊行物のデジタルファイル等を掲載した。

## (2) 文京ミュージズネットマップ2024-2025

- ・文京区内の美術館・博物館等のマップである標記に情報を掲載した。
- ・令和6年度文京ミュージズネット全体会議 日時：令和6年6月7日(金)10時30分～会場：文京シビックホール会議室(文京区春日1-16-21文京シビックセンター3階)に参加した。
- ・12月19日開催の「文京ミュージズフェスタ2024」に参加し、文京区シビックセンター内展示室にて閲覧用図録設置及びポスター掲示、パンフレット配布を行った。

## (3) 上野ミュージアムウィーク2024

- ・館内でのポスターの掲示、チラシの配布及び正面玄関へのぼり旗設置を行った。
- ・チラシ、ウェブサイトへ掲載する情報の提供や校正を行った。

## (4) アンケート調査

令和6年度企画展「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」の来館者に対して、展覧会の評価等に関するアンケート調査(任意)を実施した。

## 3. 研修参加

アーカイブズ管理に対する職員の能力向上のため、以下の研修に参加した。

- ・国立公文書館 アーカイブズ研修Ⅰ(基礎コース)  
令和6年8月19日(月)～8月23日(金)  
参加者：秋岡安季
- ・国立公文書館 アーカイブズ研修Ⅲ(専門職員養成コース)前期  
令和6年9月9日(月)～9月13日(金)  
参加者：秋岡安季
- ・国立公文書館 アーカイブズ研修Ⅲ(専門職員養成コース)中期・後期  
令和6年10月7日(月)～10月11日(金)、11月18日(月)～11月22日(金)  
参加者：王聖美

## Ⅶ. 予算

### 令和6年度予算額

近現代建築資料等の収集・保管 137,294千円

## Ⅷ. 組織

### 令和6年度職員名簿

館長(文化庁企画調整課長)	寺本 恒昌
館長補佐(企画調整課課長補佐)	伊野 哲也
副館長	山崎 智紀

### 【研究系】

主任建築資料調査官(収集担当) 橋本 純

主任建築資料調査官(企画担当) 小林 克弘

主任建築資料調査官(情報担当)

ジェームス・ランピアース

研究補佐員 秋岡 安季

研究補佐員 齋藤 菜那

(R6.6.1から)

研究補佐員 王 聖美

研究補佐員 久下 高豊

(R6.10.31まで)

研究補佐員 川瀬 優

(R6.12.1から)

### 【事務系】

事務室長 山崎 智紀

※副館長兼務

専門職 (空席)

事務補佐員 北島 真希子

事務補佐員 平川 千絵子

事務補佐員 室田 恵実

## Ⅸ. 年譜

### 令和6(2024)年

7月

「第1回 堀口捨己建築資料」贈与契約締結(31日)

8月

「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」(9日～令和6年10月27日)

11月

「第3回 大高正人建築設計資料」贈与契約書締結(27日)

## 令和7(2025)年

### 2月

「みんなの建築大賞」推薦委員会主催 第2回「みんなの建築大賞」大賞授与式(12日) ※文化庁協力

「第1回 大谷幸夫建築設計資料」贈与契約書締結(27日)

### 3月

「日本の万国博覧会1970-2005」第1部 EXPO'70 技術・デザイン・芸術の融合(8日～令和7年5月25日)

「第4回 高橋訖一・第一工房資料2024年贈与資料」贈与契約締結(24日)

---

文化庁国立近現代建築資料館紀要 第5号

2026(令和8)年3月31日 発行

編集・発行：文化庁国立近現代建築資料館  
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内  
電話 03-3812-3401  
E-mail: nama@mext.go.jp  
<https://nama.bunka.go.jp/>

制作：美学出版合同会社  
デザイン：右澤康之

非売品

---

**Bulletin of  
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs  
vol. 5**

Published: March 31, 2026

Edited & Published by:

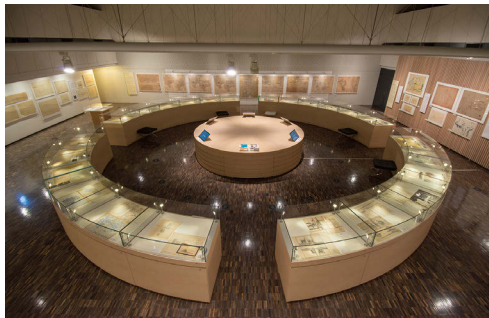
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs  
4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8553, Japan  
Phone: +81 (0) 3-3812-3401  
E-mail: nama@mext.go.jp  
<https://nama.bunka.go.jp/>

Production by: Bigaku Shuppan LLC

Design by: UZAWA Yasuyuki

Not for sale

©2026 Agency for Cultural Affairs



**National Archives of Modern Architecture,  
Agency for Cultural Affairs**